

111 (谷地)諏訪神社 [(やち)すわじんじゃ]

表111-1

神社名	諏訪神社	所在地	利根郡川場村谷地353
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 諏訪神社
主祭神	建御名方命	神事	春の祭典(4/2)、愛宕山火祭(10月第1土曜)
創立・沿革	神龜2年(725)造立、古い棟札には本尊を単に尊神とし、彫刻者は兵藤、その他に藤原政氏という名があったという(『川場村の歴史と文化』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図111-1、写111-1)

川場村の公共施設が集まる中心部から少し北側、田畠が広がる平地部に独立した小高い愛宕山の南麓に鎮座する。公道から100m程奥に緩く登った先に「諏訪・武尊」(正徳2年(1712))と扁額の石鳥居を

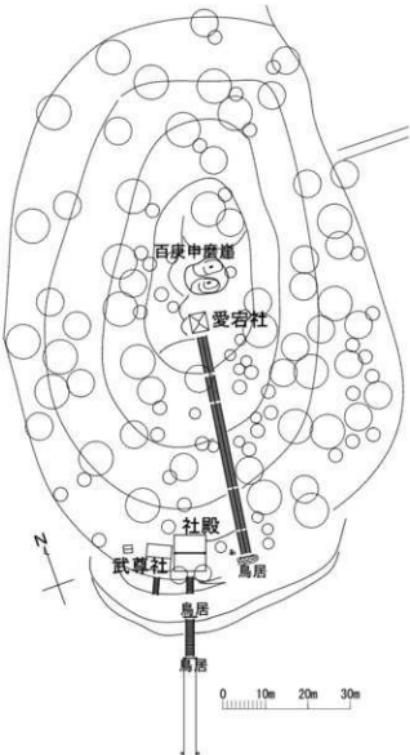


図111-1 配置図

抜け、石段を登り、更に「八幡・武尊・愛宕・赤城」の扁額の石鳥居(宝永2年(1705))を抜けた先が境内となる。その先石垣の上に杉の大木を左右配し、巨木の間に見上げるように覆屋が建ち、内部に本殿が置かれている。覆屋の西側には、小さな覆屋の中に社殿と幾つかの末社が、右側には石宮が並ぶ。東側の外れに真新しい「愛宕社」と掲げられた石鳥居を潜り、長い木段を160段程真っすぐに登ると、愛宕山の頂上に愛宕社が鎮座する。愛宕社の裏には大きな岩があり「庚申」の文字が多数刻まれており、石宮も2基据えられている。

由来および沿革

神龜2年(725)の造立と古い棟札にあったとされる。明治40年(1907)、宇久保の武尊神社及び同境内末社神明宮を合祀、同年再び本社境内末社武尊社、須賀社、富士山の浅間神社、同境内末社武尊社、熊野社、神明社、須賀社、琴平舎、諏訪社、土神様、字吉芦熊野神社、字新井三島神社を合祀。境内末社には愛宕社、土神社、大雷社を置く。裏山頂の愛宕社は火伏の神として尊崇され、必ず扉は開け放たれているが、これは扉を閉めると村に火災が起ること言い伝えられているためである。神社には大蛇退治の伝説もある。



写111-1 境内全景

近年は愛宕山火祭りとして、10月第1土曜日に160段程の階段の両側に灯をともし祭りが行われる。

本殿（図111-2、表111-2、写111-2～111-7）

本殿は簡素な反り返った切妻瓦屋根の覆屋の中にある。建造は享和元年(1801)、昭和10年(1935)の災害時の修復再建に由来の記載もあるが、享和元年

(1801)の棟札も確認できている。一間社流造、平入で向拝が付き、浜床を廻す。覆屋内部の拭板の上に亀腹を廻し、地覆と腰長押、三手先腰組拳鼻付き、三方に擬宝珠高欄付の縁を廻し、彫刻脇障子、左右嗣羽目及び後ろ部分に脇障子同様に中国風の人物の浮彫彫刻を配す。向拝部分は麻紋様彫刻の角柱に、獅子及び狛の木鼻、海老虹梁部分は龍が丸彫りされ

表111-2 本殿

建造年代／根据	享和元年(1801)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.28m)、側面1間(1.18m)、向拝1間、板葺
工 匠	[大工]棟梁 吾妻郡小泉村白石相模原脅應、 小工 吾妻郡原町片桐治郎、吾妻郡小泉村白 石岩治郎、吾妻郡泉沢村青木音三郎、川場村 関鍊藏、小仁田村諸田長治郎、小仁田村町田 軍喜、武井張太郎 [袖]星野助八、小林左衛門	基 础	割石
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、長押、頭貫 [向拝] 角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎外]拳鼻付三手先(尾垂木付・実肘木付) [身舎内]平三斗 [向拝]連三斗(実肘木付)、 出三斗 [腰組]三手先、二手先 [向拝]連三 斗 [腰組]拳鼻付三手先
中 備	[身舎]本幕胶(影刻) [向拝]影刻(龍)	軒	二軒垂木、板支輪(影刻、彩色)
妻 飾	二重虹梁斗拱幕胶、笈形、燕懸魚、鰐、降懸 魚	柱 間 装 置	棟唐戸、板羽目
縁・高欄・脇障子 欄	三方轉縁、脇障子(影刻)、擬宝珠高欄、登高	床	拭板張
天 井	鏡板天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木、極彩色(本幕股、支輪、尾垂木、手挾、鰐、 降懸魚、垂木、向拝影刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	[外部]なし [内部]不明	材 質	不明
彫 刻	[身舎外部]虹梁(若葉、花)、木鼻(獅子)、拳鼻(尚)、隅尾垂木(龍、波)、本幕胶(栗鼠)、板支輪(花、波、水鳥、 扇子、团扇)、嗣羽目(故事)、小壁(不明)、脇障子(故事)、脇障子柱(菱紋様)、頭貫(菱紋様)、棟唐戸鏡板(不 明)、拳鼻(鴻)、笈形(若葉) [向拝]向拝柱(菱紋様)、正面(龍丸彫)、水引虹梁(若葉、紋様)、海老虹梁(龍)、 手挾(牡丹)、木鼻(獅子、狛)、降懸魚(花)		



写111-2 正面



写111-3 妻面



写111-4 向拝組物



写111-5 身舎側面



写111-6 向拝彫刻



写111-7 嗣羽目・脇障子

て左右に掛けられ身舎部分の木鼻がそのまま龍の頭となる。正面虹梁も若葉が深く掘られ、その上に中備部分に龍の丸彫が中央に、三斗で梁を受て二軒繁垂木、丸棒板葺の流造の屋根となる。側面は胴羽目、頭貫、棗股、支輪がそれぞれ彫刻され、出組に龍や波の尾垂木が重なり配す。妻の虹梁には若葉が

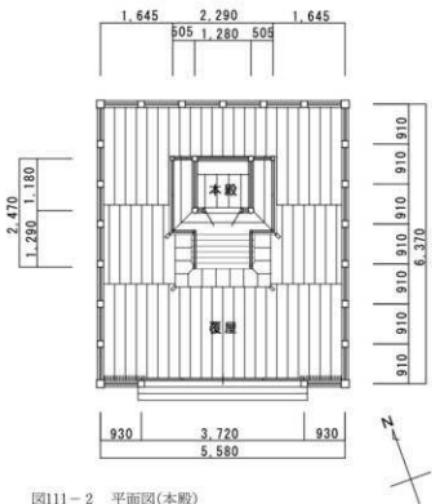


図111-2 平面図(本殿)

表111-3 愛宕社

建造年代／根拠	19世紀初期／建築様式	構造・形式	正面3間(2.66m)、側面4間(3.15m)、背面5間、方形造、鉄板葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	角柱、桁梁	組 物	なし
中 備	なし	軒	せがい造
妻 飾	なし	柱 間 装 置	格子戸、板壁
縁、高欄、脇障子	なし	床	拭板張
天 井	格天井(絵画)	須弥壇・扇子・宮殿	宮殿
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画(詳細不明)	材 質	不明
彫 刻	なし		



写III-8 側面



写111-9 内部



写111-10 魏

はっきりと彫られ、二重となる虹梁には浮き出るように花や葉が彫刻され、左右から中央へ長く伸び両方からの彫刻が一体となり繋がる程、妻飾りは大瓶束が立つ。手挾、支輪、幕股、尾垂木には白を基調として彩色あり。小ぶりではあるが、全体に丁寧に彫刻された江戸時代後期の特徴をなす本殿である。旧新治村の熊野神社と同じ大工が手掛けたと見る。

愛宕社 (図111-3、表111-3、写111-8≈111-10)

愛宕山の山頂に建つ愛宕社は、正面2.66m側面3.15mの鉄板葺の寄棟造、軒裏はせがい造。自然石の上に地覆を廻し角柱に板壁（当初なまこ壁）、正

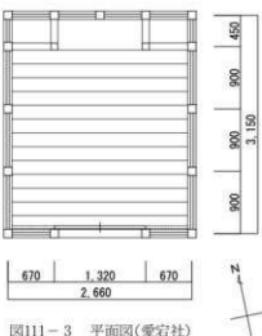


図111-3 平面図(愛宕社)

面は引分けの扉が常に開け放たれており、内部は格天井で所々に絵や文字が描かれている。奥に棚板を設け本殿が置かれ開放された中にご神体が3体祀られる。左側の棚には、火除けの守り神とする鰐瓦が対で飾られている。昭和57年(1982)発行の「川場村の文化財写真集」掲載写真には外壁はなまこ塗りの土蔵壁造であったが、現在は板葺である。建造年代については察する資料は今調査では見つからないが、朽ち具合や構造から江戸期と推定するが、新しい改造がうかがえる。

まとめ

昭和10年(1935)の「再建造諏訪神社々殿」の棟札には、神龜元年(724)建立と由緒が記され古い歴史の中にある神社である事がうかがえる。ただ、この棟札が裏斜面が崩れ社殿が損傷を受けたと言われてゐる際の札と思われるが、損傷修復が覆屋のみであるか本殿にまで及んでいるかは定かでない。享和元

年(1801)の棟札は、本殿の彫刻や構造からもこの本殿の棟札に間違いなく、同じ棟梁である旧新治村の熊野神社との比較や関わりも探求できれば面白いかと思う。諏訪社の覆屋横に祀られた1間流造の武尊社も同時期に建造と思われるが、今調査には含まれず機会があれば詳細を確認したい。山頂の愛宕社は川場村を一望できる絶好の場所にあり、農村風景を眺めるには最高のスポットであり、火伏の神としての言われも含め静かに村々を見渡し守りながらたたずんでいる。

(関 美和子)

【参考文献】

- 『川場村の歴史と文化』川場村誌編纂委員会 昭和36年
- 『川場村の文化財写真集』川場村の文化財写真集発行委員会 昭和57年
- 『川場村誌』川場村誌編纂委員会 平成28年
- 『利根郡誌』群馬県利根教育会 昭和5年(昭和45年再版)

112 (川額)八幡宮 ((かわはけ)はちまんぐう)

表112-1

神社名	八幡宮	所在地	利根郡昭和村川額1007
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 八幡宮
主祭神	兼田別命	神事	大祭(3月)、夏祭(7月)、諏訪祭(9月)
創立・沿革	永禄元年(1558)筑紫の宇佐八幡宮より分霊し創建、明治25年(1892)正遷宮、明治42年(1909)14社を合祀し昭和2年(1927)村社となる。同年拝殿と祝詞殿を改修、昭和13年(1928)社務所と垣を新造、集落センターを境内に建ててため舞殿を撤去した〔村誌久呂保〕。その後平成期に改修が行われている。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図112-1、写112-1)

八幡宮は昭和村西部、利根川河岸段丘上に位置する。県道255線宮貝戸バス停より南に200mほど進み西に降る道をたどると丁字路になり、左に折れると社殿が右側に見えてくる。敷地は南入り口を頂点に三角形の形に道路に囲まれ底辺は畑に接している。入り口の青く塗られた狛犬の間を通って石段を上がり、石鳥居を潜ると境内に入る。境内正面北側に拝殿本殿が連なり、右手前に手水屋左奥に社務所兼川額区民会館がある。入り口付近と社殿右側に石宮と石碑が並ぶ。かつては舞殿が割拝殿の形式で置かれていたが、移動され後に解体された。



写112-1 境内全景

由来および沿革

『村誌久呂保』と『川額村記録帳』によれば、永禄元年(1558)2月15日九州筑紫の宇佐八幡宮より初めて勅請したと伝えられ、寛永14年(1637)、文政5年(1822)、嘉永4年(1851)に宮社の修復、延宝2年(1674)、元禄14年(1701)、宝曆9年(1759)に逐次改築、安政5年(1858)、慶応2年(1866)に玉垣の修理、明治25年(1892)11月8日に正遷宮を行う。明治42年(1909)に10社と4社が合祀され、大正15年(1926)神社宝物の認可を受け、昭和2年(1927)に村社となり、拝殿と祝詞殿を改修。昭和3年(1928)に社務所を新設。昭和4年(1929)に玉垣を一新。昭和51年(1976)本殿塗装工事が行われる。昭和54年(1979)集落センター建築のため舞殿が撤去される。平成19年(2007)頃本殿基礎の改修工事が行われている。



図112-1 配置図

本殿 (図112-2、表112-2、写112-2～112-7)

本殿の造営は、棟札の写し、古文書、諸負証文、石碑と各所に記されていて、宝曆9年(1759)である。宝曆6年(1756)に建築計画がなされ、7年

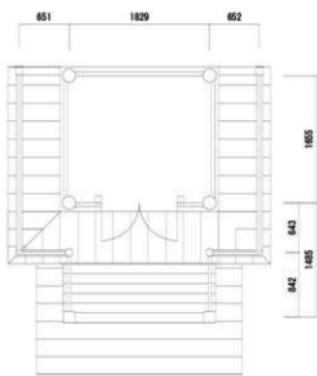


図112-2 平面図(本殿)

表112-2 本殿

建造年代／根拠	宝曆9年(1759)／棟札	構 造 ・ 形 式	一間社流造(1.82m)、側面1間(1.65m)、向拝1間、銅板平葺
工 匠	[大工]群馬郡金井村 岸織右包光 [小工]岸小五郎 板倉四郎左衛門	基 础	基礎 1段面取切石、コンクリート基礎
軸 部	[身舎]土台、丸柱、地長押、内法長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手扶	組 物	[身舎]尾垂木、実時木付三手先 [腰組]二手先積上連斗 [向拝]皿付大斗、実時木付出組
中 備	[身舎]彫刻嵌込、詰組 [向拝]彫刻藤股	軒	二軒繁垂木、支輪
妻 飾	虹梁斗拱(二重)、嵌込彫刻、彫刻束、蕉懸魚、降懸魚	柱 間 装 置	板戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子、浜縁	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、極彩色(嵌込彫刻、支輪)	飾 金 物 等	垂木: 小口金具、破風: 拝み、破風尻金具 長押: 潺金物(痕跡)
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]柱間(龍と雲、雷神、鶴)、内法長押(葡萄)、軒支輪(雲、龍)、木鼻(象)、中備(雲と紅葉 藤股に草花)、脇障子(龍)、縁下(波) [向拝]水引虹梁(唐草文様)、幕股(山鳥)、海老虹梁(唐草文様)、手扶(龍)、木鼻(獅子、象)		



写112-2 全景



写112-3 側面



写112-4 背面彫刻



写112-5 向拝虹梁



写112-6 妻軒



写112-7 身舎組物

(1757)に工事の請負契約、9年に完成している。社殿が2年弱で作られている事がわかる。その規模は正面1間1.82m、側面1間1.65mの1間社流造銅板平葺で、屋根には千木と鰹木が乗り、正面に1間の向拝が付く、三方に切り目縁が回され擬宝珠高欄と脇障子がつく。内部は一室でご神体を安置する段が1段ある。組物は、身舎は上部に尾垂木と実時木付三手先、妻虹梁に出組、縁下に二手先積上連斗、向拝は皿付大斗実時木付出組である。軒は二軒繁垂木で、妻飾りは二重虹梁出組・斗拱・手先として、彫刻束を置き、支輪と虹梁は彫刻で埋め尽くされている。彫刻は、土台上部から妻の先まで埋め尽くされていて、中でも同羽目の彫刻は大きく、左右に雲と龍、背面には雷神が雲に乗っている彫刻が嵌められ

ている。木鼻は獅子と象、向拝裏股は山鳥、手挟は龍、妻束は力神があしらわれている。縁の下にも彫刻が彫られ斗栱が積み重なっている。その他、本殿の玉垣に1間ごと全カ所に欄間彫刻がある。

まとめ

八幡宮の改修記録や沿革が古文書に多く残されていて裏付けがしっかりとしている。地域の文化水準と繁栄の賜物であろう。村内には江戸後期20年ぐらいの間に建てられた社殿が点在しているため、様式や彫刻を見比べる事ができる。中でも八幡宮は斗栱の連續性、軒支輪の彫刻と蛇腹支輪の併用など、彫

刻・組物共に進んでいて、村内唯一極彩色で塗られていた。現在は昭和年代に塗替えられている。同羽目の彫刻は、手挟や支輪と雲の表現が同じであり、当初からあったものと推定できる。古文書に書かれていること、時代の最先端の建築であったなど、大切にしたい文化財である。

(櫻澤 齊)

【参考文献】

- 『村誌久呂保』久呂保村誌編纂委員会 昭和36年
- 『沼田万華鏡 第24号』沼田郷土誌研究会 昭和59年
- 『川額村記録帳』竹内豊十郎 平成9年

113 千賀戸神社（ちかとじんじゃ）

表113-1

神社名	千賀戸神社	所在地	利根郡昭和村橡久保101
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 千賀戸神社
主祭神	日本武尊 千賀戸姫命	神事	春祭(4月)、夏祭(8月)・風祭(10月)
創立・沿革	創立年不明。橡久保村分村のおり大森神社と同神の日本武尊と千賀戸姫命を相殿して村の鎮守とした。峰の上には創建より前から愛宕神を祀る石宮があったが現在はない。現社殿を造営するにあたり、山の斜面を地域住民の手により開削し整地されたと口伝がある(明和5年(1768)『村誌久呂保』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図113-1、写113-1)

千賀戸神社は昭和村西部に位置し、県道255線釜沢バス停より南東の道を進んだ正面の山の中腹にあり、石段700段を登り鳥居を二つ潜ると境内に入る。石段途中に平らな部分があり左に広場があるが、ここはかつての舞殿跡と思われる。境内正面西向きに拝殿と本堂が連なり、左手に諏訪神社が石段

の登り口に向いて斜めに置かれている。山の丘陵地にあるので周りは雑木林に囲まれ、諏訪神社裏手と拝殿右に石祠が数基並んでいる。

由来および沿革

『村誌久呂保』によれば、創立年は不明である。神社裏山は愛宕山と呼ばれ、峰の上にはかつて石宮があり祀られていた。橡久保村分村の折、大森神社と同神の日本武尊と千賀戸姫命を相殿して、現在の地に移され。山の斜面を住民の手で開削され、明和5年(1768)大改修が行われ現社殿が造営された。昭和4年(1929)に大改修した記録があるが、拝殿と覆屋の物であろうと考えられる。現在の神社名は千賀戸であるが、棟札には近戸と記載しており、近戸と表したと思われる。



写113-1 境内全景

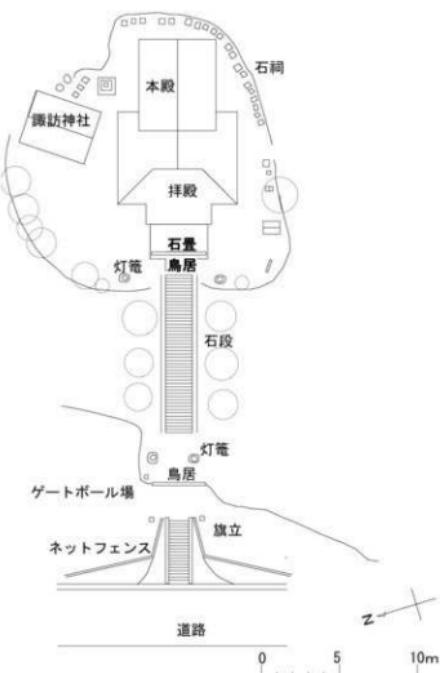


図113-1 配置図

本殿 (図113-2、表113-2、写113-2～113-7)

本殿の造営は、棟札には明和4年(1767)の記載、古文書には明和5年(1768)の記載があり、建造年はこの時期とみて良いと思われる。棟梁は妙義神社を手掛けた岸豊後守で年代的にも合致している。また、彫工は県内外に三代にわたり、多くの足跡を残す初代星野政八である。

その規模は正面1間1.12m、側面1間1.03mの流造柿葺で、正面に1間の向拝が付く、三方に切目縁が回され擬宝珠高欄がつき、内部は一室で御神体を安置する段が1段ある。

組物は、妻と柱上と縁の下に三手先、向拝に実肘木付出組である。軒は二軒繁垂木で、妻飾りは二重虹梁三手先斗栱で支輪と虹梁は彫刻で埋め尽くされている。軒虹梁は1本ごとに一手出ている。

彫刻は、土台上部から妻の先まで埋め尽くされている。中でも同羽目の彫刻は大きく、司馬温公の瓶割りの図、梅妻鶴子、ひさご仙人は銀杏木を材料として彫られている。木鼻は獅子と蚊龍、向拝幕股は

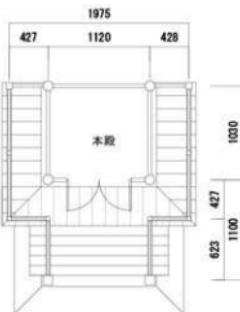


図113-2 平面図(本殿)

表113-2 本殿

建造年代／根拠	明和4年(1767)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.12m)、側面1間(1.03m)、向拝1間、柿葺、覆屋付
工 匠	[大工]大棟梁 群馬郡金井村 岸豊後守 [小工]群馬郡石原村 岸多七 [彫工]勢多郡花輪村 星野政八、勢多郡水沼村 助次郎	基 础	基壇1段切石、亀腹
軸 部	[身舎]土台、丸柱、地長押、内法長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]尾垂木、実肘木付三手先 [腰組]三手先 [向拝]皿付大斗、実肘木付出組
中 備	[身舎]彫刻嵌込、詰組 [向拝]本幕股	軒	二軒繁垂木、支輪
妻 飾	虹梁斗栱(二重)、嵌込彫刻、天邪鬼束、蕉懸魚、降懸魚	柱 間 裝 置	梶戸戸、板壁
緑・高欄・船障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子、浜縁	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木	飾 金 物 等	垂木: 小口金具、破風: 拝み、腰、破風尻金具向拝柱: 金襷巻、梶戸戸: 銅金物、辻金物、化粧金物
絵 画	なし	材 質	櫛、榧杏(嵌込彫刻)
彫 刻	[身舎]柱間(司馬温公瓶割りの図、梅妻鶴子、ひさご仙人)、向拝水引虹梁(梅)、向拝幕股(松)、向拝海老虹梁(唐草文様)、手挾(鳳凰)、向拝柱(地紋彫)、内法長押(地紋彫)、妻虹梁(菊、菖蒲、鶴)、木鼻(獅子、蚊龍)、縁下(雲龍)		



写113-2 全景



写113-3 側面



写113-4 妻



写113-5 身舎下部



写113-6 向拝



写113-7 海老虹梁・手挾

松、手挾は鳳凰、妻束は天邪鬼があしらわれている。縁の下にも彫刻が彫られ斗拱が積み重なっている。

彫刻の透彫り、斗拱の連続性、唐草絵様のレリーフ化が見られる事から江戸後期以降の建築であると推定できる。

まとめ

千賀戸神社はかつて、母乳の出ない母が御神米を頂きお粥にして食べるとお乳が出るようになると信仰され、沢山の参拝者があったと伝えられる。縁の下から妻先にまで及ぶ彫刻美、斗拱はすばらしく、妙義神社總門など県内に数多くの寺社建築を残して

いる岸豊後守が手掛けた社殿である。棟札により建造年も把握でき正在て、大棟梁岸豊後守の足跡を知る事ができる。同羽目の彫刻は、上棟時の文書に彫師政八と助次郎の名があり、建築当初からあったと考えられる。素木造の社殿でこれほどの彫刻があり、細工の細かい建物は村内には無く、これからも大切にしていきたい文化財である。

(櫻澤 齊)

【参考文献】

『村誌久呂保』久呂保村誌編纂委員会 昭和36年
『橡久保の足あと』新木二三以 平成6年

114 (貝野瀬)武尊神社 [(かいのせ)ほたかじんじゃ]

表114-1

神社名	武尊神社	所在地	利根郡昭和村貝野瀬1132
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 武尊神社
主祭神	日本武尊	神事	夏祭(7月)、風祭(8月・10月)
創立・沿革	創立年不明、承応3年(1654)に神領免許の記載があるので、それ以前と考えられる。江戸時代に当神社を管理していたのは京都六角堂住心上地流をくむ修驗派花巻寺であったと云われ、明治11年(1878)村社となった(『糸之瀬村史』)。		
文化財指定	武尊神社舞殿(村重文 昭和54年3月)		

位置・配置 (図114-1、写114-1)

昭和村役場より東方の貝野瀬区に位置する。片品川河岸段丘崖上に位置し県道より急な坂道を登ると左側に石段鳥居が見えてくる。境内は南西向きに開き参道正面に拝殿・幣殿・本殿が連なり、参道左には舞殿、本殿右隣に諏訪神社、本殿の東側から石宮が並び、奥には猿田彦大神、大神宮、摩利支天、稻荷大明神などのお宮が並んでいる。境内北西は杉林に囲まれ、南側・西側は道路になっている。



写114-1 境内全景



図114-1 配置図

由来および沿革

創立年は不明。中世、この地には貝野瀬屋敷(砦)があったと云われる場所である。その砦の鎮守として、若しくは、砦跡に創建されたと思われるが、それ以前からあった可能性もあり不明である。『糸之瀬村史』と『利根郡誌』によれば、かつては保宝高神社であった、その後、武尊神社と呼ばれるようになる。貝野瀬には日本武尊に由来である伝説が残されている。慶長19年(1614)に本殿は再建されたと伝えられ。公の書面として承応3年(1654)の神領免許之写(今回の調査では確認できていない)が残っており、江戸時代管理していたのは、六角堂住心院直末修驗派花巻寺である。明治9年(1876)上地され、明治11年(1878)9社を合祀、明治42年(1909)2社を合祀し村社となる。舞殿は昭和54年(1979)昭和村重要文化財指定となった。

本殿 (図114-2、表114-2、写114-2～114-7)

建造年代は棟札より寛延3年(1750)である。工匠は群馬郡有馬村斎藤知記と暮義である。一間社流造柿葺千鳥破風付で正面に1間の唐破風向拝とする。外部は木鼻・向拝虹梁をはじめ、土台上から縁までと、内法長押上部から妻先まで彫刻がある。同羽目

と脇障子と向拝幕殿の彫刻はないが、脇障子と幕殿部分には明らかな痕跡があり、取り外されている。同羽目もわずかな痕跡がある事から、嵌込彫刻があった可能性がある。組物は縁を二手先、屋根を三手先、向拝を連出三斗としている。全体に朱塗で塗装されていて、垂木と縁など部分的に黒色が塗られている。屋根は柿葺きで千鳥破風があり、棟に千木、鰹木が載せられている。妻飾りは虹梁が架けられ大瓶束を持ち、扱首は松と鶴の彫刻になっている。

向拝木鼻に象鼻を使っている事と水引虹梁唐草文様の形は18世紀中期の建築様式と見られる。

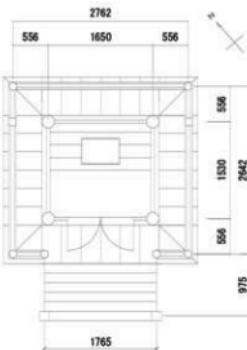


図114-2 平面図(本殿)

表114-2 本殿

建造年代／根拠	寛延3年(1750)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.65m)、側面1間(1.53m)、千鳥破風付、向拝1間唐破風付、柿葺、覆屋付
工 匠	[大工]群馬都有馬村 斎藤知記、群馬郡有馬村 斎藤暮義	基 础	切石
軸 部	[身舎]土台、九柱、地長押、内法長押・差、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]拳鼻・実肘木付三手先 [腰組]彫刻拳鼻付連二手先 [向拝]皿付大斗、実肘木付連出組
中 備	[身舎]彫刻幕殿・詰組 [向拝]なし(痕跡あり)	軒	二軒緊垂木、支輪
妻 飾	拌懸魚(三花)、降懸(燕・猪目)、虹梁斗拱大瓶束菱形付(一重)	柱 間 装 置	桟唐戸、板壁
緑・高欄・脇障子	四方切目縁、高欄、脇障子	床	板張
天 井	なし	須弥壇・眉子・宮殿	厨子
塗 装	朱塗、黒塗(向拝柱、一部彫刻)	飾 金 物 等	小口金具、長押・隅金具、化粧金具、破風板；拌み、破風尻金具、桟唐戸；一文字金具
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]妻(鶴と松)、妻虹梁(唐草文様)、中備(花文様)、支輪(雲と牡丹)、舟肘木と木鼻(渦)、内法長押(地紋様)、扉側(龍)、継下木鼻(獅子、渦)、継下支輪(草紋様)、継下柱間(雲獸) [向拝]水引虹梁(唐草文様)、海老虹梁(唐草文様)、木鼻(象、獅子)、手挾(牡丹)、妻(鳳凰)、実肘木(唐草文様)		



写114-2 全景



写114-3 側面



写114-4 向拝



写114-5 向拝組物と木鼻



写114-6 妻飾り



写114-7 屋根

拝殿・幣殿(図114-3、表114-3、写114-8~114-10)

建造年は不明である。建築様式から見て江戸時代末期から明治初めと推定する。伊勢湾台風により損傷したとの伝承があり昭和期・平成期にも手が加えられている。

正面5.02m側面6.0m入母屋造千鳥破風付鋼板平葺

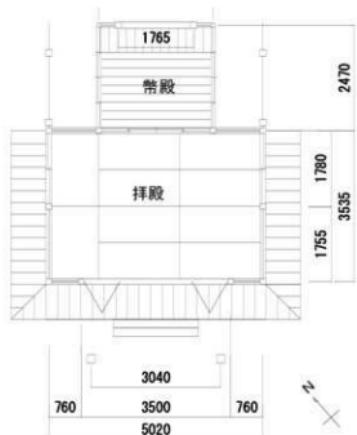


図114-3 平面図(拝殿・幣殿)

葺で1間の向拝が付き、幣殿や覆屋まで一体となっている。当初は茅葺で軒はせがい造で、本殿の損傷具合から見て早い段階から覆屋があったと思われる。全体に造りはおとなしく向拝に組物や棊股、虹梁が見られる。内部に装飾は無く、一室で板の間に疊敷、天井は竿縁天井としている。向拝と身舎が同時期であるとすると、向拝唐草文様が形的には古そうだが太く、渦が大きく目玉のようになっている事などから19世紀後期以降の物と思われる。

舞殿(図114-4、表114-4、写114-11~114-13)

建造年は「舞殿造立満願の証文」(『糸之瀬村誌』)

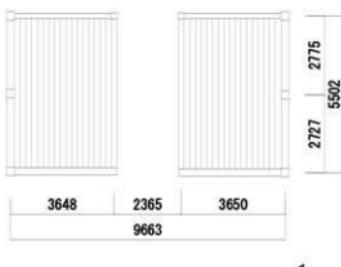


図114-4 平面図(舞殿)

表114-3 拝殿・幣殿

建造年代／根拠	19世紀後期／建築様式	構造・形式	正面5.02m、側面6.00m、入母屋造、妻入、向拝1間唐破風屋根、鋼板平葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 磡	基壇1段、切石、礎盤
軸 部	[身舎]土台、角柱、地長押、内法長押、桁 [向拝]角柱、水引虹梁、桁	組 物	[向拝]皿付大斗、実肘木付出組
中 備	[向拝]板棊股	軒	[身舎]一軒隕垂木、せがい造 [向拝]一軒隕垂木
要 飾	[身舎]木斜連格子	柱 間 裝 置	棟唐戸、板戸、板壁
締・高欄・船脛子	三方切目縁	床	[拝殿]疊敷 [幣殿]板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	杉、松、櫻
彫 刻	[向拝]水引虹梁(唐草文様)、板棊股(唐草文様)		



写114-8 全景



写114-9 側面



写114-10 向拝

表114-4 舞殿

建造年代／根拠	文政3年(1820)／古文書(『糸之瀬村誌』)	構造・形式	正面9.66m、側面5.50m、入母屋造、平入、銅板瓦葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]越後国三島郡出雲崎本町 和田善藏 他 8名	基 础	礎石
輪 部	角柱、腰貫、虹梁、貫、桁	組 物	なし
中 備 束		軒	せがい造、一軒疊垂木
妻 飾 板壁		柱 間 装 置	なし
縁・高欄・脇障子	なし	床	板張、土間
天 井	野地板表	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	松、杉、櫻
彫 刻	虹梁(唐草絵様)		



写真114-11 全景



写真114-12 側面



写真114-13 虹梁と軒

により文政3年(1820)頃とみられる。工匠は越後国三島郡出雲崎本町和田善三他8名と同証文に記載があるとあるが、現物は確認できなかった。

正面9.66m、側面5.50m入母屋造平入で、当時の位置は割拝殿の形式をとり参道をまたいで配置されていたが、戦後に現在の位置へ人力で移動された。当初の屋根は寄棟造の茅葺であり、軒もせがいのみの造りであったと思われる。舞台装置は近隣の川龍寺に保管されており、回り舞台や各種の装置があつたとされる。昭和54年(1979)に村指定重要文化財に指定されている。

唐草絵様がレリーフ化されており中央部まで若葉が伸びている事から江戸後期から末期と建築様式からも推定する。

まとめ

境内には、本殿の日本武尊、脇殿の諏訪神社及び10の末社が祀られ、背後遙か北方には武尊山があり山岳信仰の形態を色濃く伺える配置である。名前の由来の武尊山は古くから修験の場として開かれていた。当社殿が江戸時代には修験寺の管理になっていたことに背景がありそうだ。18世紀中期に近隣の神社も多く建築されており武尊神社もその一つで歴史は村内2番目に古い。続いて右隣に建つ諏訪神社も宝暦13年で村内3番目と当時の貝野瀬地区の隆盛が伺える。江戸中期の社殿を2社境内に抱える神社は他ではなく、価値ある神社である。

(櫻澤 齊)

【参考文献】

『糸之瀬村誌』糸之瀬村誌編纂委員会 昭和33年
『利根郡誌』群馬県利根教育会 昭和5年

115 小高神社（こだかじんじゃ）

表115-1

神社名	小高神社	所在地	利根郡昭和村糸井1295
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 小高神社
主祭神	日本武尊	神事	春祭(4月)、夏祭(7月)、風祭(8月・10月)
創立・沿革	創立年不明、「三代実録」に貞觀5年(863)5月9日「上野國正六位小高神社に從五位下を授ける」とある([三代実録])。また、上野國神名帳には「從一位小高明神」との記載がある。明治6年(1873)村社となる。江戸末期、現拝殿と現神楽殿を造営、明治14年(1881)図面による入札が行われ、明治16年(1883)本殿を建替え、昭和60年修復工事が行われ、神楽殿は星宿替えが行われている。平成11年(1999)神楽殿の補強工事が行われている。		
文化財指定	小高神社神楽殿(村重文 平成10年6月)		

位置・配置（図115-1、写115-1）

小高神社は昭和村糸井地区に位置し県道255号線沿い昭和東小学校の東隣に位置する。県道沿いから舞殿が見え、北に進むと石鳥居があり境内に入る。舞殿、拝殿、本殿の順に北を背に直線状に建つ、そのかなたには武尊山がある。拝殿東には社務所があるが現在は集会場として使われている。拝殿と社務所の間に石宮が並び、拝殿西側には山神宮と神奥藏があり、北側は松林になっている。

由来および沿革

「糸之瀬村誌」によれば、創立年は不明、小高神社一帯は石器や土器が多く出土していて古くから人々の生活の場であったと思われる。ここに村の鎮守として古くから祀られてきた。三代実録の中に小高神社の名前が見られ「貞觀5年(863)に從五位下を授く」とあるので、創建はそれ以前となる。本殿は明治14年(1881)、入札により明治16年(1883)に完成している。神楽殿が平成10年(1998)に昭和村指定重要文化財に指定される。

本殿（図115-2、表115-2、写115-2～115-7）

本殿の造営は、明治14年の入札の図面が2枚残っており、棟札には明治16年とあるので、年代は確定している。神明造との記載がみられるが、土台があ



図115-1 配置図



写115-1 境内全景

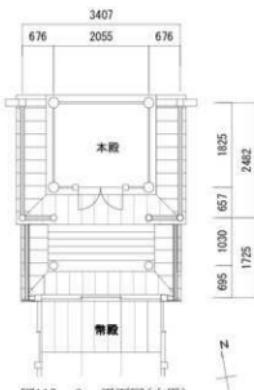


図115-2 平面図(本殿)

表115-2 本殿

建造年代／根拠	明治16年(1883)／棟札	構造・形式	一間社切妻造(2.05m)、側面1間(1.82m)、平入、銅板葺
工 匠	[大工]棟梁 沼田町 深津利芳	基 础	基壇3段切石
軸 部	[身合]土台、丸柱、地長押、内法長押、頭貫、	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒蓋垂木
妻 飾	丸束	柱 間 装 置	棟唐戸、落込板
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子、浜縁	床	板張
天 井	野地板表	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木	飾 金 物 等	垂木：小口金具、破風：破風戸金具向拝、長押：角金具、その他：小口金具
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	なし		



写115-2 全景



写115-3 側面



写115-4 妻



写115-5 身合下部



写115-6 縁 脇障子



写115-7 圖面

り掘立柱ではなく、千木も置き千木とみられるので
神明造りではなく切妻造と記載した。

正面1間2.05m、側面1間1.82mの切妻造平入銅
板葺で、屋根に千木と鰹木があり、三方に切目縁が
回され擬宝珠高欄と板脇障子が付く、浜縁にも高欄
が付いている。内部は一室で御神体を安置する段が
1段ある。

切妻造としたが、明治期に多く建てられた新しい
形の神明造の一種であると思われ、年代も確定でき
損傷も少なく、入札の様式も見て取れる価値ある本
殿である。

拝殿・幣殿 (図115-3、表115-3、写115-8～
115-13)

拝殿幣殿の造営年は不明であるが、平成15年(2003)

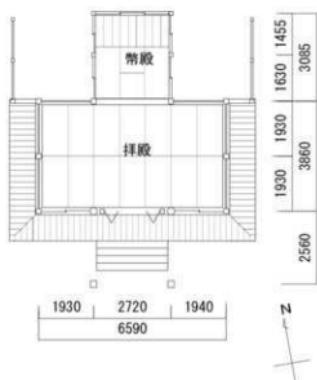


图115-3 平面图(拝殿・幣殿)

写115-3 押殿・幣殿

建造年代／根拠	江戸後期／建築様式	構造・形式	[押殿]正面3間(6.59m)、側面2間(3.86m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間唐破風付、銅板葺 [幣殿]正面1間(2.72m)、側面2間(3.08m)、切妻造、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎石、礎盤
軸 部	[身合]土台、角柱、地長押、内法長押、頭貫、虹梁 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身合]出組、三斗 [向拝]前方：出三斗2段、横方向：二手先 [幣殿]なし
中 備	[身合]板 [向拝]本幕板	軒	[押殿]二軒半繁垂木 [幣殿]一軒半繁垂木
妻 飾	[身合]虹梁、大瓶束	柱 間 装 置	[押殿]棟唐戸折戸、舞良戸、板壁 [幣殿]なし
縁・高欄・脇障子	[押殿]三方切目縁 [幣殿]なし	床	[押殿]疊敷 [幣殿]疊敷、板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、朱塗(鬼毛通)	飾 金 物 等	長押金具
繪 画	なし	材 質	杉
影 刻	[身合]木鼻(鴨)、虹梁(唐草文様)、棟唐戸(龍) [向拝]向拝柱(地紋彫)、水引虹梁(唐草文様)、海老虹梁(唐草文様)、木鼻(獅子)、幕板(龍)、手挾(牡丹)、鬼毛通(亀)		



写115-8 全景



写115-9 側面



写115-10 向拝



写115-11 向拝側面



写115-12 身合組物



写115-13 屋彫刻

の民間団体の調査の時に、文化3年(1806)の棟札が存在したとされるが、今回の調査では天井内部が確認できず見ることができなかった。建築様式的にもその頃であろうと推定できる。

拝殿は、正面6.59m、側面3.86mの入母屋造銅板葺で、正面に1間の唐破風向拝が付く、三方に切目縁が回され板脇障子がついている。内部は一室で疊敷、竿縁天井、幣殿は正面2.72m、側面3.08mの切妻造銅板葺で内部は拝殿より1段高い。拝殿天井と幣殿は改修がなされている。

組物は身合隅柱を出組、他柱を三斗とし、向拝前後方向を出三斗2段、横方向を二手先としている。彫刻は向拝付近に集中して配置され、幕板を龍、兎

毛通を亀、木鼻を獅子、手挾を牡丹、棟唐戸を龍としている。虹梁は唐草文様、向拝柱には地紋彫が施される。

向拝の水引虹梁の立体的な唐草文様や幕板部分の彫刻埋め込み、木鼻彫刻は方向を変えて横から正面に獅子が向くなど江戸後期から末期の様式が見て取れる。

神楽殿 (図115-4、表115-4、写115-14~115-16)

神楽殿の造営年は不明であるが、近くの武尊神社に同様の建物があり文政3年(1820)の建築とされているため同時期の建築と考えられる。舞殿・前殿との記載もあるが昭和村文化財の指定名称では神楽殿

表115-4 神楽殿

建造年代／根拠	江戸後期／建築様式	構造・形式	正面3間(11.17m)、側面2間(6.64m)、入母屋造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	コンクリート基礎(当初 基礎石)
軸 部	土台、角柱、虹梁、頭貫	組 物	なし
中 備	東	軒	せがい造、一軒半重垂木
妻 飾	板	柱 間 装 置	なし
縁・高欄・脇障子	なし	床	板張
天 井	野地板表	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜、杉
彫 刻	虹梁(唐草絵様)		



写115-14 全景



写115-15 側面



写115-16 軒

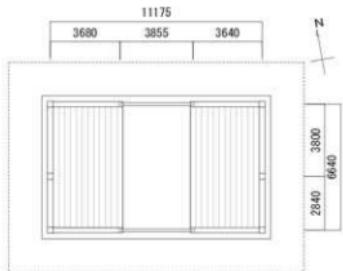


图115-4 平面図(神楽殿)

となっている。

正面11.17m、側面6.64mの入母屋造瓦葺で、参道にまたがる割拌殿の形式をとる。両側に板の間の舞台を持ち、間口は1本の太い梁が架けられ、中間の柱は取り外しができるようになっている。軒はせがい造で一軒出しているが、当初は茅葺でせがいのみであったと思われる。かつて回り舞台等の舞台装置が備わっていたが江戸時代の御法度によって取り締まりを受け河川敷で焼却処分された。現在の建物は基礎と屋根の改修が行われ、耐震のためプレースが取り付けられている。

虹梁の唐草絵様は長く伸び、中央部にまで達して

いてレリーフ化されており19世紀以降の物と推定できる。

まとめ

小高神社の歴史は古く、記録は平安時代にまでさかのぼる事ができ、長年にわたって地域によって信仰されてきたことが窺える。境内は鳥居から本殿まで一直線上に配置され背には上州武尊山があり、近隣の武尊神社の總社に当たるとの由緒書の記載も見られる。本殿は神明造に姿が似ている切妻造平入で明治期に建替えられている。拝殿は向拝部分に彫刻が集中して施されており、向拝は後付けとみることもできるが向拝水引虹梁裏側と身舎虹梁の唐草絵様の様式が一致することから同時期の物と思われる。向拝の彫刻は江戸後期から江戸末期の特色が良く出ており文化年に建てられたとすると地域から見て進んだ建築様式であったと思われる。神楽殿は江戸後期の建築で社殿、拝殿と合わせて各時代の建築様式、流行や時代背景が見られる。

(櫻澤 齊)

【参考文献】

『糸之瀬村誌』糸之瀬村誌編纂委員会 昭和33年

116 (上牧)子持神社 [(かみもく)こもちじんじゃ]

表116-1

神社名	子持神社	所在地	利根郡みなかみ町上牧528
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 子持神社
主祭神	木花開耶命	神事	春季例大祭(5/5)、夏季神事(7月海の日)、秋季神事(11/23)
創立・沿革	上牧が下牧と合わせて牧村と呼ばれていた時代の鎮守として祀られたもので、この牧村が上牧村と下牧村に別れたのが文治年間(1185~1190)と言われるのでそれ以前の創建と思われる。元文3年(1738)正一位子持大明神の宣示を受ける(『月夜野町史』)。創立は平安時代の貞觀年中(860年代)と伝えられる(境内案内石碑)。		
文化財指定	子持神社本殿(県重文 昭和59年12月)、子持神社覆屋(町重文 平成26年9月)		

位置・配置 (図116-1、写116-1)

旧月夜野町の北に位置し、冬期は積雪量の心配される場所である。一般道を使用して水上温泉方面へ行くのであれば利用するであろう県道61号沼田水上線沿いにあり、一段高い場所に立派な覆屋を持つ神

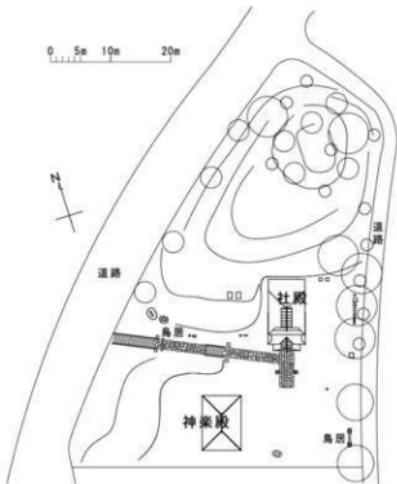


図116-1 配置図



写116-1 境内全景

社。利根川と県道が並行している先の小高い地にあり、西には上越線が斜面に並行して走り、社殿背後には丘があり谷川岳からの北風を遮っている。県道から直接登る階段の先に境内があり、本殿と拝殿全体に覆屋がかかった建物の他に、神楽殿を配し、正面には石造りの狛犬一对と社殿の周囲には石灯籠・石宮・石碑や句碑等が多数ある。社殿裏には木々の生えた小高い山となり北からの風雪が遮られる地形となる。

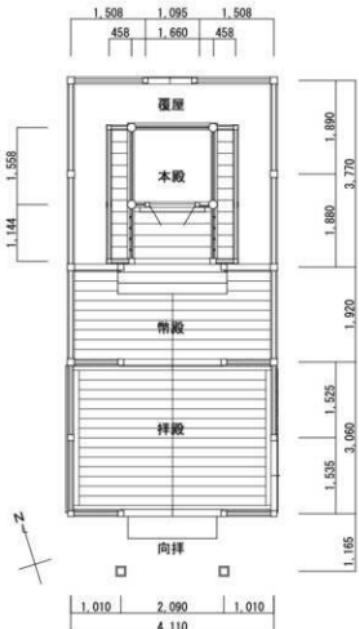


図116-2 平面図(社殿)

由来および沿革

子持神社は、上牧と下牧を合わせて牧村と呼ばれていた時代の鎮守として祀られたとされる事から、牧村が上牧村と下牧村に別れたのが文治年間(1185～1190)とされているので、それ以前の創建と推測されている。木花開耶姫命ほか十一柱を祭神とし、安産、子授かりの神として近住の信仰を集め。本殿には、「神鏡の外、木製の男根が数多く納められている。社名の子持にあやかり願掛けの子宝を授かった者が秘かに奉納したものかと思われる」と村誌には記載されている。渋川市の旧子持村に鎮座する子持神社との関係性は不明。神楽殿での太々神樂は平成5年(1993)を最後に現在は行われていない。

本殿 (図116-2、表116-2、写116-2～116-7)

身舎柱に「釘大工新口之口沢藤左衛門、寛永拾年癸酉六月十三日」と刻銘があり、寛永10年(1633)建立である(『群馬県指定文化財子持神社本殿保存修理工事報告書』)。背丈のある覆屋に囲まれた本殿は一間社流造で、木賊葺の屋根である。拝殿からの正面は角形の柱、虹梁、連三斗、二軒繁垂木となり、全体に簡素な造りで彫刻は見られない。身舎部分の側面は、丸柱を4本据え、向拝からは遮断された縁が両サイドに廻り、脇障子が立つ。拝み懸魚及び降懸魚のみ猪の目と彫刻され、虹梁に若干の眉が引かれ、妻飾りは豕首首で大瓶束もなく単純な造りである。柱、梁、組物は朱塗。内部は確認できなかった。この本殿は、独特な形の覆屋に守られている。

表116-2 本殿

建造年代／根据	寛永10年(1633)/身舎柱刻銘	構造・形式	一間社流造(1.66m)、側面1間(1.66m)、木賊葺
工 匠	[大工]名胡桃之大河原勘四良重吉、河門之石坂長右衛門 [釘大工]新口之口沢藤左衛門/身舎柱刻銘	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、地貫、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁	組 物	[身舎内]平三斗 [向拝]連三斗(実肘木付)、出三斗 [腰組]三手先、二手先 [向拝]連三斗
中 備	なし	軒	二軒繁垂木
妻 飾	豕首首、燕懸魚、降懸魚	柱間安置	板扉、板壁
縁・高欄・脇障子	二方切目縁、脇障子(板)、擬宝珠高欄	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	朱塗(柱、組物、虹梁、扉板、垂木、懸魚、脇障子枠)、黒塗(長押、貫、脇障子板、小壁、扉枠)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	燕懸魚、降懸魚		



写116-2 側面



写116-3 向拝正面



写116-4 正面



写116-5 身舎側面



写116-6 妻面



写116-7 向拝軒

本殿と覆屋との取り合いは、この地域で一般的な覆屋内に本殿が置かれているだけというのではなく、本殿外部両サイド及び裏面は外部と通じているが、正面は拝殿側からのみしか入れない造りとなっている（特別貴重な造りというわけではない）。本殿内部は今調査では確認できておらず身舎柱の刻銘も資料からの引用である。

拝殿（図116-2、表116-3、写116-8～116-10）

寛保2年(1742)棟札（『群馬県近世寺社建築緊急調査報告書』）。今回の調査では棟札の確認はしていないが、昭和54年(1979)の報告書で確認の棟札が建築様式から見て拝殿建立時の物と見て良い。正面2

間側面2間の入母屋造に本殿向拝部分の切妻屋根が組み合わさり一体となっている。覆屋の屋根は拝殿の屋根にもかかり八棟造といわれる特異な形をとくなっている。向拝は東石に角柱、木鼻、唐草模様の水引虹梁、出三斗、蔓股、二重虹梁に垂木となる。拝殿内部は、床及び壁は板葺で、柱の頭には肘木が付き、竿縁天井。拝殿と幣殿の境には格子の引分け戸があり奥へ続き、無双窓付を左右に付け明り取りとなっている。幣殿部分の床壁天井は本殿とつながり一体となる構造である。

覆屋（図116-2、表116-4、写116-11～116-16）

文化15年(1818)建造（背面板壁墨書）。屋根は妻

表116-3 拝殿

建造年代／根据	寛保2年(1742)／棟札	構造・形式	正面3間(4.11m)、側面2間(3.06m)、入母屋造、平入、向拝1間切妻屋根、鉄板葺
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	〔身舎〕角柱 〔向拝〕角柱、水引虹梁	組 物	〔身舎〕舟肘木 〔向拝〕出三斗
中 備	〔向拝〕蔓股	軒	〔身舎〕せがい造 〔向拝〕一軒垂木
妻 飾	燕懸魚、木連格子	柱 間 装 置	〔正面〕引分戸 〔向拝〕板張
縁・高欄・船障子	なし	床	拭板
天 井	竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	朱塗(出組)	飾 金 物 等	なし
絵 画	奉納絵馬(弘化3年)	材 质	不明
彫 刻	〔向拝〕水引虹梁(若葉)、木鼻、本蔓股		



写116-8 正面



写116-9 内部



写116-10 内部組物

表116-4 覆屋

建造年代／根据	文化15年(1818)／背面板壁の墨書	構造・形式	正面4.11m、側面3.77m、正面入母屋造、裏寄棟造、妻入、鉄板葺
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	角柱	組 物	なし
中 備	なし	軒	鉄板巻込
妻 飾	木連格子	柱 間 装 置	〔板〕板葺、縦格子 〔上部〕吹櫛
縁・高欄・船障子	なし	床	土間
天 井	小屋組表(茅葺表)	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 质	不明
彫 刻	なし		



写116-11 正面



写116-12 側面西



写116-13 側面東



写116-14 妻面



写116-15 小屋裏



写116-16 小屋裏

入鉄板葺で、正面を入母屋、背後を寄棟と複雑な形で、本殿・幣殿・拝殿と全てに覆いかぶさるような構造となっている。高さは本殿よりも更に高く複雑な小屋組みとなり覆屋となっている、古くは茅葺であったが、現在はトタン板で葺替えされている。背面板壁に「文化15年(1818)4月23日」の墨書があるとの『群馬県近世社寺建築緊急調査報告』に報告されているが未確認。純粹に覆屋部分は本殿を覆い囲う目的であるが、外壁は拝殿から幣殿と一体となつて続く。裏面（北側）の木戸が開き本殿の左右裏部分には入ることが出来る。

まとめ

建造年代の明らかである本殿、拝殿、覆屋は近隣の社寺建築との比較するうえで大変貴重な建築である。本殿は江戸時代前期に建てられた古式さ簡素な

村社の社殿としての例として、覆屋は江戸後期の複雑で独特特異な屋根組をした建築物であり貴重である。また、境内に残る神楽殿も社殿と一緒に維持することにより、より価値が高まる。

(関 美和子)

【参考文献】

- 『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会
文化財保護課 昭和54年
- 『利根・沼田の文化財』群馬県教育委員会文化財保護課
昭和49年
- 『古馬牧村史』古馬牧村誌編纂委員会 月夜野町誌編纂委員会
昭和47年
- 『月夜野町史』月夜野町史編さん委員会 昭和61年
- 『みなかみ町文化財ハンドブック』みなかみ町教育委員会
平成28年
- 『群馬県指定文化財 子持神社本殿保存修理工事報告書』
みなかみ町教育委員会 宗教法人子持神社 平成30年

117 月夜野神社（つきよのじんじゃ）

表117-1

神社名	月夜野神社	所在地	利根郡みなかみ町月夜野1259
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 月夜野神社
主祭神	大日孁命	神事	春季例大祭（4月上旬）、紙園祭・子供神輿御堂 うつしの儀（8月1日）、風祭・諏訪祭（8月下旬）、 秋例大祭（9月下旬）、御神迎（12/15（旧暦11/11））、 歳旦祭（12/31～1/1）
創立・沿革	創建当初は天照大神を祀る都神明宮と呼ばれ、江戸時代前期寛文年間、沼田藩主真田伊賀守信利により再建。明治期の合併により21社19祭神を合祀し、明治41年（1908）12月以降月夜野神社と改称（『桃野村誌』）。		
文化財指定	月夜野神社本殿（町重文、昭和59年7月）		

位置・配置（図117-1、写117-1）

旧月夜野町南北の中央、南に赤城山、北に谷川岳を眺められる、利根川の段丘端部西岸の高台に位置し、100m程西には新幹線が走り、真田の城「小川

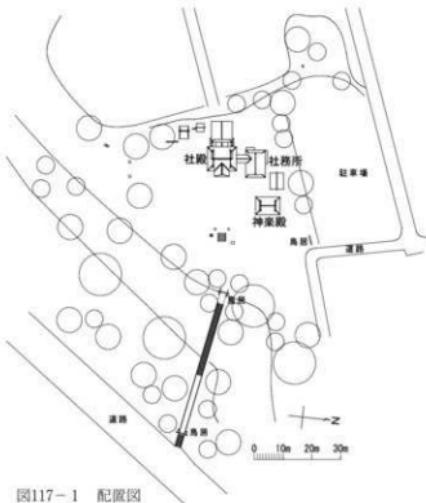


図117-1 配置図



写117-1 境内全景

城址」もほど近い。月夜野の宿方面からの杉林の中の長い石段を登った先、鬱蒼とした杉林に囲まれた広い境内に、大きな唐破風の拝殿、奥に覆屋が続き、その中に本殿がある。境内には他に高床三方が吹抜の神楽殿、末社、社務所、収納庫が建つ。神社境内への入り口は、宿場の方から登る長い階段の南東からの木造鳥居、北部の農村部からの入り口の石鳥居と2か所に配する。

由来および沿革

明治22年（1889）以前は月夜野村、町村制施行により桃野村、昭和30年（1955）月夜野町、平成17年（2005）みなかみ町と変わりゆく中で「月夜野」の名を残す神社である。明治42年（1909）の神社統合の際に21社

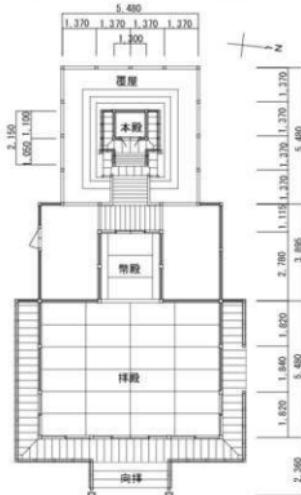


図117-2 平面図(社殿)

19祭神をこの地の神明宮（現月夜野神社の地）に合祀され、それを機に「月夜野神社」と改称。創建当初は、天照大神を祀る都神明宮とされ、江戸時代前期に沼田藩主真田伊賀守信利により再建された。現在の本殿は、寛政4年（1792）月夜野字洞の寿命院境内に建立（『月夜野町史』）された我妻谷神社の社殿。我妻谷神社は、明治41年（1908）神社統合により、21社19祭神と共に宇都の神明宮に合祀され、我妻谷神社の社殿は久しく空宮となっていた。その後も我妻谷神社の社殿は、寿命院境内に残置されたま

まであったが、余りにも立派な彫刻を持つ社殿の朽ちるのを憂えた住民によって昭和12年（1937）宇都の月夜野神社境内に移築が決まった。その移転は、解体移築によって彫刻が破損してはとの配慮から建てたまま木橋に乗せ1kmほどの道程を現在地に運んだとの事である（『月夜野町史』）。伝えには相当な日数を要して曳家をしたとの事である。

ほんてん
本殿（図117-2、表117-2、写117-2～117-7）
一間社流造、妻入、唐破風付の向拝が付き、浜床

写117-2 本殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	一間社隅木入春日造（L: 30m）、側面1間（1.10m）、向拝1間向拝唐破風付、板葺
工 匠	不明	基 础	切石（3段）、角礎石
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、長押、頭貫 [向拝] 角柱、水引虹梁、海老虹梁、手扶	組 物	[身舎]拳鼻付三手先（尾垂木付）、拳鼻付組 [身舎内]平三斗 [向拝]連三斗（实肘木付）、 三斗 [腰組]三手先、二手先
中 備	[身舎]詰組、彫刻嵌込 [向拝]詰組、彫刻（龍）	軒	板軒（彫刻、彩色）、板支輪（彫刻、彩色）
妻 飾	二重虹梁斗拱幕脛、蕉懸魚、鰐、降懸魚（花）	柱 間 装 置	棟唐戸、板羽目
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子（彫刻）、跳高欄、登高欄（逆連）	床	不明
天 井	[身舎]不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	素木、極彩色（向拝柱、木鼻、脇障子、胴羽目、 小脇板、蹴込板、支輪、軒、尾垂木、手扶、鰐、 降懸魚、笈形、軒、向拝彫刻、腰羽目、腰組）	飾 金 物 等	なし
繪 画	[外部]なし [内部]不明	材 質	不明
彫 刻	[身舎]小脇板（葡萄、獣、木鼻（獅子）、尾垂木（若葉、龍）、胴羽目（梅、鳥、鳳凰）、軒板（花、龍、波）、支輪（龍、波、花、落葉、龜）、木幕股（麒麟、雲）、脇障子（人物）、蹴込板（波）、長押（紋様）、降懸魚（花）、懸魚（蕉）、鰐（花） [向拝]向拝柱（菱紋様、菊）、向拝正面（唐獅子）、兎毛通（鳳凰）、鬼板（鬼）、水引虹梁（渦、紋様）、海老虹梁（若葉）、手扶（花）、木鼻（獅子、象）、階段上鼻（菱紋様、麻紋様、花）、浜床下束（紋様）、浜床下壁（波・扇子）、唐破風梁（菱紋様）、横桁（菱紋様）、降懸魚（花）、兎毛通（花） [身舎腰]腰羽目（唐獅子）、腰支輪（波）		



写117-2 正面



写117-3 侧面



写117-4 背面



写117-5 妻面



写117-6 向拝唐破風軒面



写117-7 向拝虹梁

を廻し、三方に縁を廻す、彫刻脇障子が左右に置かれる。三段の強固な石段の上に亀腹を廻し、三方縁より下部では地覆と腰長押、斗組以外はほとんどが彫刻され、縁より上部においても、出組、扉、丸柱、長押にこそ彫刻はないが、向拝の天井までも、水流・雲・龍等の彫り物で埋め尽くされており、多少剥離はしているが鮮やかな色彩がある。中でも一番の特徴として、軒裏迄彫刻がされている本殿は数少なく、唐破風軒を始め左右後ろと軒裏一面に龍の彫刻が施される。身舎内部は未確認。三重となる基壇に高く本殿は置かれ、縁下の腰羽目や軒裏彫刻を覗き見上げ見せる施行がされている。覗き見上げる構造、四方軒裏迄も埋め尽くす彫刻と、町史に記する寛政4年(1792)造営とあるように、18世紀後期の建造の建物を見て良い。昭和36年(1961)発行の村誌による写真では、瓦屋根で唐破風は見られないが、現在は入母屋造の大きな唐破風付向拝を持つ拝殿が併設されている。

まとめ

軒裏にまで彫刻が施されている社殿は珍しく、県内には中之条の大國魂神社東宮(嘉永4年(1851))と月

夜野神社他数棟とされ、関東全域及び全国的にも大変珍しく貴重な本殿である。空宮となって朽ちていくのを見過ごせなかった地域住民の心が理解できる立派な造りである。今調査に於いては棟札の確認はできていないが、町教育委員会作成の案内看板によると「棟札には、寛政4年(1792)の建立で、宮大工棟梁は棟東村新井に住む柏木・大河原二名の名が書いてある」と案内されることから棟札の存在がうかがえる。また『棟東村誌』によれば、松岡出雲正藤原増浮(本名忠藏)が現月夜野神社本殿を造成したと記されており、その棟梁松岡出雲は、月夜野神社建造後の寛政5年(1793)に旧子持村源空寺山門、享和5年(1804)に川場村武尊神社本殿を建立していると同村誌には記されている。

(関 美和子)

【参考文献】

- 『利根・沼田の文化財』群馬県教育委員会文化財保護課 昭和49年
- 『明治43年刊 桃野村誌』月夜野町教育委員会 昭和47年
- 『桃野村誌』桃野村編纂委員会 月夜野町誌編纂委員会 昭和36年
- 『月夜野町史』月夜野町史編さん委員会 昭和61年
- 『棟東村誌』棟東村誌編さん室 昭和63年

118 (中村)天満宮 ((なかむら)てんまんぐう)

表118-1

神社名	(中村)天満宮	所在地	利根郡みなかみ町下津2332
旧社格	無格社	所有者・管理者	宗教法人 天満宮
主祭神	建御名方命・八坂刀売命・菅原道真公	神事	春の大祭(3月下旬)、秋の大祭(10月初旬)
創立・沿革	中源と称し建御名方命・八坂刀売命を祭り、聖徳年間菅原道真公を合祀し北野社と称し、明治5年旧に復し中之社と改まる。通称天神様と呼ばれている(桃野村誌)。		
文化財指定	中村天満宮舞殿(町重文 昭和46年7月)		

位置・配置(図118-1、写118-1)

旧月夜野町の三国街道沿い、真田昌幸の沼田城の支城として有名な名胡桃城址近くに位置し、国道17号線月夜野バイパスより西に500m程入った農村地、広く開けた田畠や住宅が点在する地域の中心的位置に建つ。南から石鳥居を入り、境内には建替えたられた社殿、右に直角に配した舞殿、舞殿横に大きな枝垂桜、鳥居横には菅原道真公の愛した梅の木、社殿左右に石碑や石宮、道祖神が並び、幾つかの遊具も置かれ地域住民の憩いの場である。周囲は景色を遮るほどの建物もなく、北に谷川岳、南に赤城山を眺め、開放的で明るい場所である。



写118-1 境内全景

由来および沿革

江戸前期、ここ中村区には上・中・下に諏訪神社3社があり、ここ中の諏訪神社の社地に天満宮を移設、菅原道真公を合祀し天神様と呼び、社殿及び舞殿を建立したとされる。江戸中期には村芝居として素人歌舞伎が流行り、各村々で神社境内に舞台小屋を建て踊っていた。その後、幕府等は時間と金の無駄で風紀を乱すと禁止したが、庶民は氏神様への奉納のためとし神楽殿の名目で舞台の低い舞殿を建て、村祭りの日に芝居を上演。明治時代に入り盛んになるが、明治末の取締まり強化と戦争にて衰退。この舞台上演は、大正13年(1924)名胡桃城址保存会発足の祝いにて、昭和3年(1928)頃にお祝い行事としての催しで使用したのが最後との伝えである。

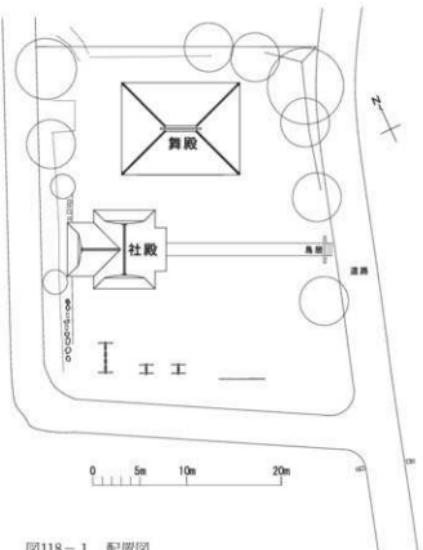


図118-1 配置図

舞殿(図118-2、表118-2、写118-2～118-7)

正面9.15m、側面6.35mの寄棟造トタン葺(当初茅葺)、正面及び背面には左右の四隅以外に柱はなく、側面にそれぞれ3本の角柱が切石の上に立ち、四方は壁や建具はなく開け放されている。舞台正面の太い5間を飛ばす虹梁は、大きく袖切及び弓眉が

削られ若葉が長く彫刻が施されている。地長押部分には幾つかの溝が確認できることから、袖舞台の設置が行われていたと思われる。床は拭板張で、当時は舞台上に木枠と円軌道を二重に組み合わせ、中心を回転軸で貫く廻り舞台であったとするところから、近年の改修の際に床板が平に張られたようである。床下及び天井裏には、回転補助機材と地元画家「林豊山」の筆による外唐紙70余枚の大道具が保管されているとの事。同人の絵画は社殿の格天井にも作者名の墨書き入りで納められている。舞殿の中央部に正面と平行に欄間の痕跡があり、1間毎に計5枚の欄間が並んでいたと思われるが現存は1枚のみ。天井部は寄鳥居除けに、金網が貼られ、屋根トタン下の茅材及び舞台道具らしい物が確認できる。建立は、安政4年(1857)から安政5年(1858)に神社と共に完成

表118-2 舞殿

建造年代／根据	19世紀中期／建築様式	構造・形式	正面1間(9.15m)、側面2間(6.35m)、寄棟造、平入、鉄板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	礎 自然石基礎(独立)
軸 部	角柱、地貫、虹梁、桁	組 物	なし
中 備	なし	軒 柱 間 装 置	せがい造、茅巻込トタン
妻 飾	なし	床	拭板張
縁・高欄・脇障子	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
天 井	金網(小屋組、茅葺表)	飾 金 物 等	なし
塗 装	素木	材 質	不明
繪 画	なし		
彫 刻	虹梁(若葉)		



写118-2 正面



写118-3 側面



写118-4 内部



写118-5 外部



写118-6 虹梁



写118-7 舞台装置

との『月夜野町史』の記載から棟札等がなく確定は出来ないが、虹梁の若葉の彫りや形から19世紀中期の建立で間違いないと思われる。昭和34年(1959)伊勢湾台風の際に破損をし、昭和48年(1973)に屋根をトタン葺に改修された。舞殿と共に安政5年(1858)建立とされる社殿は平成7年(1995)に建替えられ、現在は新しい社殿となっている。農村舞台研究の第一人者松崎茂著『日本農村舞台の研究』には中村舞台廻転機構図が記されている。

まとめ

古くは旧月夜野町内には14か所の神社に舞殿があり、改築等により舞台の機能はないものの6社に現

存。その内の1棟であり、特に残存する舞台としては舞台形式を残し存在感も大きく、活用保存の価値がある。この名胡桃地区には3つの舞台建物（村主八幡宮の社務所、小川島若宮八幡宮の廻り舞台）が現存する。

(関 美和子)

【参考文献】

- 『桃野村誌』月夜野町教育委員会 桃野村誌編纂委員会 昭和36年
『月夜野町史』月夜野町 月夜野町史編さん委員会 昭和61年
『日本農村舞台の研究』松崎茂工学博士論文刊行会 工学博士 松崎 茂 昭和42年

119 大峯神社〔だいほうじんじゃ〕

表119-1

神社名	大峯神社	所在地	利根郡みなかみ町小仁田74
旧社格	旧村社	所有者・管理者	宗教法人 大峯神社
主祭神	甘 ^{ミツヅ} 本武尊、他9柱(徳高見命・大山作命・大山祇命)	神事	春季例大祭(太々神樂奉納5/3)、夏季神事(7/25)、秋季神事(11/3)
創立・沿革	人皇42代文武天皇の御宇、大宝元年(701)の勅諭にて、その後人皇97代後村上天皇(南朝)の時代である正平5年(1350)社殿を造営。その後、寛永14年(1637)沼田旧領主真田家にて再建され、幾星霜を経て社殿破損をし、寛政4年(1792)氏子信徒等敬神宮の尽力により修復された。開闢の年号を用いて古くは「大宝宮」とも言い、利根川上流15箇村の総鎮守として崇敬される(「町読みなかみ」)。		
文化財指定	大峯神社本殿(町重文 昭和52年10月)		

位置・配置(図119-1、写119-1)

旧水上町の最南端、旧月夜野町との境に位置し、水上インターの出入口と接し、神社の敷地も間越自動車道建設時に提供したとの事。北からの風雪から守るように丘を背に、大きな杉林の中に拝殿兼覆屋内の本殿と二層の神楽殿を配し、左右にそれぞれ小さな覆屋に納められた本殿と裏の小高い丘の上に三峯神社の札を収めた小さな覆屋内の本殿がある。地

区の入り口に置かれ鎮守りとしての大峯神社は、覆星、神楽殿、境内の各社が綺麗に整備され地元住民の信仰の深さがうかがえる。

由来および沿革

文武天皇の時代、大宝元年(701)の勅諭で、その後村上天皇(南朝)の時代、正平5年(1350)社殿を造営する。降って寛永14年(1637)沼田旧領主真田家にて再建するが、幾星霜を経て社殿は破損し、寛政4年(1792)氏子信徒等敬神宮の尽力により營繕改修する。開闢の年号を用いて古くは「大宝宮」とも言い、利根川上流15箇村の総鎮守として崇敬される。明治3年(1870)寺間字上の原の無格社大山紙神社及び高日向字十二ノ前無格社大山紙神社を合祀。神社西には大峰山があり山頂には吾妻耶社が祀られ、里宮である大峯神社は山名を称している。

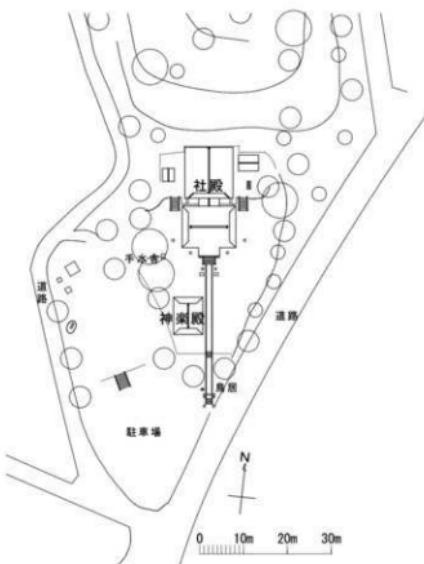


图119-1 配置図



写119-1 境内全景

本殿（図119-2、表119-2、写119-2～119-7）

寛政7年（1795）造立（棟札）。一間社流造、千鳥破風付、唐破風付の向拝が付き、基礎部分は床が張られていて確認することは出来ない。覆屋の拭板の上に、小立までも波模様に彫刻された浜床を廻し、向拝角柱は菱模様、獅子と象の木鼻、虹梁全体に紋様彫刻に松の透かし彫りが浮き出され、その上にとぐろを巻く龍の彫刻が据えられ、向拝懸魚には鳳凰、唐破風の持ち出しの梁までも彫刻がされている。向拝内部は、彩色された花の手挾、海老虹梁は波と亀の外枠を残した透かし彫を渡し、正面扉横の小脇板の菊と鳥の彫刻、扉には鶴と菊の彫刻、扉を含め各所に金物も打ち付けられている。身舎部分は太い丸柱が4本立ち、腰羽目、腰貫と彫刻紋様がされ、逆連付跳高欄の縁が四方に廻り、縁枠まで彫刻された脇障子（1部欠損）、横材となる切目長押、内法長押、頭貫に至るまで紋様彫刻で飾られている。横及び裏の嵌込彫刻は厚板の1枚物の作品である。墓股や支輪部分の彫刻は彩色され、尾垂木も波彫刻でまとめられている。身舎の柱と出組には彫刻はないが、他の材のほとんどに彫刻が見られる。内部の確認はできなかった。本殿は、明かりの入る強

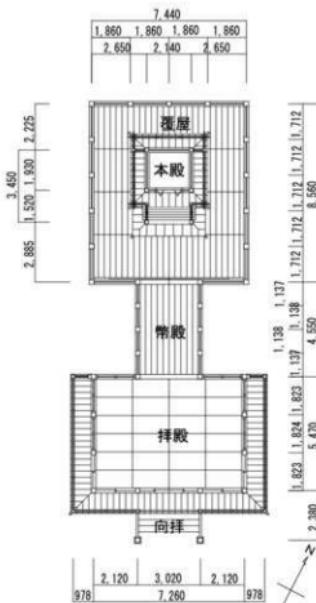


図119-2 平面図(本殿)

表119-2 本殿

建造年代／根据	寛政7年(1795)／棟札	構造・形式	一間社入母屋造(2.14m)、側面1間(1.93m)、平入、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、柿葺
工 匠	[大工]棟梁 稲永郡上里見 山田采安女常、脇 梁 友治郎、彦八、岩松 [不明]川上村 石井忠五郎、忠治郎、弥吉、幸治郎 [彫工]彫物檼梁 勢多郡花輪村 高瀬忠七郎	基 础	不明
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]拳鼻付三手先(尾垂木付) [身舎内]平三斗 [向拝]連三斗(実肘木付)、出三斗 [腰組]三手先、二手先
中 備	[身舎]本蔭股(彫刻) [向拝]彫刻(龍)	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻、彩色)
妻 飾	虹梁、懸魚、降懸魚、鰐	柱 間 装 置	杔戸戸、板羽目
幕・高欄・脇障子	四方切目縁、脇障子(彫刻)、跳高欄(逆蓮)、登高欄(逆蓮)	床	不明
天 井	不明	須弥壇、扇子、宮殿	不明
塗 裝	素木、極彩色(向拝柱、登高欄、擬宝珠高欄、向拝彫刻、木鼻、水引虹梁、燕木、鬼毛通、枝唐戸、小脇板、蹴込板、頭貫、鬼板、支輪、軒、尾垂木、手挾、鰐、降懸魚、菱形、軒、腰羽目、腰板、腰蔭股、丸桁)	飾 金 物 等	杔戸戸：隅金具、切目長押：長押飾、腰長押：装飾金具、登り高欄、装飾金具、跳高欄、装飾金具
繪 画	[外部]なし [内部]不明	材 質	檜
彫 刻	[身舎]棟唐戸(菊、鶴)、小脇板(鳳凰、花)、木鼻(獅子)、尾垂木(波、龍)、本蔭股(花、鳥)、鰐羽目(故事)、支輪(龍、波、花、落葉、龜)、脇障子(故事)、脇障子枠(麻の葉)、蹴込板(波)、長押(紋様) [向拝]向拝柱(菱紋様、菊)、向拝正面(龍)、鬼毛通(鳳凰)、鬼板(鬼)、水引虹梁(梅、紋様)、海老虹梁(波、龜)、手挾(牡丹、若葉)、木鼻(獅子、象)、階段上鼻(菱紋様、麻紋様)、花)、浜床下束(紋様)、浜床下壁(波、扇子)、唐破風梁(菱紋様)、横桁(菱紋様)、降懸魚(花)、[身舎内]木鼻(若葉)、緑下壁蔭股(花)、腰羽目(唐獅子、花)、腰長押(菱紋様)、腰貫(菱紋様)、腰支輪(波)、柱(菱紋様)		



写119-2 正面



写119-3 正面・側面



写119-4 屋根面



写119-5 正面扉



写119-6 向拝



写119-7 本殿脇

固な木造の覆屋内に風雪から守られている。覆屋の入口方向は入母屋とし裏側は切妻とする変形、瓦型の鉄板葺屋根、全体的には権現造のようであるが、本殿部分は単に覆屋である。大正10年(1921)に建てられた拝殿部分は銅板葺入母屋造、平入、向拝付きの強固な建物である。

まとめ

本殿は江戸時代後期の建物として群馬県北部を代表する建物である。規模も大きく細部にわたり彫刻が施され、同地域の泰寧寺欄間彫刻や常恩寺など利根地域でも活躍していた初代石原の弟子であった花

輪村の彫刻師高瀬忠七郎の作品としても大変興味深い。利根沼田地域一帯のみならず関東での寺社彫刻師の流れを知る上でも貴重な存在である。町誌によると棟梁石井伊賀藤原居重家保管の寛政年間の神社設計図が存在するとの事は大変貴重である。

(関 美和子)

【参考文献】

- 『町誌みなかみ』町誌みなかみ編纂委員会 昭和39年
- 『利根・沼田の文化財』群馬県教育委員会文化財保護課 昭和49年
- 『勢多郡東村誌』勢多郡東村誌編纂室 平成10年

120 (谷川)富士浅間神社 ((たにがわ)ふじせんげんじんじゃ)

表120-1

神社名	富士浅間神社	所在地	利根郡みなかみ町谷川533
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 富士浅間神社
主祭神	木花開耶姫命、天山祇命、瓊々杵尊	神事	春の例祭(4/29太々神樂奉納)、秋の例祭(10/28)
創立・沿革	康暦2年(1380)12月、後圓融天皇の時代の創建(『利根郡誌』)。その後、領主であった沼田城主真田氏によって造営されたものと考えられる。明治42年(1909)には阿能川村字登道の稲荷神社、同末社琴平宮、同じく阿能川村霧ヶ久保の神明宮、同末社八坂神社奥を合祀した。また、奥の院が、谷川岳の山頂にあり、御神体の鏡「懸仮」が祀られていたが、現在は小さい石造りの祠が置かれている(『町誌みなかみ』)。		
文化財指定	富士浅間神社中宮(町重文 昭和52年10月)、富士浅間神社の懸仮(町重文 昭和56年2月)、富士浅間神社のムレスギ(町天記 平成15年7月)		

位置・配置 (図120-1、写120-1)

旧水上町の中心部より国道291号線を北、谷川温泉へ県道252号線へ左折し1.8km程奥で、吉村順三遺作の天一美術館の入口並びに神社案内板と共に鳥居

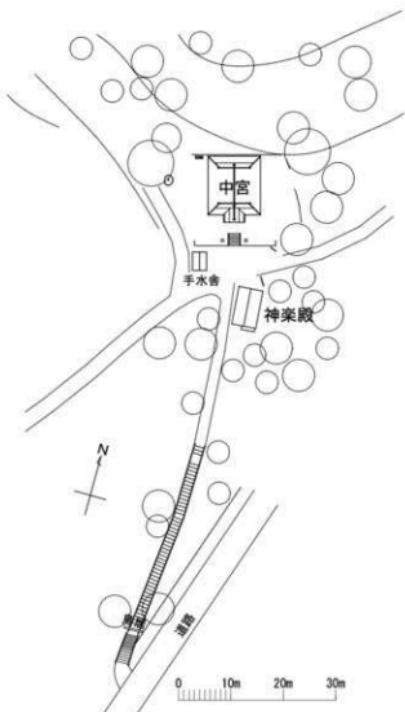


図120-1 配置図

があり、徒歩にて向かう。スキー場が直ぐそこにあるほどで、冬は雪深い場所に鎮座する。鳥居から林の中の石段を登り、右に神楽殿と正面に拝殿兼覆屋が綺麗に積み上げられた石垣上に建ち、その中に本殿が置かれている。中宮(社殿)の裏斜面はそのまま谷川岳山頂へと続く尾根となる。境内には他に、新しい手水舎、右裏手には町指定天然記念物のムレスギの巨木がある。鳥居から石段を登らずとも温泉街を廻り込んで車道は迂回して境内を横切るようにも通る。

由来および沿革

由緒は康暦2年(1380)創建(後圓融天皇の後宇)。富士浅間神社は古くから谷川岳にまつわる山岳信仰の中心的な役割を果してきた。江戸前期、沼田城主真田氏により造営。奥の院は谷川岳山頂の岩室にあり、御神体である「懸仮」(永祿8年(1565)作(町重文))が祀られていたが、現在は資料館に展示。明治43年(1910)字登道無格社稲荷神社、字坂内末社八坂神社を合祀。祭典は700年余年の歴史持ち沼田城主真田信幸が当神社と薬師堂に寄進した際



写120-1 境内全景

の記念として始まった太々神楽が今日に伝わり奉納される。

本殿(図120-2、表120-2、写120-2～120-7)

建造年代は万治元年(1658)と寛文3年(1663)の2つの棟札を確認するが、棟上札と完成札であると考えられ、寛文3年の完成とする。万治元年(1658)真田氏に造営の戸鹿野神社本殿と並べると臺股等類似が見られる。構造は三間社流造、向拝に4本の角柱が建ち、柱の頭には出三斗、肘木部分にはしっかりと巻かれた渦が建造年代を裏付ける。中備は中央のみ臺股、肘木にもしっかりと巻かれた渦、海老虹梁部分

は反りではなく水平で繋ぎ、両外側にのみで中部部分にはない。正面は階段と言うよりは広い段々が3段、朱に塗られた扉が柱間の3カ所に観音開きとなる。跳高欄付の縁が三方に廻り、板障障子が左右に付く。側面は板張りで、虹梁部分に渦が短い巻きの模様が見られる。渦巻(唐草模様)や彫刻の少なさから建築年代の古さがうかがえる。拝殿兼覆屋は入母屋造妻入り、二軒繁垂木、銅板葺き、唐破風付の向拝。向拝には龍の臺股、鯉の唐破風懸魚、柱は菱地紋の彫刻、水引虹梁には鮮やかな花と波模様、大きな花と葉の手挾。木鼻に獅子と狹、波と若葉の彫刻の海老虹梁。身舎は丸柱で三方縁に跳高欄、板障

表120-2 本殿

建造年代／根据	寛文3年(1663)／棟札	構 造 ・ 形 式	三間社流造(3.44m)、側面2間(2.35m)、向拝3間、板葺
工 匠	[大工]宇坂井村 勲右衛門、上牧村 八右衛門、湯原村 七郎兵衛／棟札	基 磐	東石
輪 部	[身舎]丸柱、地貫、長押、腰貫 [向拝]角柱、虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎外]拳鼻付出三斗 [身舎内]平三斗 [向拝]連三斗(実肘木付)、出三斗 [腰組]三手先、二手先
中 備	[身舎]なし [向拝]木臺股(彫刻)	軒	二軒繁垂木
妻 飾	家紋首、斗拱、燕懸魚、降懸魚、虹梁(渦巻)	柱 間 裝 置	板扉、板壁
縁・高欄・船障子	三方切目縁、船障子(板)、跳高欄	床	拭板
天 井	なし(屋根裏軒)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	朱塗(向拝柱、木臺股、水引虹梁、海老虹梁、正面組物、向拝組物、扉、垂木)、黒塗(正面下部、正面丸柱)	飾 金 物 等	開扉:八双金具
絵 画	なし	材 质	不明
彫 刻	[向拝]臺股(花、渦)木鼻(渦巻)、実肘木付(渦巻) [身舎]妻側虹梁(渦巻)、実肘木付(渦巻)		



写120-2 正面



写120-3 向拝組物



写120-4 向拝虹梁



写120-5 妻面



写120-6 組物



写120-7 臺股

子付き、拳鼻付き三斗の組物に彩色された彫刻支輪が嵌め込まれ、木鼻に獅子と植物の丸彫が付く。本殿と覆屋兼拝殿は全く違った様式で、文化14年(1817)の「再奥前殿建立之所」が建設棟札と考える、19世紀初期の建築で棟札は木村惣兵衛である。

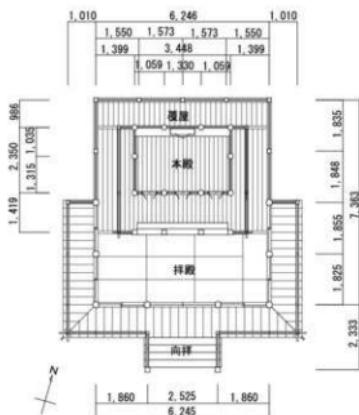


図120-2 平面図(中宮)

卷之四

近隣に江戸後期の本殿が点在する中、17世紀中期の本殿建築は貴重である。柱も太く力強さを感じさせられる。富士浅間信仰との結びつき、一ノ倉の大岩壁の岩室から発見されたという2面（当初は8面）の懸仏、1面は坐像で虚空蔵、もう1面は立像の十一面觀音と共に「永祿八年(1565)銘」と、「富士浅間大菩薩」の銘が刻まれている御神体と共に、山間奥深く厳しい自然環境の中で暮らす人々と信仰の関わりをうかがうことができる。

(関 美和子)

【参考文献】

- 「町誌みなかみ」町誌みなかみ編纂委員会 昭和39年
「利根・沼田の文化財」群馬県教育委員会文化財保護課
昭和49年
「みなかみ町文化財ハンドブック」みなかみ町教育委員会
平成28年
「利根郡誌」群馬県利根教育会 昭和5年(昭和45年再版)

121 (小日向)菅原神社 [(おひなた)すがわらじんじゃ]

表121-1

神社名	菅原神社	所在地	利根郡みなかみ町小日向473
旧社格	無格社	所有者・管理者	宗教法人 菅原神社
主祭神	菅原道真公	神事	春季大祭(4/25)、秋季大祭(10/25)、須賀神社祭典(夏祭(7/23))、年始祭(初詣(1/1))
創立・沿革	江戸時代に於いては小日向村の鎮守社で、棟札によれば天満宮と八幡宮を合祀した神社である。主祭神は菅原道真公で、育児・学問に深くかかわり、天神様とも呼ばれている。創立年代は不明である。		
文化財指定	菅原神社本殿(町重文 昭和52年10月)		

位置・配置 (図121-1、写121-1)

水上温泉街のホテルが建ち並ぶ西側とは反対に、利根川を挟んだ対岸で県道61号線沿いに位置し、上越線が真下を通る短いトンネルの上に境内敷地はある。公道から登り口に手水舎、石鳥居、大きな石碑



写121-1 境内全景

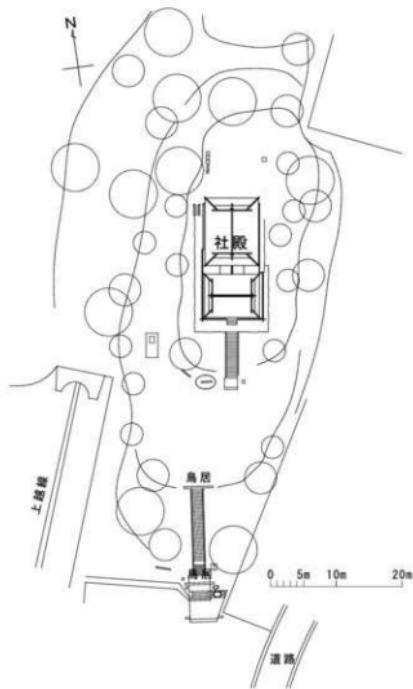


図121-1 配置図

には神社を建てたとする大工木村甚五郎金久の碑が立ち、幅の細い階段を上って赤い鳥居を通ると境内、広い境内の更に先の30段程の石段を上って拝殿があり、その奥の覆屋の中に本殿が置かれる。小高い丘の上に建てられているが、西側は坂東太郎利根川上流で、絶壁の上に境内はあり、境内から川を覗き込むには少々勇気がいるほどの地形である。社殿の左側の石疊となる通路を北に裏へ回ると幾つかの石宮が並び対岸の温泉街を望むことが出来る高台となっている。

由来および沿革

この神社は小日向村、鹿野沢村の総鎮守であり、天満宮と八幡宮を合祀した。菅原道真公が祀られ育児学問の神様として天神様とも呼ばれ地域に根付いている。永享5年(1433)造立、享禄3年(1530)再建、大破にて享和元年(1801)再建、修繕費等は氏子5箇村にて出資と町誌には記載がある。

本殿（図121-2、表121-2、写121-2～121-7）

享和元年(1801)の棟札あり。隣接する大峰神社の寛政4年(1792)完成である本殿と比較しても年代は妥当かと思われる。一間社切妻造、正面に千鳥破風が付き、向拝には唐破風付、屋根面は黒塗りの板張葺。向拝は浜床を設け、地紋彫りが施された角柱が立ち、水引虹梁は花の彫刻が浮き彫りされ、中備には龍の透かし彫りが睨みを利かせ、唐破風懸魚には水龍の浮彫り。身舎部分は切石、亀腹、彫刻木鼻、出組と重ね、三方に跳高欄の縁を廻し、松の彫刻の脇障子及び花や鳥が舞う1枚板の胴羽目、背後も1枚板の2頭の獅子の彫刻板、四隅の木鼻は獅子頭、蔓股、三段の彫刻された支輪と上がって、妻側には鳳凰の彫刻、大瓶束、そして東の左右にも彫刻が施されている。彩色は蔓股、彫刻支輪、懸魚、手挾、正面小脇板、扉の花彫刻、兎の毛通しなどが鮮やかに表現されている。本殿は、強固な覆屋に覆われて、外部からはほとんど覗き見することは出来ないような造りとなる。拝殿、幣殿に続き覆屋が連なって建てられている権現造のような形式である。覆屋部分は入母屋造、妻入、トタン葺で外壁は板葺と風雪をしのぐためであるので明り取りも最小限の強固な建物となっている。幣殿部分はトタン葺きの切妻屋根。拝殿は入母屋造、平入でトタン葺きとし、正



図121-2 平面図(社殿)

表121-2 本殿

建造年代／根柢	享和元年(1801)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.04m)、側面1間(0.86m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、板葺
工 匠	[大工]小日向村 木村甚五郎助金久 他門人4名／棟札	基 础	切石、亀腹石
軸 部	[身舎]土台、丸柱、切目長押、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]拳鼻付三手先(尾垂木付)、拳鼻付出三斗 [身舎内]平三斗 [向拝]連三斗(肘突木付)、出三斗 [腰組]三手先、二手先
中 備	[身舎]彫刻蔓股(彫刻)、彫刻嵌込(波、花) [向拝]彫刻(龍)、詰組	軒	二軒彫重木、板支輪(彫刻、彩色)
妻 飾	二重虹梁大瓶束、菱形、燕懸魚、鰐、降懸魚	柱 間 装 置	棟唐戸、板羽目
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子(彫刻)、跳高欄、登高欄(逆蓮)	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮鏡	不明
塗 装	素木、極彩色(水引虹梁、垂木、鬼毛通、棟唐戸、小脇板、鬼板、支輪、手挾、燕懸魚、鰐、降懸魚、菱形、軒、腰支輪)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	漆
彫 刻	[身舎]虹梁(若葉)、支輪(花・波)、木鼻(獅子)、木蔓股(波)、妻(鳳凰)、脇障子(鳥・草木)、胴羽目(鳥・草木、唐獅子)、中備(鳳凰)、小脇板(鳥・花)、棟唐戸(菊・梅・松)、懸魚(蕉)、鰐(雲)、降懸魚(雲)、菱形(花)、庇(若葉)、腰支輪(波)、縁下(霞) [向拝]虹梁(花)、鬼毛通(波)、唐破風下(波)、水引虹梁(若葉)、花・波)、海老虹梁(波)、向拝柱(菱紋様)、菊)、手挾(花)、蔓股(龍)、鬼板(若葉)		



写121-2 正面



写121-3 正面・側面



写121-4 正面扉



写121-5 向拝



写121-6 妻面



写121-7 背面

面3間、側面3間、丸柱を立て、向拝はなく、禅宗様の木鼻を付け、軒は二軒繁垂木、梁部分の彫刻はほとんど見られない。建造年代は19世紀後半に下ると推定する。

まとめ

直線距離にして2km程しか離れていない同地域の大峯神社の完成とする9年後に完成を迎える。作風は非常に類似しているが、それとの大きさからは、菅原神社の方が小ぶりで繊細で優美可憐な印象である。特に、正面扉の赤彩色された花模様や菅原道真公の象徴である梅の花の愛らしさ、細身な正面向拝

柱がそういった印象を持たせている。海老虹梁の外枠を残しての籠彫りは特徴的である。地元小日向の大工棟梁木村甚五郎金久他が、精魂込めて仕上げた作品として、技術の伝承が雪深い奥利根の地へも広く伝わっている事がうかがえる。

(関 美和子)

【参考文献】

- 『町誌みなかみ』町誌みなかみ編纂委員会 昭和39年
- 『利根・沼田の文化財』群馬県教育委員会文化財保護課 昭和49年
- 『みなかみ町文化財ハンドブック』みなかみ町教育委員会 平成28年

122 藤原諏訪神社〔ふじわらすわじんじゃ〕

表122-1

神社名	藤原諏訪神社	所在地	利根郡みなかみ町藤原3419
旧社格	無格社	所有者・管理者	藤原諏訪神社
主祭神	建御名方命	神事	獅子舞(8/15~9/20頃)
創立・沿革	由緒不明。明治43年(1910)に青木沢武尊神社に合祀される(『町誌みなかみ』昭和39年)。		
文化財指定	藤原諏訪神社歌舞伎舞台並びに観覧席(町重文 昭和56年2月)、藤原の獅子舞(町重無民 昭和60年7月)		

位置・配置(図122-1、写122-1)

旧水上町最北部の豪雪地藤原地区に位置し、地区的中心部を走る県道63号線から宝台樹スキー場方面へ500m程登った、県道からスキー場までの中间間に建つ。利根川の支流の沢が大きく蛇行した地形に沢に沿った敷地である。整備された駐車場には東屋があり、その奥に丈の低い石造りの鳥居が建ち、潜り抜けると歌舞伎舞台を配置。舞台中央に立って眺める先の真正面の急な石段を登ると、林の中に諏訪神社が鎮座する。社殿内には一間社流造の本殿が祀られている。登った石段の左右が段々となっており、舞台を観覧する席となる。舞台より平地奥には、以前行っていた相撲の土俵の痕跡の広い場所がある。

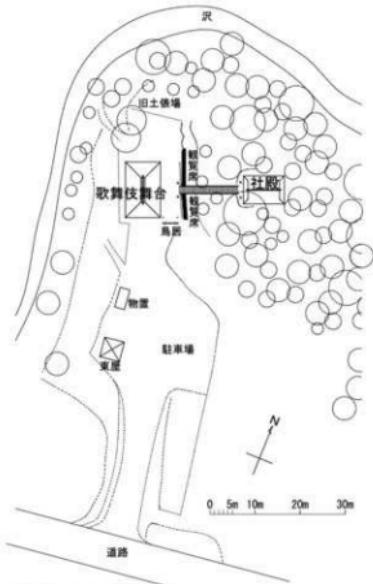


図122-1 配置図

由来および沿革

神社の由緒は不明、御神体は銅製の鰐鉗。大祭には、建久2年(1191)に源頼朝の家臣によって伝えられたとされる獅子舞(町重無民)が、830年以上受継がれ、この舞台で国久保、日本懸、耶魔懸、吉利という4つの踊りが、2時間ほど踊り続けられる。石鳥居には享和3年(1803)、石灯籠には寛政8年(1796)の刻みがある。舞台並びに観覧席の利用は、現在は「藤原の獅子舞」が奉納される舞台であるが、昭和初期までは越後より師匠を招いて歌舞伎上演も行なう場とされていた。



写122-1 境内全景

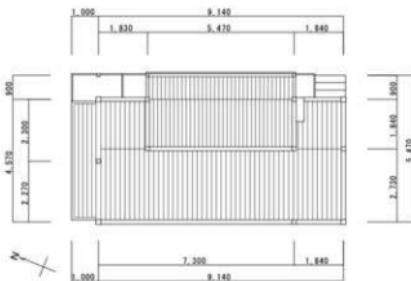


図122-2 平面図(歌舞伎舞台)

歌舞伎舞台及び観覧席（図122-2、表122-2、写122-2～122-10）

歌舞伎舞台の建立は「寛保2年(1742)8月建立の伝承がある。「前殿」と言っている。」（『利根・沼田の文化財』）と記載があるが、今回の調査では根拠は未確認であり、建造年代を推測する手掛かりとなる部分は正面虹梁の彫刻である。正面の左端から4間を渡す虹梁は、彫刻を左右から中央に長く伸び、花模様の菊、唐草、泡、鯰尻部分の突起などの特徴が見られ19世紀中期とするのが妥当かと思われる。正面5間、側面3間の寄棟造茅葺、正面3本の角柱、側面3本、柱や梁は鉄骨で補強がなされている。

屋根は茅葺であるが、随時葺き替えがなされている。屋根部分の内部部材の多くが、ぼぞ穴が剥き出しにされているので、別の建物から移築され交換がされているかと想像する。外周部は、冬場も含め囲いのない柱のみの吹き畳しの状態である。床高1m程の歌舞伎舞台の奥中央は、幅3間、奥行き1.5間が0.3m程高くなっており、背景襖絵を設置する場所となっている。

歌舞伎舞台と一緒に文化財指定されている観覧席は、通常では舞台に対して座席は地面から同じ高さ、あるいは観覧者が舞台を見上げる形体だが、観覧席は上り口の石垣の上は平らで、招待客等

表122-2 歌舞伎舞台及び観覧席

建造年代／根拠	19世紀中期／建築様式	構 造 ・ 形 式	正面9.14m、側面5.47m、寄棟造、平入、茅葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎(独立)
軸 部	角柱、虹梁、桁	組 物	なし
中 備	なし	軒	せがい造、茅葺
要 飾	なし	柱 間 装 置	なし
縁・高欄・船障子	なし	床	拭板
天 井	小屋組、茅葺表	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[外部]虹梁(若葉)		



写122-2 正面



写122-3 側面



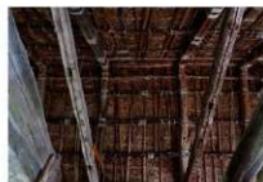
写122-4 正面・側面



写122-5 虹梁



写122-6 天井裏



写122-7 天井裏



写122-8 観覧席(正面)



写122-9 観覧席(正面・側面)



写122-10 観覧席(側面)

の貴賓席となり、更に上は斜面を利用して的一般の観覧席となり、現代の劇場のように後方へ行くにつれて座席は高くなるように斜面が利用されている。

まとめ

みなかみ町藤原地区と聞けば豪雪地帯と誰もが想像する場所である。その藤原に於いて、このような茅葺及び吹曝しの建物を維持管理していくのは大変な苦労と知恵が必要であったかと察する。古くは交通の便から閉ざされた地区であり、この広場は地元民の憩いの場所として地形を利用した観覧席と共に守られてきた。昔ながらの茅葺を維持している屋根

はこの地区でも珍しくなっており貴重な財産である。830年以上続く獅子舞と共に、茅葺職人の技術・技の継承を後世に大切に受け継ぐ場所及び機会としても保存される価値がある。

(関 美和子)

【参考文献】

『町誌みなかみ』町誌みなかみ編纂委員会 昭和39年
『利根・沼田の文化財』群馬県教育委員会文化財保護課
昭和49年
『みなかみ町文化財ハンドブック』みなかみ町教育委員会
平成28年

123 (須川)熊野神社 ((すかわ)くまのじんじゃ)

表123-1

神社名	熊野神社	所在地	利根郡みなかみ町須川798
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 熊野神社
主祭神	伊弉諾美命・大穴乎遲命・経津主命・品陀和氣命	神事	熊野神社太々神楽(4月第2日曜日)
創立・沿革	天喜3年(1055)源頼義が紀州熊野大社の分靈を勧請。文応元年(1260)社殿建立、その後何度か建立修繕([新治村史料集[第2集]])。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図123-1、写123-1)

旧三国街道の須川平、須川宿の北に位置するこの宿場の鎮守り。現在は「たくみの里」として観光地であり広く知られる場所である。宿場通りと言われる真っすぐ北に延びた街道の先を左に折れ、大木となつた杉林の森の奥に境内はあり、参道から鳥居を抜けすぐ左に摶末社、手水舎、西東に流れる小川の小橋を渡ると東に神楽殿、正面の拝殿兼覆屋の中に

本殿、西には幾つかの小さなお宮が並ぶ。「たくみの里」を訪れる観光客の散策コースとなっているため、静かな境内にも時折参拝客が訪れる。800m程度には、県重文の山門と須弥壇を持つ泰寧寺がある。



写123-1 境内全景

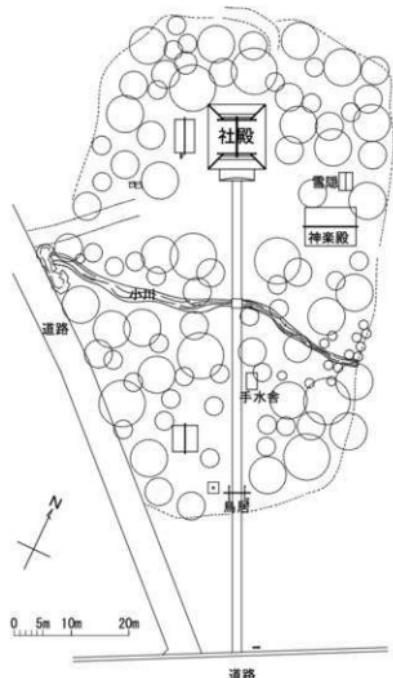


図123-1 配置図

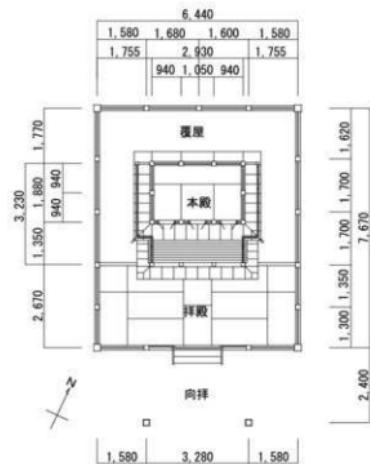


図123-2 平面図(社殿)

由来および沿革

源頼義が平安時代後期の天喜3年(1055)前九年合戦の折、この地を訪れ戦勝祈願のため、紀州熊野大社（和歌山県）の分霊を勧請し社殿を建立したのが始まりとされる。熊野神社には神像1体と、熊野三所権現を勧請して祀ったため弥陀、薬師、觀音の木像3体がおかれ、仏像が元来から安置されていたものとされ、神像は他から移されたものと言われる（『新治村史料集（第二集）』）。

この地である須川地区は、現在は利根郡であるが、明治29年(1896)までは吾妻郡久賀村であった。

本殿（図123-2、表123-2、写123-2～123-7）

建造は第三建立、寛政9年(1797)初～寛政12年(1800)成就遷宮の棟札があり、本殿内の釘と棟札の穴と一致しているので間違いないかと思うが、第一建立～第三建立と1枚の棟札に列記されている部分については解説できない。第一建立は文応元年(1260)、第二建立は天文4年(1535)、修復元禄年間(1688～1704)、第三建立が寛政年間(1789～1801)と記されている。三間社流造、千鳥破風付、平入で向拝にて唐破風が付き、覆屋内部の土床に、基壇を高く廻し何とも恐ろしい大蛇を思わせるような龜甲模

表123-2 本殿

建造年代／根据	寛政12年(1800)／棟札	構 造 ・ 形 式	三間社入母屋造(2.93m)、側面2間(1.88m)、平入、千鳥破風付、一間向拝3間軒唐破風付、板葺
工 匠	[大工]棟梁 吾妻郡小和泉邑白石相模頭藤原舜應 小工 青木音五良積博	基 础	切石、亀腹(木材)
軸 部	[身舎]土台、丸柱、切目長押、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎外]拳鼻付三手先(尾重木付・実肘木付) [身舎内]平三斗 [向拝]連三斗(実肘木付)、出三斗 [腰組]三手先、二手先
中 備	[身舎]本幕股、斗 [向拝]彫刻(龍)	軒	二軒垂木、板支輪(彫刻、彩色)
妻 飾	不明	柱 間 装 置	棟唐戸、板羽目
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子、擬宝珠高欄、登高欄	床	拭板張
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、朱塗、黒塗、極彩色(小脇板、鬼板、支柱、垂木、尾垂木、挙鼻、軒、唐破風下彫刻)	飾 金 物 等	棟唐戸:隅金具、腰長押:長押金物、長押:長押金物
絵 画	なし	材 質 摘	なし
彫 刻	[向拝]二重水引虹梁(梅、満)、向拝彫刻(飛龍)、木鼻(獅子、狛)、手挾(牡丹)、鬼板(若葉)、兎毛通(龍)、唐破風下(雲) [身舎]桐羽目(故事)、本幕股(花、鳥)、木鼻(獅子)、小脇板(花)、支柱(波、水鳥)、尾垂木(波、龍)、挙鼻(鳥頭)、腰羽目(波、花、唐獅子)、亀腹(亀甲、鱗)、腰貫(菱紋様)、長押(菱紋様)、頭貫(菱紋様)		



写123-2 正面・側面



写123-3 正面・側面



写123-4 屋根面



写123-5 向拝虹梁



写123-6 身舎組物



写123-7 身舎腰面

様の木製亀腹を横たえ、腰羽目や腰長押にも浮き出た彫刻が施されており、目線は縁から下を拝む。正面の4本の向拝柱は彫刻され、踏面が大変狭い段で登り高欄が付き、擬宝珠高欄付で三手先組物が縁下に付く縁が三方に廻り、脇障子が付くが鏡板部分は抜けている。左右胴羽目及び後ろ部分に浮き出るよううに唐人の彫刻を配すが、脇及び裏の1枚ずつが盜難にあい板羽目のままである。向拝部分は紋様彫刻の角柱に、獅子及び狛の木鼻、向拝破風下の中備え部分から尻尾が始まり向拝柱で折り返し顔頭を出して向かう人に睨みを利かす龍の彫り物が、中心で尾を絡ませて対で配する。4本の海老虹梁は波をあしらった丸彫りで、正面虹梁にも木花を浮き出し、出三斗で二重虹梁を受て二軒繁垂木、丸棒板葺の流造の屋根となる。唐破風の下には飛龍の兎毛通。身舎の出組に龍や波の尾垂木、拳鼻には鶏らしき彫刻、幕股、支輪、小脇板と彫刻。幕股、尾垂木、小脇板には彩色がある。身舎の貫隅部や扉には銅金物が付く。全体的に細部にわたって彫刻されたとても固い櫓を使った印象の社殿である。

覆屋 (図123-2、表123-3、写123-8~123-10)

堅固造りの覆屋は4間5間の入母屋造、古い写真によると以前は茅葺であったが、現在は銅板葺で、せがい造の軒に一軒繁垂木の庇が覆い被され、妻入、外壁は板張りである。向拝の唐破風には鳳凰の彫刻、若葉を深く彫み中央迄伸びた虹梁は19世紀初期、江戸末期の様相を成す。二重虹梁、木鼻に長い牙が付く狛と獅子、反り返しの大きな海老虹梁、正面屋根及び幕股には菊の紋章、向拝部分の天井は格天井で彩色がされている。基壇は、周囲は布敷で向拝部分の中央のみ四半敷きの石敷きである。本殿が置かれる内部天井は吹き抜けで軸組が剥き出し、本殿の屋根部分を避けながら巧妙に屋根組がされている。内部は、本殿の脇及び裏の胴羽目彫刻が盜難にあったため、外壁部分の木の格子の内側に鉄製の格子が組まれていて強固となっている。拝殿部分のみ板拭で床が貼られているが、本殿両側及び裏は土間のままである。

表123-3 覆屋

建造年代／根据	19世纪前半／様式	構 造 ・ 形 式	正面3間(6.44m)、側面5間(7.67m)、背面4間、入母屋造、妻入、向拝1間唐破風屋根、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	不明
軸 部	[身舎]角柱、腰長押、内長押、虹梁(正面) [向拝]角柱、水引虹梁、二重虹梁、海老虹梁	組 物	連三斗(実寸木付)
中 備	なし	軒	[身舎]せがい造、一軒繁垂木 [向拝]一軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁斗拱、燕懸魚、鰐	柱 間 裝 置	引違格子戸、板壁、格子板
幕・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天 井	[身舎]野地板表 [向拝]格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、彩色(向拝天井)	飾 金 物 等	なし
繪 画	[向拝]天井画	材 質	不明
彫 刻	[向拝]海老虹梁、水引虹梁、木鼻(獅子、狛)、本幕股、兎毛通(鳳凰)		



写123-8 正面・側面



写123-9 妻面



写123-10 向拝正面

まとめ

文化財の指定はされておらず情報の乏しい神社ではあるが、建築は大変繊細で特に亀腹の大蛇、向拝の龍、兎毛通の飛龍は立派である。今回の調査で、川場村（谷地）諏訪神社の棟札と大きさこそ違いはあるが、棟札の様相も記載されている大工衆も類似しており、同じ大工集団が建築を手掛けた本殿である。完成時期は熊野神社の1年後に川場村（谷地）諏訪神社となる。棟梁白石相模頭藤原舜應（吾妻郡小和泉村）から近隣の社殿建築を結びつけ、関わりを深く探りたい建物である。

（関 美和子）

【参考文献】

- 『新治村史料集（第四集）』新治村史料集編集委員会 昭和37年
- 『新治村史料集（第二集）』新治村史料集編集委員会 昭和33年
- 『利根・沼田の文化財』群馬県教育委員会文化財保護課 昭和49年
- 『みなかみ町文化財ハンドブック』みなかみ町教育委員会 平成28年

125 (羽場)日枝神社 [(はば)ひえじんじゃ]

表125-1

神社名	日枝神社	所在地	利根郡みなかみ町羽場588
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 日枝神社
主祭神	大山咋命	神事	春の例祭(5/3 獅子舞奉納)、秋の例祭(10月の休日)
創立・沿革	延喜2年(902)日吉神社より勧請(字藤塚地区)、当宮は沼田城主真田伊賀守信直の再建立(1656)と伝わる。上野国577社利根郡21社の内、從五位上山神大明神大山咋命羽場村山王大権現と言われていたが、明治維新の神仏分離・廃仏毀釈によって山王大権現は廢され、村社日枝神社と改称された。(『新治村史料集第二集』)		
文化財指定	羽場日枝神社の下座(町重文 平成20年4月)、羽場日枝神社の間引駄馬(町重文 昭和49年3月)、羽場日枝神社の獅子頭(町重文 昭和49年3月)、羽場日枝神社の拝殿欄間彫刻(町重文 平成20年4月)、羽場日枝神社の天井絵(町重文 平成27年6月)、羽場日枝神社の獅子舞(県重無民 平成29年3月)		

位置・配置 (図125-1、写125-1)

新潟から国道17号沿いに旧三国街道を上り、県道36号線へ右折せずそのまま国道17号線を進み1km程先、左側の階段を登った先に位置。公道から150m程奥の社殿に徒歩で至るまでは、3箇所の鳥居と多くの階段を登って辿り着く。境内には本殿、神楽殿、十二様、末社と配し、中央は県指定の獅子舞の

披露ができる広い境内となっている。又、2基の組立式下座は社殿の中の保管箱に彫刻品は納められ、大きな構造部材は本殿の左右後ろに立て掛けで保管されている。

由来および沿革

氏子より山王様と親しまれる日枝神とは、山王信仰に基づき比叡山麓の日吉神社より勧請を受けた神社の社号である。延喜2年(902)近江の国坂元の郷(現在の滋賀県大津市)より日吉神社を勧請し奉る。当初はこの地区北部の字藤塚に安置奉られていたが、後に字小高井へ移されたが赤谷川の水害に合い、更に現在の地に移され、この地を宮平と呼ばれる。沼田城主真田伊賀守信直再建。上野国577社利根郡21社の内、從五位上山神大明神大山咋命羽場村山王大権現と言われていたが、明治維新の神仏分離



図125-1 配置図



写125-1 境内全景

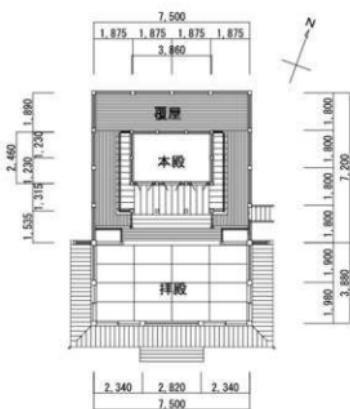


図125-2 平面図(社殿)

離・廃仏毀釈によって山王大権現は廃され、村社日枝神社と改称された（『新治村史料集第二集』）。明治41年（1908）嚴島神社外6社を合祀。

毎年春には、天文2年（1533）伊勢の神職夫婦が旅の途中に立ち寄り伝えたと言われる羽場日枝神社の獅子舞（県指定重要無形民俗文化財）の奉納が行われる。

本殿（図125-2、表125-2、写125-2～125-7）

村誌によれば明暦2年（1656）建立の棟札があるとするが、今調査では確認できていない。本殿全体を見渡すことが難しく、拝殿から太い水引虹梁下に底部部分以下が見られる。正面3間側面2間、屋根は柿葺流造である。向拝は角柱が4本立ち、中備部分にはシンプルな人物型取った蟇股がそれぞれで3カ

所、三斗、二軒繁垂木で板葺屋根を受け、正面は蟇股以外はほとんど彫刻はない。蟇股の肩の張り、巻込肘木の模様等は建造年代の特徴を成している。向拝内部のしっかり巻かれた渦が付く手挾は、桃山及び17世紀中期の特徴を表し、巻きの外のくびれは特徴的である。両端のみ垂直に虹梁が身舎に渡り丸柱で受ける。左右に縁を廻し障子で止まる。妻飾りは家紋首で、拝み懸魚及び降懸魚の猪の目と彫刻され、大瓶束が立つ、肘木部分には虹のように弧を描く模様がある。全体的に柱、梁、組物は朱塗。内部は確認不可。拝殿の華やかさとは違い、江戸時代初期の建造の特徴を示す装飾の少ない本殿であることからも、確認の出来ていない明暦2年（1656）真田信直建立の棟札は、様式から見てても妥当かと思われるるので、17世紀中期の建物と判断する。

表125-2 本殿

建造年代／根据	17世紀中期／建築様式	構造・形式	三間社流造（3.86m）、側面2間（2.46m）、平入、向拝3間、板葺
工 匠	[大工]仁左エ門	基 碇	切石
輪 部	[身舎]土台、丸柱、長押、頭貫　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、肘木	組 物	[身舎]出三斗（肘木付）、[向拝]出三斗（肘木付）、蓬三斗（肘木付）
中 備	[身舎]なし　[向拝]木蟇股（人物）	軒	二軒繁垂木
妻 飾	家紋首、出組、蕉懸魚、降懸魚	柱 間 裝 置	板戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子（板）、擬宝珠高欄、登高欄	床	不明
天 井	井 不明	須弥壇・扇子・宮鏡	不明
塗 裝	朱塗	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[向拝]木鼻（渦）、本蟇股（人物、渦）、肘木（渦）、笈形（弧）		



写125-2 正面



写125-3 側面



写125-4 向拝蟇股



写125-5 向拝組物



写125-6 組物



写125-7 背面

拝殿兼覆屋 (図125-2、表125-3、写125-8~125-13)

昭和33年(1958)の『新治村史料集第二集』に記載の由緒によると、「拝殿再建山王宮御拝殿一字文政十三庚寅年八月吉日 別当羽場村味城山光藏寺金海代大棟梁 阿佐見出羽光金……」文政13年(1830)、村誌の社掌宮本武一郎由緒記によるが、建築様式や沼田の河内神社本殿建立、前橋日輪寺、六合村飯綱大権現御堂、越後の白山神社造営など数々の建物に携わったと伝える新井村棟梁初代阿佐見出羽正光金の手掛けた建物だとすれば、活躍時期からも判断できる。正面3間側面6間の入母屋妻入、銅板葺きの

拝殿兼覆屋。向拝はなく、角柱が立ち水引虹梁には若葉、角の柱には木鼻、柱上部には肘木が付く、全体的に華やかさはないが落ち着いた感じの外部である。拝殿内部の中央の豪快な虹梁には長く伸びた若葉を刻み、支輪部分には獅子、波、扇子と彩色された華やかな彫刻が嵌め込まれ、欄間に古代中国の故事にちなんだ豪快な彫刻欄間を巡らせ彩色も華やかに並ぶ。建立後の造作として欄間彫刻が嵌められたのか、裏には天保8年(1837)、天保5年(1834)の墨書きを残す。天井は格天井で旧月夜野町の幕末の画家林青山筆と思われる天井画で唐獅子を中心配し周囲を花鳥図で囲んだ華やかな仕上がりとなる。額

表125-3 拝殿兼覆屋

建造年代／根据	文政13年(1830)／社掌宮本武市郎由緒書	構造・形式	正面3間(7.50m)、側面6間(11.08m)、入母屋造銅板葺(当初茅葺)妻入
工 匠	[大工]棟梁 新井村 阿佐見出羽光金 [彫工]武州熊谷宿 小林源八(西側北)、熊谷宿小林正俊(東側北)、小林正後(東側南)	基 础	不明
軸 部	土台、角柱、水引虹梁、長押、貫	組 物	[拝殿内部]拳鼻付岡組(肘木付) [拝殿外部妻]拳鼻付平三斗
中 備	嵌込彫刻	軒	二軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁斗栱、燕懸魚、鰐、降懸魚	柱 間 裝 置	格子戸、桟唐戸、板壁
縁・高欄・船障子	三方切目縁、脇障子(板)	床	拭板
天 井	格天井(絵画)、彫刻版支輪	須弥壇、扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、檜彩色(欄間彫刻、彫刻支輪)	飾 金 物 等	なし
繪 画	天井画(青赤龍、花鳥)林青山(町重文)、絵馬(間引絵馬)林豊山(弘化4年(1847))(町重文)、板壁(鶴)	材	質 檻
彫 刻	[内部]水引虹梁(若葉)、支輪(波と扇子、唐獅子と花)、欄間(故事) [外部]虹梁(若葉)、木鼻		



写125-8 正面



写125-9 正面妻飾



写125-10 外部



写125-11 内部天井



写125-12 内部中備



写125-13 内部欄間

表125-4 下座

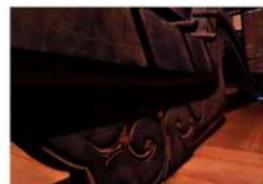
建造年代／根拠	天保8～9年(1837～1838)／墨書	構造・形式	不明
工 匠	[彫工]武州大里郡熊谷宿在久保島村堀越鶴之助正久(17歳／小林源八正俊門)、信州伊奈郡八手村 小林安太郎正信	基	礎 不明
軸 部	角柱、他不明	組	物 [身舎内]平三斗 [向拝]連三斗(実肘木付)、出三斗 [腰組]三手先、二手先
中 備	不明	軒	不明
妻 飾	兎毛通	柱間裝置	不明
縁・高欄・脇障子	縁、脇障子(詳細不明)	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	極彩色(欄間、縦欄間、蹴込板、兎毛通鬼板)	飾金物等	不明
繪 画	なし	材質	不明
彫 刻	欄間(唐獅子、龍)、縦欄間(唐獅子、龍)、蹴込板(唐獅子、龍)、兎毛通(唐獅子、龍)、鬼板(鶴、亀)		



写125-14 兎毛通



写125-15 縦欄間



写125-16 正面拝門

には間引きの様子の絵馬が飾られており当時の庶民生活の残酷さを感じさせられる。

下座（表125-4、写125-14～125-16）

彫刻裏の墨書より天保9年(1838)制作と確認。下座は組立式で、2棟分があり歌舞伎又は人形芝居の舞台であった、現在の社務所(元は神楽殿)の左右に興行の度に組立設置され、淨瑠璃語りや囃子方がいる場所となっていた。開口480cm、高さ500cmと推定されているが、今回の調査では組立及び実測は行っていない。1棟分の下座の部材は、欄間・蹴込み・左右縦欄間・唐破風・兎毛通等の部材からなり、2棟分が保管管理されている。今調査では、保管箱から数点のみを取り出しての調査にとどめた。昭和27年(1952)春季大祭の際に、社殿の屋根替え工事完成祝いの際に組み立てられたのが最後との事である。

まとめ

本神社に関係する下座、彫刻、獅子舞、天井絵と文化財指定されている物が多くあるが、本殿建物についても17世紀中期の建築としての価値を十分持つ。また、拝殿の棟梁とする阿佐見出羽光金は前橋

日輪寺や六合村飯綱大權現御堂、越後の白山神社造営など数々の建物に携わったと伝わる大工である。

組立式の下座は、大変貴重であるが今後どのように保存されるかが課題である。組立の経験者も現存していないと思われ早急に展示場所の確保と組立が課題である。桐生市新里に下座の展示があるが、規模は日枝神社の物の方がはるかに大きく見たえもあると察する。彫刻も彩色され素晴らしいもので、彫刻師も小林源八(2代目石原吟八の門人)を師匠とする若い彫物師であり今後詳細調査が必要である。

(関 美和子)

【参考文献】

- 『新治村史料集(第四集)』新治村史料集編集委員会 昭和37年
- 『新治村史料集(第二集)』新治村史料集編集委員会 昭和33年
- 『新治村誌 通史編』新治村村誌編纂委員会 みなかみ町 教育委員会 平成21年
- 『利根・沼田の文化財』群馬県教育委員会文化財保護課 昭和49年
- 『みなかみ町文化財ハンドブック』みなかみ町教育委員会 平成28年
- 『利根郡誌』群馬県利根教育会 昭和5年(昭和45年再版)
- 『棟東村誌』棟東村 棟東村編さん室 昭和63年
- 『勢多郡東村誌』勢多郡東村村誌編纂室 平成10年

126 大國魂神社【おおくにたまじんじや】

表126-1

神社名	大國魂神社(旧英靈殿)/旧須賀神社	所在地	吾妻郡中之条町大字中之条町890
旧社格	明治42年村社伊勢宮に合祀	所有者・管理者	吾妻郡社会福祉協議会、吾妻大國魂神社奉賛会
主祭神	明治43年以降明治維新以来の吾妻郡内英靈2,433柱/旧須賀神社は素戔鳴尊(牛頭天王)	神事	長野原町長野原諏訪神社境内(長野原町241)に置く西宮と1年交代で東宮4月16日、西宮4月25日例大祭
創立・沿革	明治43年(1910)、鎌倉時代より須賀神社として尊敬されていた社殿を、中之条町の田村喜八ほか三名の肝入りで買付けて町に寄付し、吾妻郡英靈殿として日清日露の戦没者英靈を祭神として創建された。次いで大正十年長野原町にも西宮として建立せられ、以来東部西部とが一年交代で大祭を続けてきた。今次の大戦により敗戦の結果、英靈殿も大國魂神社と改称し、吾妻大國魂神社奉賛会がその運営に当たっている(『吾妻郡社寺録』等)。		
文化財指定	旧須賀神社本殿(町重文 平成6年12月)		

位置・配置(図126-1、写126-1)

中之条町大字中之条町は吾妻川左岸の段丘上に開けた町である。戦国期には真田氏の沼田城と上田城を結ぶ道の要地であり、江戸期初期に置いて六斎市が開かれ、旧須賀神社は市神として置かれた。境内は旧四万街道(国道353号線)の北側裏手の高台に位置し、大凡4mの石積で造成された土地に南面して社殿が建つ。

現在、境内は町民に開放され、桜が植えられた憩いの場となっている。

由来および沿革

現在の大國魂神社地に諏訪神社、須賀神社(市神)が天正年中(1573~1593)越後国六日町から伊能一族が市神として勧請し、上之町の用水路上に鎮座し、天保15年(1844)火災に依り焼失、嘉永4年(1851)再建、明治元年(1868)9月須賀大明神と改称し、明治42年(1909)4月15日伊勢宮に合祀された(遺族会資料)。『町誌(1巻 p319)』によれば、長



写126-1 境内全景

岡(中条)時代に真田昌幸が社殿寄進、王子原(中之条町)移転後に用水路上に安置、その大祭を紙園祭という。須賀神社は沼田市にもあり江戸以前は牛頭天王宮、同じく真田信幸時代に天王石を祀ったことに由来する。

本殿(図126-2、表126-2、写126-2~126-7)

一間社入母屋造平入、正面を千鳥破風とし軒唐破

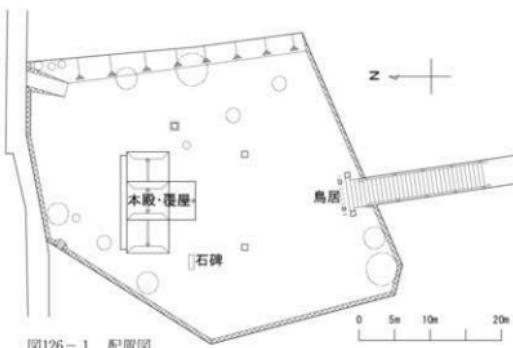


図126-1 配置図

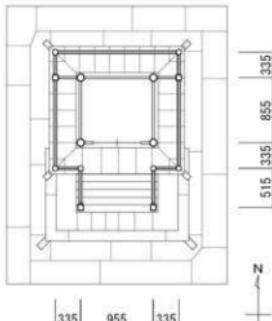


図126-2 平面図(社殿)

表126-2 本殿

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	一間社(0.95m)、側面1間(0.85m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間、軒唐破風付、銅板葺、覆屋付
工 匠	不明	基 础	切石基壇、龜腹
軸 部	[身舎]丸柱、土台、長押、貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手扶	組 物	[身舎]三手先(彫刻尾垂木)、腰組三手先(彫刻肘木) [向拝]出三斗2段(正面彫刻肘木)、連三斗2段
中 備	[身舎]詰組 [向拝]彫刻	軒	[身舎]二軒彫刻板、板支輪(彫刻) [向拝]二軒彫刻板
妻 飾	[身舎]彫刻 [向拝]虹梁(彫刻)、彫刻	柱 間 裝 置	棟唐戸(彫刻)、羽目板(彫刻)
縁・高欄・脇障子	[身舎]三方切目縁、禅宗様高欄、脇障子(彫刻) [向拝]切目縁(浜床)、豈高欄、木階5級	床	不明
天 井	井 不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	なし	飾 金 物 等	扉金具(棟唐戸)、中金具、擬宝珠
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]虹梁(牡丹)、長押(牡丹・地紋)、腰羽目(波)、胴羽目(中国故事)、中備脇(鶴)、尾垂木(龍・鯱)、軒・支輪(水紋)、妻飾(鶴・瑞雲)、脇障子(中国故事) [向拝]柱(栗鼠・葡萄)、虹梁(波・亀)、木鼻(獅子・額)、中備(尉と姥)、手扶(牡丹)、軒(水紋)、妻飾(鶴・瑞雲)		



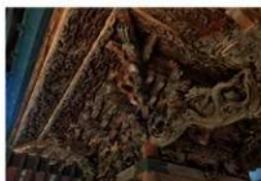
写126-2 全景



写126-3 正面上部



写126-4 正面下部



写126-5 正侧面軒見上げ



写126-6 向拝柱上部



写126-7 側面胴羽目彫刻

風の向拝をつける。全体に彫刻で埋め尽くされた外観が圧倒的である。彫刻は人物・動植物ともに繊細かつ豊かな表情を表し立体感に富む。いずれも木目を活かした精緻な表現で、全体のバランスが素晴らしい。各モチーフが呼応している。彫刻は目に触れる事の無い腰組の支輪まで手を抜くことなく施され、彫師が腕を競った時代に腕の立つ職人がその円熟期に制作した作品と推察される。軒裏にまで彫刻が施された近隣の類例として、本調査では月夜野神社(寛政4年(1792))、赤岩神社(文政2年(1819))がある。建造年は『中之条町誌』で嘉永4年(1851)としている。細部様式から妥当である。

まとめ

社殿は長野原町諏訪神社内の英靈殿と1年交代の祭礼にあわせて2年に一度公開される。彫工は不明であるが、江戸後期の彫刻変遷の指標となる社殿である。題材や動植物のあしゃい、近隣類例との比較により彫工が明らかになることを待ちたい。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

参考文献

『吾妻地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年

『吾妻郡社寺録』西毛新聞社 昭和53年

『中之条町誌 1・2・3巻』中之条町誌編纂委員会 昭和51~53年

127 赤岩神社【あかいわじんじゃ】

表127-1

神社名	赤岩神社	所在地	吾妻郡中之条町赤岩字中野651
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 赤岩神社
主祭神	保食命、建御名方命、八坂力危命、軍解勇 命、速玉勇命、伊邪那美命、大日靈命、倉稻 魂命、天物主命他	神	事 春大祭(4/11・12)、秋祭(11/9・10)
創立・沿革	郡誌によれば、明治41年(1908)村社及村内の無格社を悉く合祀し、国原有林に隣接した山の中腹の旧飯綱神社境内及び社殿を赤岩神社と改称して村社と定めた。社殿は本殿幣殿兼用の一殿と拝殿一棟に分立、両殿の間數十級の石段を置き、拝殿は大正3年(1914)1月稻荷神社の建物を移転改築、本殿は永禄3年(1560)創建、文化年中焼失し再建したものを維持管理するとしている。		
文化財指定	中之条町六合赤岩(国重伝建 平成18年7月)		

位置・配置(図127-1、写127-1)

赤岩地区は長野原草津口駅から国道292号線を白砂川に沿って北上した右手の河岸段丘に位置する。この地区は平成18年に群馬県内第1号の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。旧道に沿って南北に展開する集落の南端の山腹に赤岩神社が鎮座する。通りに面する石段から300mほど参道を登ると、尾根筋の平地に南西向きに拝殿が位置する。さらに拝殿から背後の石段を数m上がった尾根突端に、覆屋に納められる本殿が置かれる。本殿の背後は岩塊が露頭している。

由来および沿革

境内は飯綱神社のもの1,249坪を引き継いだものとされる。本殿覆屋内には明治41年合祀の際の棟札を納めた奉藏室があり、諏訪大明神、飯綱大権現、熊野大権現、櫻名溝行宮大権現、金毘羅大権現、鳥頭大明神、稻荷大明神、若宮八幡宮、牛頭天王宮等が確認できる。社殿名は不明であるが、判読できるも



写127-1 境内全景

の最古は元文5年(1740)である。

本殿(図127-2、表127-2、写127-2～127-7)

拝殿背面から道板を渡して本殿への石段に渡るめずらしい形式を取る。本殿覆屋は尾根突端を切石で造成した高台に、白砂川を見下ろす南西向きに置かれている。一間社春日造柿葺き、身舎は正面3尺、側面2.5尺余りの小社である。柱上組物を三手先、

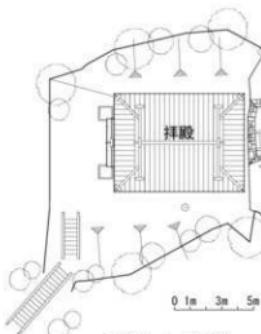


図127-1 配置図

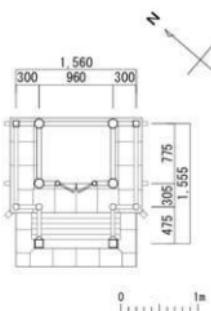


図127-2 平面図(本殿)

表127-2 本殿

建造年代／根拠	文政2年(1819)／棟札	構造・形式	一間社春日造隅木入(0.96m)、側面1間(0.77m)、向拝1間、軒唐破風付、柿葺、覆屋付
工 匠	不明	基 础	切石基礎・基礎
軸 部	[身舎]土台(確認不可)、丸柱、長押(切目・腰・内法)、頭貫〔向拝〕角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]三手先(彫刻尾垂木)、腰組:二手先(彫刻尾垂木) [向拝]出三斗2段、連三斗
中 備	[身舎]彫刻〔向拝〕彫刻	軒	[身舎]二軒 板軒(彫刻)、板支輪〔向拝〕板軒(彫刻)
妻 飾	[身舎]虹梁大束東、彫刻	柱 間 装 置	棟唐戸、板壁
縁・高欄・脇障子	[身舎]三方切目縁、禪宗様高欄、脇障子〔向拝〕浜床切目縁、登高欄、木階5級、浜床	床	不明
天 井	井 不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	極彩色	飾 金 物 等	蝶番(棟唐戸)
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]基壇土台(麒麟・亀・波紋)、虹梁(渦・若葉・地紋彫)、腰羽目(波紋)、胴羽目(花木・鳥・麒麟)、中備(鶴)、尾垂木(辰・鶴頭)、板軒・支輪(宝珠・亂、瑞雲)、妻飾(赤鬼・青鬼・桃)、脇障子(松・鷹) [向拝]虹梁(渦・若葉・地紋彫)、木鼻(獅子・象)、中備(鳳凰)、手挾(牡丹)、板軒(龍)、妻飾(鬼)、鍋懸魚(鰐)		



写127-2 全景



写127-3 側面



写127-4 向拝



写127-5 背面



写127-6 腰部



写127-7 屋根

腰組を二手先とし、基壇から軒裏まで極彩色の彫刻で埋め尽くされ非常に華やかな外観であり、題材は靈獸(獅子・象・龍・麒麟・鶴・亀)、鬼(赤鬼・青鬼)と艶・多彩となっている。一方、軸部と組物は樺の素木とし、唐草絵様や地紋彫がされる程度であり、彫刻との対比が特徴的と言える。彫刻は取付状態から後付であると思われる。棟札が残され文政2年(1819)の建造年が判明している。建築様式から妥当といえる。

まとめ

社殿は急峻な斜面に建つが、氏子により適切に保全され、合祀の棟札も丁寧に保管されている。重要

伝統的建造物群保存地区の南東端に位置し参道入口の鳥居は地区のランドマークとなっている。

華やかな本殿は棟札に大工・彫師等工匠については記載が無い、軒裏にまで彫刻が施された近隣の類例としては月夜野神社(寛政4年(1792))と大國魂神社(嘉永4年(1851))がある。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

【参考文献】

- 『群馬県吾妻郡誌』群馬県吾妻教育会 昭和4年
- 『六合村誌』六合村誌編集委員会 昭和48年
- 『吾妻地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年
- 『赤岩 伝統的建造物群保存対策調査報告書』六合村教育委員会 平成17年

128 王城山神社〔おうじょうさんじんじゃ〕

表128-1

神社名	王城山神社	所在地	吾妻郡長野原町林502
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 王城山神社
主祭神	建御名方命・八坂力発命・日本武尊	神事	春例大祭里宮祭(5/4・5)、奥宮大祭(8/26)、夏例大祭里宮祭・団子相撲(神楽殿前に土俵8/27・28)
創立・沿革	奥宮は王城山の山頂にあり、かつて社嶽は真田家のご印地であった。明治40年(1907)8月29日各社を合祀し、村社王城山神社と改称した。奥宮は日本武尊が東夷を征討し凱旋の途中駐屯して以来山を王城山と称し山頂に石祠を建立したとの伝承がある。		
文化財指定	王城山神社の神杉(町天記 昭和49年9月)		

位置・配置 (図128-1、写128-1)

ハッ場あがつま湖の北側に座す王城山（標高1,123m）の南麓に位置する。境内は林集落を東西に結ぶ旧草津街道に北面した山腹（標高約650m）に南向きに鎮座する。旧草津街道から、木造の鳥居を潜ると右に神楽殿と社務所、石段を上がった正面に社殿、左に鳥頭宮（東吾妻鳥頭神社より移築）、右裏手に合祀社を祀った覆屋を配す。社殿背面から王城山の急峻な地形となり山頂には奥宮の石祠が置かれる。九合目付近には日本武尊伝説にまつわる御

籠岩と呼ばれる大きな岩壁が座し、別当大乘院浦野家による修駿道の修行場でもあった。境内には杉の高木が林立し、中には樹齢450年とされる町指定天然記念物の神杉がある。

由来および沿革

王城山（標高1,123m）は群馬百名山で登山者にも人気であるが、麓の林地区では古くから「みこしろやま」と呼ばれ崇拝の対象とされてきた。鎌倉期に諏訪大社勧請、神社は勘木場に置きその後、真田氏が現在の王城山頂に勧請したとされる。明治以前は諏訪神社と呼ばれ、山頂の奥宮は上社、里宮は下社とされる。

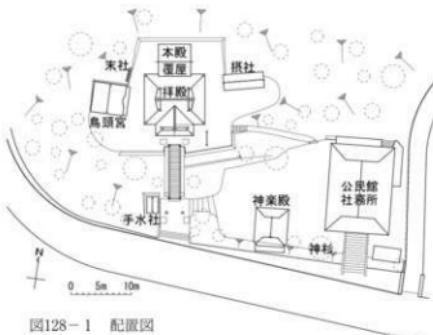


図128-1 配置図



写128-1 境内全景

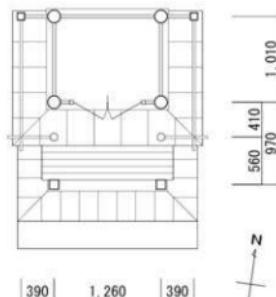


図128-2 平面図(本殿)

表128-2 本殿

建造年代／根据	享保14年(1729)／棟札	構造・形式	一間社流造、側面1間、向拝1間、板葺、覆屋有
工 匠	不明	基 础	切石基壇(基礎兼用)
軸 部	[身舎]丸柱、土台、長押、貫 [向拝]角柱、組物 水引虹梁、海老紅梁、手挾	組 物	[身舎]出三斗(拳鼻付) [向拝]出三斗・連三斗(拳鼻付)
中 備	[身舎]本幕股 [向拝]本幕股	軒	正面三軒、背面二軒、繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶束、菱形	柱 間 装 置	桟唐戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、組高欄(禪宗様)、登高欄、脇障子(板)、登高欄、木階5級、浜床	床	拭板
天 井	化粧屋根裏天井	須弥壇・扇子・宮殿	扇子
塗 裝	朱塗、黒塗	飾 金 物 等	扉前飾金具(純八双飾)、銚金具(隅、金折、一字文字)
繪 画	なし	材	質 不明
彫 刻	[身舎]拳鼻(渦)、本幕股(草木) [向拝]拳鼻(渦・象鼻)、虹梁(渦・若葉)、本幕股(流水・花)		



写128-2 全景



写128-3 正面上部



写128-4 正面下部



写128-5 向背正面



写128-6 向背側面



写128-7 背面

が施されるが、平面的で単純な形状である。また海老虹梁をみると、向拝側の取付け位置を斗拱上としており、そのため反りが少なく正面側に木鼻を付けていない。当本殿には弁財天宮と諏訪宮の棟札が残されている。建造年代は弁財天宮の棟札が享保14年(1729)、諏訪宮の棟札が文化3年(1806)である。上記に示す各部様式は、18世紀前期の特徴を示しており、諏訪大社の祭神を祀るが、前者を本社の棟札と考えたい。

拝殿 (図128-3、表128-3、写128-3、写128-8～128-13)

正面3間、側面2間、量感のある屋根を載せ、櫛素木の組物と精巧な彫刻を付けた莊厳な外観を呈し

ている。身舎では、丸彫の木鼻(靈獸)・尾垂木(辰)、装飾化した幕股(鶴)・拳鼻(象鼻)、向拝では柱の

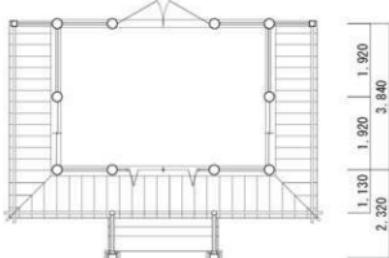


图128-3 平面图(拝殿)

表128-3 押殿

建造年代／根柢	江戸末期／建築様式、寄進者銘版	構造・形式	正面3間(5.58m)、側面2間(3.84m)、入母屋造、平入、千鳥破風、向拝1間軒唐破風付、銅板瓦檜葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	[身舎]切石独立基礎 [向拝]切石独立基礎、石造礎盤
軸 部	[身舎]土台、丸柱、長押、貫、虹梁 [向拝] 角柱(下部棕付)、水引虹梁、海老紅梁、手扶	組 物	[身舎]出三斗(拳鼻) [向拝]出三斗・連三斗
中 備	[身舎]本臺股 [向拝]彫刻嵌込	軒	[身舎]三軒、二軒、繁垂木 [向拝]茨繁垂木
要 飾	虹梁大瓶束	柱 間 装 置	棟唐戸・舞戸戸・板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子(板)	床	拭板
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	天井画(草木鳥獸)	材 質 標	檜
彫 刻	[身舎]拳鼻(渦文・象鼻・雲流)、木鼻(獅子)、中備(鶴・雲流)、雲支輪、隅尾垂木(蟹)、板支輪(雲文) [向拝]木鼻(獅子・蟹)、水引虹梁(亀・波)、虹梁(波文若葉)、手扶(牡丹)、中備(日本武尊・宮賣姫)、兎毛通(鳳凰)、妻婆(鶴・雲流)、板支輪(雲文)、柱(地紋彫)		



写真128-8 正侧面



写真128-9 側背面



写真128-10 向背



写真128-11 身舎木鼻・尾垂木



写真128-12 内部



写真128-13 天井画

地紋彫から虹梁の浮彫(波紋・亀)、中備から妻飾にかけての細密な彫刻に押殿の特徴が表れている。これらの彫刻には施主名(地元氏子)が刻まれ、信仰心の厚さがうかがえる。これらの形式は江戸後期から末期の特徴を示しており、建造年は内部に掲げられた寄進者銘版に示す嘉永5年(1852)で妥当である。

まとめ

近年まで女人禁制であった奥宮大祭、虫切鎌、団子相撲の特殊神事は県史、郡誌、町誌、伝統文化継承事業調査報告他で取上げられ、「長野原町の民俗」では特別調査報告がなされている。時枝務氏は祭祀

は浦野家が、近世以来一貫して務めてきたことは特記されるべきこととしてその歴史的・社会的分析を試みている。浦野家は山岳信仰大乘院としてこの地方に大きく影響しており、上毛かるたの浦野匡彦はじめ名家として逸材を多く輩出している。王城山信仰の歴史を示す神社である。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

参考文献

- 『長野原町誌 上・下巻』長野原町誌編纂委員会 昭和51年
- 『吾妻地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年
- 『吾妻郡社寺録』西毛新聞社 昭和53年
- 『長野原町の民俗』長野原町教育委員会 昭和63年

134 大 笹 神 社 [おおざさじんじゃ]

表134-1

神社名	大 笹 神 社	所 在 地	吾妻郡嬬恋村大字大兼字塙ノ島176-1
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 大 笹 神 社
主祭神	建御名方神、八坂刀売神	神事	宵祭(9/16)、神幸祭(9/17)、大 笹 獅 子 舞(9/16・17両日)
創立・沿革	本社の創建は源右府浅間狩獵の時にありて現今の社殿は元文元年(1736)9月名主黒岩長左衛門願主として再建せしものなり。明治42年(1909)3月13日許可、本社境内末社として祭祀せる音原神社及同村字上ノ原無格社白山神社、宇幕沢無格社大山祇神社道境内末社三社宇砂井無格社諏訪神社を合併同時に村社大 笹 神 社と改称せり(吾妻郡社寺録)より。		
文化財指定	芭蕉の句碑(村重文 昭和48年12月)		

位置・配置(図134-1、写134-1)

浅間山北麓の台地、吾妻川右岸の大 笹 地区に位置する。標高は大凡900mである。境内地は国道144号線・旧大 笹 街道に面した平坦な地形であり、社殿は西向きに鎮座し、西から鳥居、参道、社殿が直線上に配置される。社殿の周囲には桜が植栽されている。境内にはカラマツが林立し、シャクナゲが生育する。



図134-1 配置図



写134-1 境内全景

由来および沿革

大 笹 (仁礼) 街道大 笹 関所を置く上州最終の宿大 笹 村は天正3年(1575)に甘楽郡間屋黒岩長左衛門らの転入、真田武田一族の上州進出を機に栄えた。北信諸藩の米や油の輸送の要衝であり、草津湯治及び善光寺参りの往来も多く、市が立ち町民文化が栄えた。境内地は塙ノ島氏が住み着いてたといわれる地で、諏訪神社として祀られていた。元文元年(1736)名主黒岩長左衛門が社殿再建、長左衛門は天明3年の浅間押で鎌原村救済にあたる。明治期に村社として合祀、「すわさん」とも呼ばれる。

本殿(図134-2、表134-2、写134-2～134-7)

社殿は拝殿、幣殿、覆屋が権現造の形式になり、覆屋内に本殿が置かれる。二間社流造、正面1.53m、側面0.99mの社である。総檼の素木造で部分的に朱及び黒塗りが施されている。彫刻は少なく、具

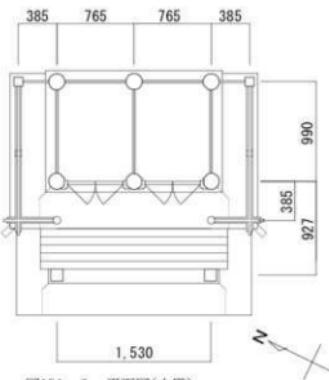


図134-2 平面図(本殿)

表134-2 本殿

建造年代／根拠	元文元年(1736)／棟札	構造・形式	二間社流造(1.53m)、側面1間(0.99m)、向拝1間・銅板葺、覆屋付
工 匠	[大工]棟梁 田村七郎次 [木挽]宮澤作兵衛	基 础	切石基礎(基礎兼用)
軸 部	[身舎]丸柱、土台、貫、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]出組(拳鼻) [向拝]出組(拳鼻)、連三斗(拳鼻)
中 備	[身舎]本幕股 [向拝]板幕股	軒	二軒、繁垂木、蛇腹支輪
妻 飾	虹梁大瓶束、笈型	柱 間 装 置	棟唐戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方博縁、擬宝珠高欄、脇障子(板)、登勾欄、木階5級、浜床	床	拭板
天 井	化粧屋根裏	須弥壇・扇子・宮殿	扇子
塗 装	素木、朱塗(斗拱、支輪)、黒塗(垂木、支輪、文様)	飾 金 物 等	一文字・金折(長押)、八双(棟唐戸)
繪 画	なし	材 質	檜
影 刻	[身舎]木鼻(渦文)、拳鼻(渦文)、幕股(竹、菖蒲、松)、笈形(渦文・花文)、手挾(花文) [向拝]木鼻(獅子・象)、拳鼻(渦文)、虹梁(渦・若葉文)、手挾(花文)		



写真134-2 全景



写真134-3 背面・側面



写真134-4 向拝



写真134-5 身舎側面組物・妻飾



写真134-6 向拝側面



写真134-7 向拝木鼻

象的な彫物は向拝の木鼻(獅子及び狛の丸彫)と幕股継抜き部(草花の薄肉彫)に見られるのみで、基本的に木鼻を拳鼻とし、水引・海老虹梁の側面とともに簡素な文様で比較的浅い彫りとなっている。内法下には彫刻や彩色は見られず、胴部及び脇障子は漆の羽目板である。建造年は棟札記に元文元年(1736)上棟、そして宝曆4年(1754)再建とある。一部の部材に修理・置換が見られるが、元文元年の建造とする。

拝殿 (图134-3、表134-3、写134-8～134-10)

正面3間、側面2間、入母屋造平入、正面を千鳥破風とし軒唐破風付の向拝を受け、茅葺屋根に銅板

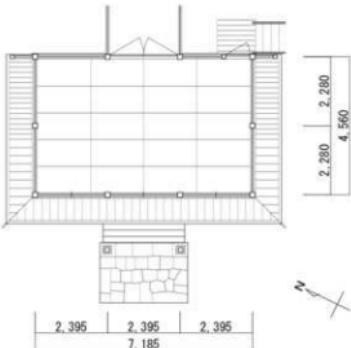


写真134-3 平面図(拝殿)

表134-3 押殿

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面3間、側面2間、入母屋造、平入、千鳥破風、向拝1間、軒唐破風付、銅板一文字葺(当所茅葺)
工 匠	[奉納額] 絵馬 延享4年(1747)坂上深八・年代不詳 対野洞白門人 藤原口景 [句額]弘化3年(1846)土佐派 藤原寿重 [天井画]年代不詳 土佐派 藤原寿重 [境内灯籠]嘉永元年(1848)高遠石工	基 础	コンクリート布基礎
軸 部	[身合]土台、角柱、貫(足下、地頭) [向拝]角柱、虹梁(水引・繩)、手扶	組 物	[身合]大斗肘木 [向拝]出三斗(拳鼻)
中 備	[身合なし] [向拝]木幕股	軒	二軒疊垂木
妻 飾	大瓶束	柱 間 装 置	半蔀戸、板羽目、板戸
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子(板)、木階3級	床	疊敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身合外部]朱塗、黒塗、白塗 [天井画]楓彩	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画、奉納額	材 質	杉
彫 刻	[身合]拳鼻(尚文)、木鼻・肘木・懸魚(満・若葉文) [向拝]木鼻(獅子・額)、拳鼻(尚文)、虹梁・手扶(満・若葉文)		



写真134-8 押殿全景



写真134-9 向拝見上



写真134-10 絵馬(延享4年)

を被せた量感のある屋根を戴せる。基本的な構造部を残して改修・美装が行われている。軸部は土台敷、貫・長押構造、柱上に大斗肘木を置き出組とする。向拝は出三斗である。具象的彫刻は向拝の木鼻(獅子・象の丸彫)と水引虹梁上中備の幕股(梅)を付けるのみで、他(木鼻・肘木)は簡素な唐草文様となっている。内部の壁には絵馬(延享4年(1747))や句額(弘化3年(1846))が掲げられ、墨書きのある天井画で飾られている(年代不詳)。建造年についての資料については、謹書(折原博輔・板に墨書き)が残され、元文元年(1736)に再建された押殿を文久2年(1862)に屋根替をした旨記されている。限られた細部様式からの年代推定であるが、18世紀中期の建造と思われる。

まとめ

旧大坂街道峠道(須坂市指定史跡)は福島宿(須坂市)～大坂宿を結び、類例のない土手道約680m

を有す。信州との影響関係を示す伝統の獅子舞は真田町の十林寺から習ったと言われ、平成28年、伝統文化継承事業調査報告書にて報告されている。地域が結束し各世代が揃って祭礼が受け継がれている。江戸期に十辻舎一九が『続藤栗毛』にその賑わいを記した大坂宿に花開いた文化は句額・絵馬、天井画にも色濃く残る。社殿、絵画等、伝統神事と併せて文化の交流を伝えている。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

【参考文献】

『吾妻地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年

『吾妻郡社寺録』西毛新聞社 昭和53年

『嬬恋村誌 上・下巻』嬬恋村誌編集委員会 昭和52年

『嬬恋村の自然と文化』松島栄治 嬌恋郷土資料館 平成

17年

135 白根神社〔しらねじんじゃ〕

表135-1

神社名	白根神社	所在地	吾妻郡草津町大字草津字開山538
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 白根神社
主祭神	日本武尊	神事	氏子祭り(7/17・18)
創立・沿革	上野国神名帳(群馬県指定重要文化財)に從一位白根明神と載る。白根山頂の奥社は旧社または從二位の小白根明神であったともいわれる。旧遙拝所は草津小学校隣接の天照原大神宮付近にあったが、明治6年(1873)郷社とする際に当地を占て本社と定め遷座、新たに社殿を建設した。山頂の奥社は數回の噴火で何度か場所を変え、昭和5年(1930)に現在の石宮の場所になった。		
文化財指定	草津驚湯碑(町重文 平成2年3月)		

位置・配置(図135-1、写135-1)

草津温泉街湯畠の北側、湯川左岸の段丘に位置する。温泉街湯畠から北に入った参道入口から、石段を登り詰めた高台に位置し、木立に囲まれた境内に南向きに社殿が鎮座する。

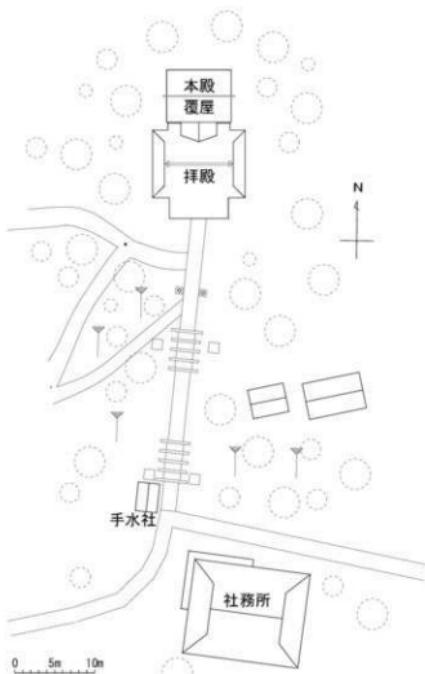


図135-1 配置図

由来および沿革

吾妻郡十二座從一位白根明神、從二位も小白根明神であり、地域における白根信仰の影響力をうかがわせる。境内神社沼神社は明治16年(1883)六合村大字小雨村字沼尾から移遷した上で上野国神名帳には從五位上不多明神とされる。参道左手奥には諏訪大社上社草津白根分社を置く。なお西の河原の穴守稻荷は東京羽田の人が温泉湯治病平癒の御礼で羽田から分社したものであり、当社氏子の管理となる。



写135-1 境内全景

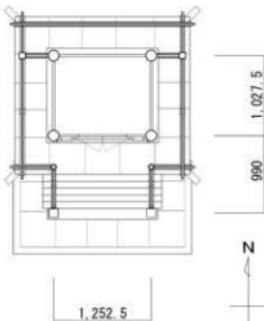


図135-2 平面図(本殿)

本殿（図135-2、表135-2、写135-2～135-7）

拝殿、幣殿、覆屋の権現造形式とし、覆屋内に本殿を置く。一間四方（0.955×0.855m）、隅木入春日造、軒唐破風付向拝を付ける。組物は柱上及び中備を三手先として大きく屋根を張出し、腰組も三手先で大床を受けている。向拝は出三斗・連三斗の2段とし更に内側に出組を付ける。木鼻、海老虹梁、手挾及び向拝中備に丸彫や籠彫の精巧な彫刻を付

け、虹梁・頭貫側面、胴羽目、向拝柱等の一面に地紋彫りを施している。母屋の丸柱は金欄巻であり、長押には金泥で銘金物が模されている。本社は組物の量感、彫刻意匠と彩色が特徴的であり、社格の高い神社として尊重されてきたことがうかがえる。建造年については棟札資料等なく不明であるが、建築的特徴から19世紀前期と推定する。

表135-2 本殿

建造年代／根拠	19世紀前期／建築様式	構 造 ・ 形 式	一間社(0.955m)、隅木入春日造、向拝1間、軒唐破風付、側面1間(0.855m)、木板瓦棒葺、覆屋付
工 匠	不明	基 础	切石基壇、龜腹
軸 部	[身合]丸柱、土台、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身合]三手先尾垂木付(拳鼻)、連続巻斗 [腰組]三手先尾垂木付(拳鼻) [向拝]出三斗・連三斗(2段)
中 備	[身合]詰組 [向拝]彫刻嵌込	軒	[身合]二軒繁垂木、板支輪 [向拝]茨垂木
妻 飾	虹梁大瓶束、笈形	柱 間 裝 置	棟唐戸、両袖彫刻嵌込、板壁
縁・高欄・船障子	四方切目縁、禪宗様・組高欄、脇障子、登高欄、木階5級、浜床	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	朱塗、黒塗、極彩色(彫刻)、金欄巻(身合柱)、金泥塗(長押)	飾 金 物 等	一文字、金折(長押)
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身合]木鼻(鶴)、拳鼻(渦文)、笈形(渦文)、棟唐戸(草花・花木・鳥)、正面胴羽目(鯉竜巻り)、側面・背面板壁(青海波・团扇・軍配/地紋彫)、脇障子(竹・鳥)、頭貫(地紋彫)、支輪(紅葉)、妻虹梁(花木文)、笈型(渦文) [身合腰]拳鼻(渦文)、支輪(流水門・花) [向拝]木鼻(獅子・狛)、水引虹梁(松/地紋彫)、虹梁(龍)、中備(人物・花木)、手挾(松・鷹)、柱(梅/地紋彫)		



写135-2 全景



写135-4 側背面



写135-5 向拝

写135-6 背面組物・妻飾

写135-7 向背側面

まとめ

吾妻郡内で最も格式が高く、地域に残る合祀の記録には白根神社名が多くみられる。旧社される山頂湯釜火口の硫黄堆積層から12世紀の笠塔婆が出土するなど、古くからの靈場・修驗道の痕跡を残す。近世でも江戸をはじめ各地からの湯治客等に信奉され、草津温泉の成立と深く関わる歴史を有す。冬住としての六合村、吾妻地方の有力修驗道者との関係

も含め、本殿はその変遷や意匠の意味解明が待たれる。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

【参考文献】

『草津温泉誌 1・2・3卷』草津町誌編纂委員会 昭和

51～平成4年

『吾妻郡社寺録』西毛新聞社 昭和53年

136 三島神社（みしまじんじゃ）

表136-1

神社名	三島神社	所在地	吾妻郡高山村大字中山5546
旧社格	無格社	所有者・管理者	宗教法人 三島神社
主祭神	天山祇命 天国主命 事代主命	神事	春祭(4/15)、秋祭(旧9/15)、太々神樂奉納
創立・沿革	社伝記によると、神功皇后7年(207)に創立、神龜元年(724)斎宮を造立、宝龜2元年(771)伊豆國三島大神を勧請した。元亀元年(1570)当村城主が再び伊豆國より大神を勧請して社地を拡張し、社殿を造営する。		
文化財指定	三島神社社殿(村重文 昭和40年6月)、中山三島神社のスギ並木(県天記 昭和59年7月)、三島神社太々神樂(村無民 昭和40年6月)		

位置・配置 (図136-1、写136-1)

県道145号線(旧三国街道)の中山宿の沼田側のはずれ、用水池脇を北に入ると享保16年(1731)石造

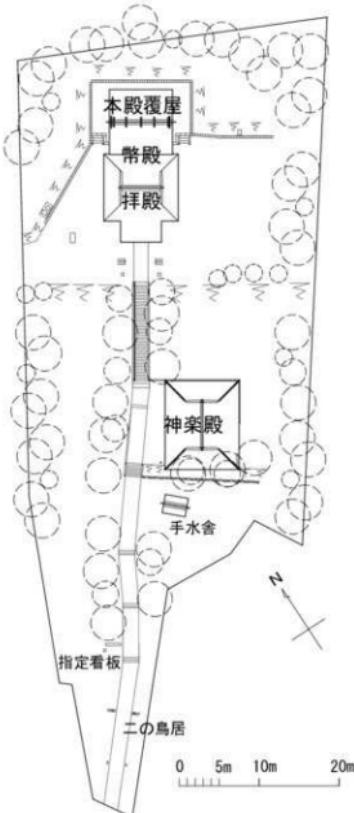


図136-1 配置図

の「一の鳥居」がある。この鳥居はもと三国街道沿いで、神社入り口となっていたが、道路改修などで現在地に移動したと聞く。細道を進むと人家もはてる所に「二の鳥居」と鎮守の森が現れ、三島神社となる。南から鳥居を潜ると参道は緩い登りとなり、樹齢400年の大木の杉並木(県指定天然記念物)が続く。右手に手水舎と、例祭に太々神樂(村指定重要無形民俗文化財)が舞われる神楽殿がある。そこから急な石段を46段上った高台が、社殿の広場となる。社殿前には安永7年(1778)の石灯籠と狛犬が一対ずつあり、社殿裏は山奥へと続く斜面を、昭和に整備された石垣が強固に守っている。古くから、中山宿の鎮守や街道を通る旅人の安全祈願として賑わった神社は、歴史を教えてくれる重要な建物である。



写136-1 境内全景

由来および沿革

社伝では、神功皇后7年(207)創立、神龜元年(724)に斎宮を造立、宝龜2元年(771)伊豆國三島大神を勧請した。その後元亀元年(1570)当村城主の靈夢より再び伊豆國より大神を勧請して、社地を拡張し、社殿を造営する。弘化年間(1844~1848)新宮再建に際しては吾妻全部、群馬と利根一部より寄附が集まるほど、広範囲に知られていた。村誌では6枚

あると記される棟札は、今回の調査で元禄13年(1700)、宝永4年(1707)、文久3年(1863)の3枚が確認できた。宝永と文久は改修のものと判断する。大正12年(1923)には本殿以外の建物が改築され、昭和49年(1974)にも改築されている。

本殿(図136-2、表136-2、写136-2~136-7)

本殿は棟に棟押のみを置く、三間社流造、平入、目板打流板葺、正面向拝1間付、切妻造。軒は向拝が打越二軒繋垂木、身舎は一軒繋垂木とする。妻壁は小屋裏、破風に懸魚、桁と向拝桁隠も懸魚型である。組物は、向拝角柱に出三斗、中央梁上に違輪紋の浮彫幕股、両脇に特長的な形の手挾、海老虹梁が掛る。身舎は自然石に敷土台、丸柱を建てて上に太い舟肘木を置き、桁梁を受ける。縁長押、内法長押以

表136-2 本殿

建造年代／根据	17世紀末期／建築様式	構造・形式	三間流造(2.99m)、側面1間(1.84m)、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 磐	周り切石、内部自然石
軸 部	[身舎]丸柱、頭貫、縁長押、内法長押、敷土台 [向拝]角柱、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]舟肘木 [向拝]出三斗
中 備	[身舎]なし [向拝]中央梁上板幕股	軒	[身舎]一軒繋垂木 [向拝]打越二軒繋垂木
妻 飾	[妻屋]東 [破風]懸魚、同型桁隠	柱 間 装 置	[身舎]正面両開板戸、両脇背面板壁
縁・高欄・船障子	[身舎]三方縁、変形擬宝珠高欄、板障子 [向拝]登高欄変形擬宝珠付	床 拭板、正面拭板浜床(後付)	
天 井	不明	須弥壇、扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗痕跡 [屋根・床下]黒塗痕跡	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉
影 刻	正面板幕股(違輪紋浮彫)		



写136-2 向拝正面



写136-3 向拝組物



写136-4 本殿正面



写136-5 妻壁、海老虹梁



写136-6 手挾



写136-7 本殿背面

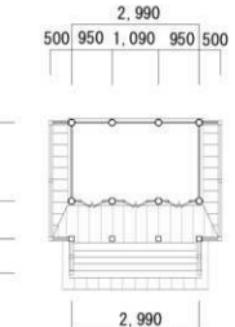


図136-2 平面図(本殿)

外の彫刻など装飾は無い。三方に縁を回し、板障子を両側に置く。高欄の擬宝珠は変形であり、後の改修である。全体を幣・拝殿と同時大正12年造の切妻造、カラー鉄板葺の覆屋で囲われている。

神社には慶長18年(1613)の「三嶋権現 造立奉賀請取帳(写)」と元禄、宝永、文久の3枚の棟札が残されている。神伝では慶長時造立、棟札は覆屋の改修札とされているが、棟札など建物様式を考慮すると、「元禄13年(1700) 大工 大木兵左衛門 関友兵衛 大津権右衛 関治郎兵衛 関助 横大木弟左衛門 大木五兵衛」の棟札の17世紀末期の造立と考える。装飾の無い水引虹梁や水平に掛けられた海老虹梁、手挾の唐草絵様の若葉も簡素で、向拝の棟股も古風である。現在は素木に見える社殿も、朱塗に一部黒塗の遺構があり、造立時の華やかさを残している。

幣殿(图136-3、表136-3、写136-8～136-10)

建物は切妻造、妻入、カラー鉄板葺である。軒は一軒疊垂木、角柱で組物はない。内障子付のアルミ建具が板張りの両壁に付く。天井は小屋裏表とし、床は板敷である。

幣殿の築造は写真と旗立石より大正12年(1923)の改築時に造られた。

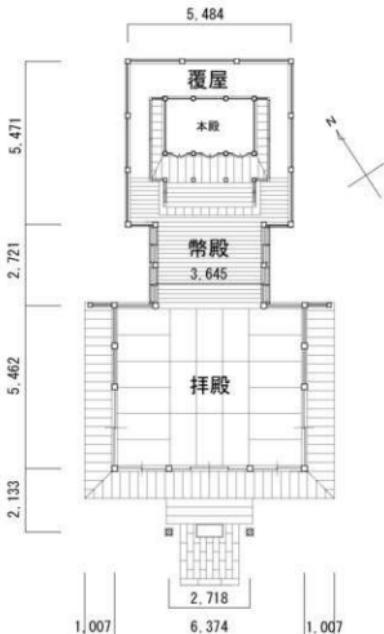


图136-3 平面图(社殿)

表136-3 币殿

建造年代／根拠	大正10年(1921)／写真、記念旗建石	構造・形式	正面1間(3.6m)、側面2間(2.72m)、雨下造 カラー鉄板葺き
工 匠	不明	基 磐	切石布基礎
軸 部	角柱、敷土台	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	内障子付引違アルミサッシ(面格子付)、板壁
縁・高欄・船障子	なし	床	拭板
天 井	小屋裏表	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	杉
彫 刻	なし		



写136-8 币殿外部西面



写136-9 内部北面



写136-10 内部東面

拝殿（図136-3、表136-4、写136-11～136-16）

拝殿は入母屋造、平入、カラー鉄板葺、正面に1間の向拝を置く。軒は向拝が打越二軒繁垂木、他は一軒繁垂木とする。向拝角柱に出三斗、彫刻木鼻、水引虹梁上に蔓股、海老虹梁、丸彫彫刻の手挟、化粧破風（唐草）を配する。身舎は切石布基礎に敷土台、角柱上を大斗肘木で丸桁を受け、四方に彩色遣構を残す木鼻（拳と牡丹の交差）を付ける。正面繁虹梁上は、中備として大斗肘木と木鼻を用いる。妻壁は菱型付大瓶束、破風に懸魚を置く。三方に縁を回し、板脇障子を設ける。内部は、幣殿入口虹梁上に文化元年（1804）無幻書の「三島神社」額を掛けた。天井は竿縁天井、敷壇である。

拝殿は写真と記念旗立石より大正12年（1923）造立である。ただ、前建物の部材を多く転用しており、正面虹梁の唐草の巻、象の木鼻など19世紀中期の遺構を残している建物である。改修は昭和49年（1974）の記録がある。

まとめ

本殿は装飾が少なく、端正で力強い建物である。造立年代については、今後の調査により新たな発見が期待される。ただ17世紀末期の建物も県内では数が多く貴重である。拝殿も大正年代の造立であるが、江戸時代後期の古材が多く転用されているため、古建築の趣を残している。古くは街道ゆく旅人

表136-4 拝殿

建造年代／根据	大正10年（1921）／写真、記念旗建石	構造・形式	正面3間（6.37m）、側面3間（5.46m）、入母屋造、平入、向拝1間、カラー鉄板葺
工 匠	不明	基 础	外周 切石布基礎
軸 部	〔身舎〕角柱、縁長押、内法長押、敷土台 〔向拝〕角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組 物	〔身舎〕大斗肘木 〔向拝〕出三斗
中 備	〔向拝〕水引虹梁上蔓股	軒	〔身舎〕一軒繁垂木 〔向拝〕打越二軒繁垂木
妻 飾	〔妻壁〕菱型付大瓶束 〔破風〕懸魚	柱 間 装 置	〔身舎〕板壁、4本引違腰付格子+舞良戸、引違舞良戸
縁・高欄・脇障子	三方縁、板脇障子	床	疊敷
天 井	〔身舎〕竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、朱塗痕跡 〔彫刻〕彩色塗痕跡	飾 金 物 等	内法長押（釘隠・隅金物）、唐破風（飾金物）、向拝柱（根巻金物）
絵 画	なし	材 質	杉
彫 刻	〔外部〕木鼻（獅子、象、牡丹、拳）、水引虹梁（渦唐草絵様）、手挟（菊）、虹梁（唐草絵様）、向拝柱（刻線彫）〔内部〕幣殿入口虹梁（菊水唐草絵様）		



写136-11 拝殿正側面



写136-12 向拝組物



写136-13 海老虹梁・手挟



写136-14 菊木鼻



写136-15 彫刻木鼻



写136-16 内部北面

の安全を願い頼わった「三島権現」も、今は地域の人々の信仰を集め、森の中静かにたたずむ神社である。

(貝磯博子)

【参考文献】

『高山村誌』高山村誌編纂委員会 昭和47年

『高山村の民家と宗教建築』高山村教育委員会 昭和53年

『たかやまの文化財』高山村教育委員会 平成7年

『吾妻郡神社要覧』群馬県神社庁吾妻支部 令和元年

137 北之谷稻荷神社（きたのやいなりじんじゃ）

表137-1

神社名	北之谷稻荷神社	所在地	吾妻郡高山村大字尻高4300-2
旧社格	無格社	所有者・管理者	地域氏子
主祭神	稻荷大明神	神事	初午祭(2/11)
創立・沿革	神社に伝わる建立帳より、元禄16年(1703)領主向井主税が繁昌を祈ってお宮代銀十両を下し、地域で小宮を造り創立したとされる。		
文化財指定	北之谷稻荷神社社殿(村重文 昭和55年2月)		

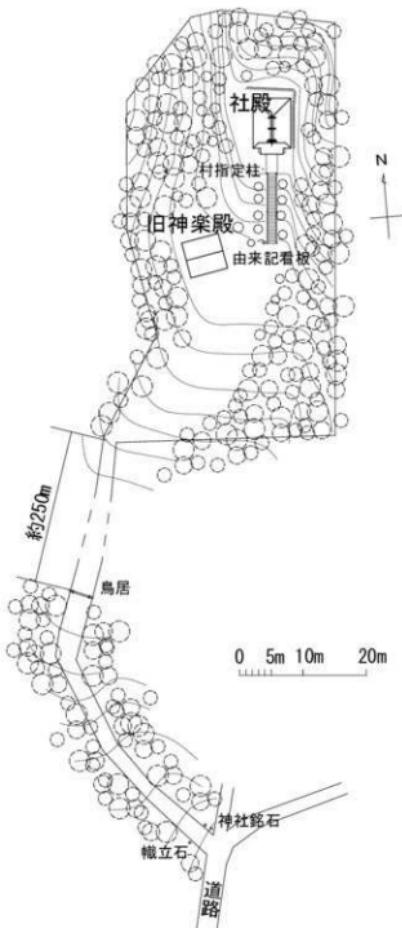


図137-1 配置図

位置・配置（図137-1、写137-1）

神社は高山村西部尻高地区の山中に鎮座している。国道143号の「泉龍寺」看板を入り、寺院前の道を東に進むと、道路沿いに神社銘の標識があり入り口となる。参道は森の中、細く急な登りをしばらく進むと、朱色の鳥居（2019年改修）が現れる。鳥居を潜り奥へ250mほど進むと広場があり、左脇には軽量鉄骨造の神楽殿がある。中央に急傾斜の石段があり、登り口脇には神社由来記の看板がある。両脇が巨大な杉並木の石段を登った正面が社殿である。社殿西側急斜面下は渓流が流れ、その奥に小滝がある。東・後面も急斜面の森に囲まれている。



写137-1 境内全景

由来および沿革

神社には、「建立帳」が元禄16年(1703)と宝暦2年(1752)の二冊残されている。毎年の奉納、寄進、経費などを記録した中の「稻荷大明神建立覚書」に建立について、「当邑稻荷大明神は元禄16年(1703)末ノ正月、御地頭向井主税様御代仰せつけられ繁昌を祈られ御宮代として銀十両下され候につき相応に建立仕り候」と記載されている。同書には本殿、拝殿、石段、上屋の築造記録も記載されている。祭神は稻荷大明神で、毎年2月11日に初午祭が行われる。

る。近年まで祭礼に神楽が奉納されていたが、後継者もなく中止されている。神社は古くから地域の人々に手厚く整備管理され、敬われている。社殿は昭和55年(1980)に村指定重要文化財となる。

本殿 (図137-2、表137-2、写137-2～137-7)

本殿は一間社流造、平入、柿葺で正面に向拝1間を付ける。社殿は覆屋床上に木製の基壇、その上に土台を敷き造られている。向拝柱は角柱、水引虹梁と海老虹梁の唐草絵様は18世紀前期の仕様を表している。また、象形木鼻に張出した連三斗と中備の幕股(つぼみ透影)が屋根を強固に支えている。身舎

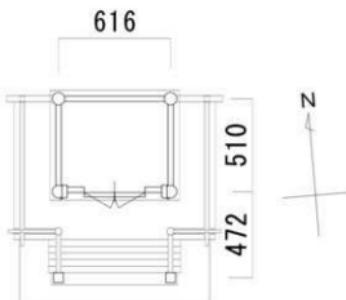


図137-2 平面図(本殿)

表137-2 本殿

建造年代／根据	享保8年(1723)/建立帳	構造・形式	一間社流造(0.61m)、側面1間(0.51m)、向拝1間、柿葺
工 匠	[大工]富田村(現太田市毛里田地区)加兵衛 弟子4名/建立覚書	基 础	なし
軸 部	[身舎]丸柱、頭貫、綠長押、内法長押 [向拝] 柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]四方彫刻幕股 [向拝]彫刻幕股	軒	[正面]打越二軒繁垂木 [その他]二軒繁垂木
妻 飾	[妻壁]妻虹梁、宝珠彫刻幕股 [破風]猪目懸魚、 桁廻	柱 間 装 置	[正面]岡開板戸 [両側背面]板壁
縁・高欄・脇障子	[身舎]三方縁、組高欄付、板脇障子 [向拝] 登高欄 握宝珠付	床	拭板、前面のみ拭板浜床
天 井	小屋裏表	須弥壇・扇子・宮鏡	なし
塗 装	朱・黒塗、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	地長押・内法長押・頭貫の角金物、屏金物
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	水引虹梁(唐草絵様)、海老虹梁(唐草絵様)、木鼻(象形)、幕股内部(つぼみ)、菊水、紅葉・波、梅、宝珠		



写137-2 前面



写137-3 向拝正面



写137-4 侧面組物



写137-5 背面



写137-6 海老虹梁



写137-7 縁、欄干

は丸柱に出三斗を置き四方に拳木鼻を配する。中備の裏股の肩は高く、正面には紅葉と波、梅、菊水の彫刻がある。黒塗の地長押、内法長押、頭貫が周り、角に飾金物が付いている。正面の板戸の飾金物以外、背面と脇障子に装飾はない。軒は向拝部が打越二軒疊垂木、他が二軒疊垂木、妻壁は虹梁上に宝珠を抱いた裏股があり、彫刻桁隠、懸魚は彩色されている。内部床は板敷、三方に縁を回し、組高欄を付ける。階段下前面のみ浜床を設ける。全体を朱と黒で塗り、装飾も少ない稻荷社の建物である。

建造年は社伝の「建立帳」に、享保8年(1723)5月上旬から8月迄と書かれている。大工は富田村(現太田市毛里田地区)加兵衛 弟子4名と記されている。その後の修復記録はない。

拝殿・本殿 覆屋(図137-3、表137-3、写137-8~137-13)

建物は切石布基礎に土台を回し角柱を建てた、表入母屋造(裏寄棟)、妻入である。棟に千木、堅魚木3本を置く。正面に1間の向拝を出し、縁を付ける。向拝は角柱に出三斗、彩色された彫刻木鼻、中央が高くなる変形水引虹梁、海老虹梁を置く。水引虹梁に「正一位稻荷大明神 寛政九年(1797)丁巳二月初午吉祥日 上野国群馬郡上尻高村(現高山村)松井重左エ門」の鰐口が下る。軒は黒塗垂木で、向拝を打越二軒疊垂木、側背面は一軒疊垂木である。

表137-3 拝殿・本殿 覆屋

建造年代／根柢	[拝殿]宝曆8年(1758)／建立帳 [覆屋]宝曆9年(1759)／建立帳	構造・形式	正面3間(3.63m)、側面3間(5.54m)、背面2間、入母屋寄造(背面寄棟)、妻入、向拝1間、カラーフレット葺(当初茅葺)
工 匠	[大工](拝殿)当村 弥吉、大塚村(現藤岡市)彦左衛門 (覆屋)平村(現下仁田町)文左衛門、当村弥市右衛門	基礎	切石布基礎
軸 部	[社殿]角柱、地長押、内法長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組物	[社殿]大斗肘木 [向拝]出三斗
中 備	[社殿]なし [向拝]束	軒	[正面]二軒疊垂木 [両側背面]一軒疊垂木
妻 飾	板張押縁付 [破風]猪目懸魚	柱間裝置組	漆(板・格子)、板戸、板壁 [上屋]上部横桟組
縁・高欄、脇障子	正面濡縁	床	拭板
天 井	[拝殿]格天井 [上屋]小屋裏表	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[外部]朱塗(柱、梁、長押)、黒塗(垂木)、その他彩色(板壁、上部梁、頭貫) [内部]朱塗(柱、梁、縁・長押)、極彩色(壁)	飾金物等	なし
繪 画	[外部]上部壁(菊水)、頭貫(鱗模様) [内部]梁(牡丹)、上壁(つた・家紋)、壁(獅子・松梅)、材天井画(花鳥)	質	杉、檜
彫 刻	[拝殿]大斗肘木(溝)、拳木鼻(溝) [向拝]水引虹梁(唐草絵様)、海老虹梁(唐草絵様)、木鼻(獅子、象)		

拝殿は雲形大斗肘木、隅に拳木鼻を置く。柱、梁、長押、大斗肘木が朱塗となり、柱貫、頭貫が鱗模様に、その間の板壁に菊水の絵が描かれている。内部も柱、内法長押、大斗肘木が朱塗、壁建具は白塗と

3.632



図137-3 平面図(拝殿・上屋)



写真137-8 正・側面



写真137-9 背・側面



写真137-10 向拝正面



写真137-11 向拝組物



写真137-12 内部正面



写真137-13 格天井

されている。ただし、正面脇壁の松梅鶴、両側面壁の獅子、その他梁や上壁に描かれた牡丹、唐草、家紋などは年代、作者が不明であるが、後年描かれたものである。天井は格天井で花鳥や人物が描かれ、鮮やかに残っている。作者銘が幾つか有るが、旅の画人と伝わる。

拝殿の築造も、「建立帳」に、「宝暦 8 年(1758) 5 月上旬から 8 月まで、上屋は石段と一緒に宝暦 9 年(1759) 9 月より宝暦 10 年(1760) 普請成熟」とある。拝殿大工は「当村弥吉、大塚村(現藤岡市) 彦右衛門」、石段は「信州(現長野県) 幸八、弟子 2 人」、上屋大工は「平村(現下仁田町) 門左衛門、当邑弥市、右衛門」とある。また、教育委員会設置の由来記には「昭和 61 年(1986) の大改修時、屋根の破風のところにある懸魚を取りはずして見たら、その裏に宝暦十年と墨書きされた落書きがあり」と掲載されている。今回調査で墨書きは確認出来なかったが、発見した木札には「清殿一作造 宝暦拾壹年(1761) 己亥月 大工平村隅貫文左衛門」とある。年月の違いはあるが、関連した重要な資料である。

まとめ

本社は、森林に覆われた山中の滝脇に造られた、小宮である。神社の創立や建物の建造年代を確定できる「建立帳」が代々受け継がれて残っており、調査で木札も発見された。明治期に合祀されることなく、良く維持管理されている境内・社殿から、地域における信仰の深さと歴史をうかがうことができる神社である。建物は屋根の吹替など以外では、改修履歴が少なく、18世紀中期の形を良く残した建物である。祭事に催された神楽が途絶えたことは残念ではあるが、地域のみで守られている稻荷社としては、貴重な建物である。

(貝磯博子)

【参考文献】

- 『稻荷大明神建立帳』神社所有 元禄16年 宝暦2年
- 『村重要文化財指定に関する記録』神社所有 昭和55年
- 『高山村誌』高山村誌編纂委員会 昭和47年
- 『たかやまの文化財』高山村教育委員会 平成7年

138 大宮巣鼓神社〔おおみやいわつつみじんじゃ〕

表138-1

神社名	大宮巣鼓神社	所在地	吾妻郡東吾妻町原町811
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 大宮巣鼓神社
主祭神	日本武尊、弟橘姫命、素戔鳴命、保食命	神事	歳旦祭(1/1)、祈年祭(2/17)、神明宮例祭(4/5)、春祭(5/5)、秋祭(9/9)、新嘗祭(11/23)
創立・沿革	吾妻太郎行盛が武藏國大宮なる氷川明神を崇敬して配祀したと伝えられている。また、天正18年(1590)の真田家の朱印状、寛永16年(1639)の同家墨印状が存在しており、このことから創立は天正18年以前と考えられる。明治6年(1873)村社に列し、大正4年(1915)神饌幣帛料共進神社に指定され、昭和16年(1941)には郷社に列格している(『原町誌』)。		
文化財指定	藏手刀(県重文 昭和55年4月)		

位置・配置(図138-1、写138-1)

東吾妻町原町のJR群馬原町駅から北へ500mほどの住宅地に鎮座している。町道を挟んだ東側には原町小学校がある。境内は三方が町道で西側が住宅地となっており、周囲を石垣で囲っている。南側町道から朱の大鳥居を過ぎて参道を進み石段を登ると元禄9年(1696)奉納の石灯籠と享保5年(1720)奉造立の石鳥居がある。左に社務所、右に神楽殿と宇婆



図138-1 配置図

神社があって、正面に拝殿と玉垣がめぐらされた本殿が南向きに鎮座している。拝殿には本殿の向拝部分を取り込んだ幣殿が増築されており、西脇には神饌所が設けられている。境内の右手奥には伊勢明神宮と八幡宮が鎮座している。参道左手には大宮会館(結婚式場)があり、社務所に隣接して子供クラブの建物がある。外周は樹齢800年ほどといわれている大ケヤキをはじめ多くの樹木で囲まれており、東側町道脇にはケヤキとスギが一体となった珍しい連理木がある。

由来および沿革

『原町誌』によれば、吾妻太郎行盛が武藏國大宮なる氷川明神を崇敬して配祀したと伝えられている。また、天正18年(1590)の真田家の朱印状及び寛永16年(1639)の同家墨印状が存在しており、このことから創立は天正18年以前と考えられる。明治6年(1873)村社に列し、大正4年(1915)神饌幣帛料共進神社に指定され、昭和16年(1941)には郷社に列格している。



写138-1 境内全景

本殿（図138-2、表138-2、写138-2～138-7）

棟札は不明であるが、「吾妻地方の文化財」によれば、草葺屋根から鉄板葺に改める時、棟にのっていった堅魚木から安永2年(1773)12月の墨書が出たといい伝えるとしている。また、拝殿向拝扁額の裏書に「寛政四年壬子八月二日辰戌書之」とあり、これらのことから寛政4年(1792)以前の建造であると考えられる。海老虹梁は反ってはいるがほぼ水平に架

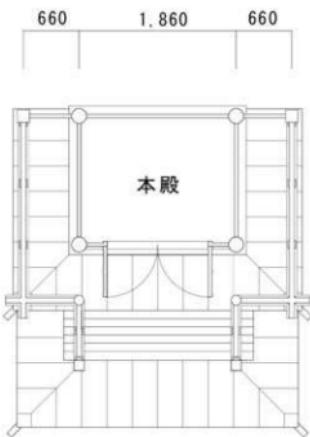


図138-2 平面図(本殿)

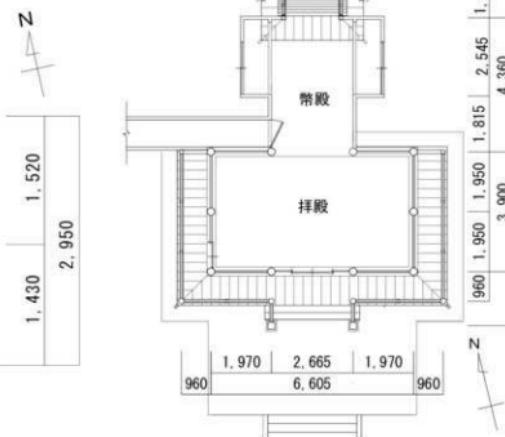


図138-3 平面図(社殿)

表138-2 本殿

建造年代／根据	18世紀後期／建築様式	構造・形式	一間社隅木入春日造(1.86m)、側面1間(1.52m)、向拝1間、銅板葺(当初草葺)
工 匠	不明	基 磡	切石布基礎
軸 部	[身舎]丸柱、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引 虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]拳鼻付出組 [向拝]不明
中 備	[身舎]本蔭股 [向拝]不明	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻 鮑	虹梁大瓶東、菱形、懸魚(猪目)、降懸魚	柱 間 裝 置	棟唐戸、落込板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、跳高欄、登高欄	床	不明
天 井	不明	須弥壇、扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木、朱塗(高欄、地覆、縁葛、茅負・裏甲)	飾 金 物 等	[垂木・高欄・脇障子]木口金物 [長押]隅金物 [棟唐戸]散金物
絵 画	なし	材 質 標	
彫 刻	[外部]虹梁(唐草絵様)、拳鼻、板支輪(波・菊)、蔭股(蒲公英・藤・万年青)、大瓶東、菱形(波) [向拝]水引 虹梁・海老虹梁(唐草絵様)、柱(波の絵様)		



写138-2 全景



写138-3 正面・向拝柱



写138-4 背面・側面



写138-5 海老虹梁・組物



写138-6 二重虹梁・妻飾



写138-7 軒・組物

ことができない。妻飾りは虹梁大瓶束で笈形、猪目懸魚である。彫刻は軒支輪（菊水）、幕股（蒲公英、藤、万年青）、向拝柱（波絵様）に用いられているが、比較的質素な設えである。塗装は高欄、軒の茅負・裏甲等の朱漆のみであり、全体としては素木造の様相である。「上野国神社明細帳」には大正4年(1915)に幣殿が追記されており、この幣殿によって向拝部分の軒や虹梁などが隠されている。

まとめ

大宮巖鼓神社は約1,500坪の広い境内で、樹齢800年ともいわれる樺の古木や多くの木々に囲まれ静か

な景観となっており、真田家から社領を付せられるなど歴史の古さを感じることができる。本殿は質素な素木造で経年の風雨にさらされた観があるが、千木や堅魚木を載せた春日造の建築様式が良く保たれた社殿である。

(宮田賢二)

【参考文献】

『原町誌』原町誌編纂委員会 昭和35年

『吾妻地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会
昭和54年

141 (岩下)菅原神社 [(いわした)すがわらじんじゃ]

表141-1

神社名	菅原神社	所在地	吾妻郡東吾妻町岩下1581
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 菅原神社
主祭神	菅原道真公	神事	春季大祭(2/25)、秋季大祭(11/25)、五社祭(5/3)
創立・沿革	創立は不詳。建長年間(1249~1256)に京都北野天満宮を勧請した。累代海野家が奉仕している。天保5年(1834)に社殿及び古記録等悉く焼失し、天保15年(1844)に再建して現在に至る。明治10年(1877)に相殿5座を合祀して翌年には村社に選定されている(『吾妻郡社寺録』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置(図141-1、写141-1)

国道145号線を中之条町から西に向かい、旧岩島中学校を過ぎてから北西方向の町道に反れてJR吾妻線の踏切を超えて、應永寺の懇門の前を通り過ぎると赤い鳥居のある参道入り口に至る。参道を北に向かって進むと正面に石段と木製の鳥居があり、更に両脇の狛犬を見て石段を6段ほど登ったところで境内に入る。境内から南に向かって振り返ると参道の前面は吾妻川に向かってゆるやかに開けている。境内に入ると正面に拝殿があり、その奥には高さ1.2mほどの石垣の上に幣殿を兼ねた本殿覆屋があり、

拝殿と一体となって社殿を構成している。左手には土蔵造りの神庫、右手奥には石垣の上に神楽殿があり、神楽殿の前庭から右に少し下がって社務所がある。社殿の背後は山地となっており杉の木立に囲まれており、境内や参道には随所に梅の木が植えられている。



写141-1 境内全景

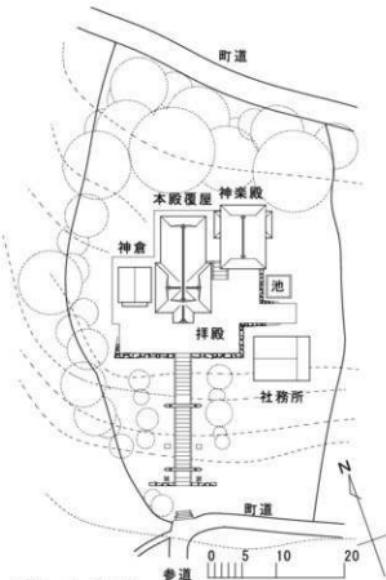


図141-1 配置図

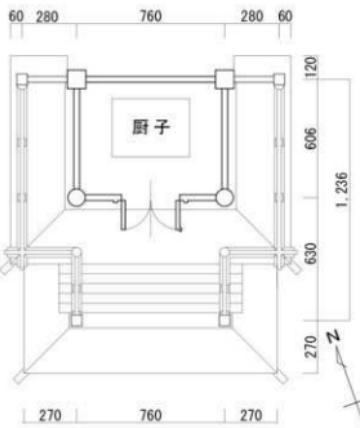


図141-2 平面図(本殿)

由来および沿革

創立は不詳であるが、「吾妻郡社寺録」によれば建長年間(1249～1256)に京都北野天満宮を勧請し、累代海野家が奉仕している。「貞享三丙寅年(1686)九月岩下村御検地水帳」には「宮建有之天満宮境内別当三東院」と記されている。天保5年(1834)に火を失し社殿及び古記録等悉く焼失した。「吾妻郡神社要項」では天保15年(1844)再建としている。明治10年(1877)に相殿5座を合祀して翌年には村社に選定されている。明治40年(1907)には岩下村の4社を合祀し、大正4年(1915)には神饌幣帛供進神社となっている。

表141-2 本殿

建造年代／根拠	嘉永5年(1852)／棟札	構造・形式	一間社闊木入春日造(0.76m)、側面1間(0.61m)、向拝1間軒唐破風付、板葺
工 匠	[大工]棟梁 當所 日野吉重郎、相京又右衛門、日野跡右衛門、片貝定吉 [彫工]八崎宿 秋原米庶(棟札)	基 础	不明
軸 部	[身舎]丸柱・角柱、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手扶	組 物	[身舎]四手先、(腰組)三手先 [向拝]連三斗2段変形
中 備	[身舎]嵌込彫刻 [向拝]嵌込彫刻	軒	二軒垂木、板支輪(彫刻)
要 鈴	懸魚(鯉)、笈形	柱 間 装 置	桟唐戸、板壁
締・高欄・脇障子	三方博縁、跳高欄、登高欄、脇障子(彫刻)	床	拭板張
天 井	なし	須弥壇・屏子・宮殿	扇子(黒漆)
塗 装	素木、朱塗(桟唐戸)、黒塗(垂木、屋根)、極彩色(支輪・中備彫刻、嵌込彫刻)	飾 金 物 等	[隅又首・隅木・垂木・尾垂木]木口金物 [長押]隅金物、破風飾 [桟唐戸]散らし金物、擬宝珠
繪 画	なし	材 質 摘	
彫 刻	[身舎]長押(絵様)、側壁(孔子と匡人)、木鼻(獅子)、支輪(菊水)、脇障子(人物)、隅木下(蟹) [向拝]柱・水引虹梁(絵様)、海老虹梁・水引虹梁上(龍)、手扶(牡丹)、木鼻(正面45度に獅子)、兎毛通(鳳凰)		



写真141-2 全景



写真141-3 向拝



写真141-4 組物、支輪



写真141-5 腰組、支輪、彫刻



写真141-6 嵌込彫刻、脇障子



写真141-7 高欄擬宝珠

本殿 (図141-2、表141-2、写141-2～141-7)

建造年代は、棟札により嘉永5年(1852)の上棟である。なお、右脇障子の接する高欄擬宝珠の金具には「安政6年(1859)己未正月」、左手前の擬宝珠には「セハ入浦野塗右衛門」の刻みがあり、上棟の後に取付けられたものと考えられる。正面1間、側面1間の春日造板葺で、向拝は1間軒唐破風付である。三方にくれ縁と彫刻の脇障子、跳高欄と擬宝珠の登高欄を設けている。向拝は絵様の彫刻を施した角柱に龍の彫刻を載せた水引虹梁を掛けて、龍の丸彫影刻の海老虹梁で身舎と繋いでいる。組物は四手先で腰組が三手先、軒は二軒垂木垂木、妻飾りは燕懸

魚である。正面に朱塗に梅鉢の紋を配した両開きの棟唐戸、両脇壁に梅と孔雀の嵌込彫刻がある。左右側面と脇障子には孔子などのはめ込み彫刻がある。向拝の獅子木鼻は首を45度に曲げて正面に向いている。本殿には背後の権現から黒漆の厨子が納められている。梅の木の彫刻が随所に見られ、長押などの飾り金物にも梅鉢紋が施されている。

拝殿（図141-3、表141-3、写141-8～141-10）

建造年代は、棟札により天保14年(1843)である。正面2間半、側面2間の入母屋造銅板葺き平入、向拝は1間で軒唐破風が付いている。拝殿の背後は後補の幣殿と覆屋の棟が一体となり、拝殿の棟の上に載って正面に千鳥破風を付けて、全体としては権現造に近い様相を呈しており、本殿は覆屋の中に鎮座している。基礎は切石で土台を設けている。正面側面三方に切目縁を設けているが脇障子や高欄はない。向拝は波の絵様の彫刻を施した水引虹梁を掛け、その上に組物と彫刻を置いて虹梁と菖蒲桁を載せて、海老虹梁で身舎と繋ぎ、牡丹の彫刻の手挟を付せ、海老虹梁で身舎と繋ぎ、牡丹の彫刻の手挟を付

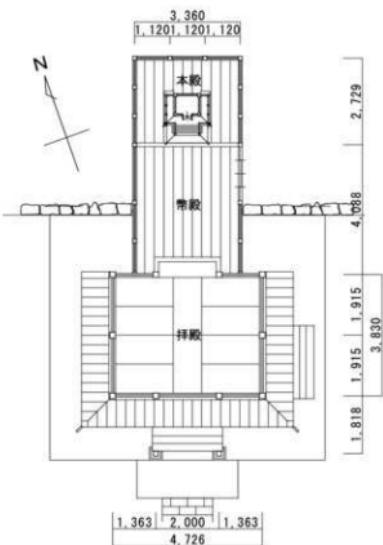


図141-3 平面図(社殿)

表141-3 拝殿

建造年代／根柢	天保14年(1843)／棟札	構造・形式	正面4.73m、側面3.83m、入母屋造、平入、向拝1間軒唐破風付、千鳥破風付、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]棟梁 當所 相京又右衛門、日野吉十郎、山野弥五郎、片貝常右衛門、日野彌右衛門、三鶴邑 高橋廉太郎、相京庄吉、片貝定吉 [彫工]米野宿 萩原米齋、同苗定運(棟札)	基 础	基礎 基壇、切石基礎
軸 部	[身舎]角柱、長押、虹梁、貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]平三斗(正面のみ) [向拝]平三斗2段変形
中 備	[向拝]彫刻(龍)	軒	[身舎]一軒繁垂木 [向拝]二軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁大斗附木、笈形、懸魚(鯉)	柱 間 裝 置	蔀戸、舞良戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁	床	畳敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、黒(垂木)、朱(化粧裏板)	飾 金 物 等	[鰐木]木口金物、破風飾
絵 画	天井画(人物、龍、花鳥風月54枚)	材 質	檜
彫 刻	[身舎]拳鼻、虹梁(絵様) [向拝]水引虹梁・海老虹梁(絵様)、水引虹梁の上(龍・人物)、兎毛通(鳳凰)、木鼻(獅子、狛)、手挟(牡丹)		



写141-8 正面

写141-9 向拝上部

写141-10 海老虹梁、組物

けている。妻飾りの蕉懸魚には六葉ではなく梅鉢の紋が付いている。内部の組物は平三斗が正面虹梁の上にのみにある。天井は格天井で、銘はないが人物・動物・花鳥風月など54枚の天井絵がある。

まとめ

菅原神社は旧岩下村の村社であり、春季例大祭、秋季例大祭及び五社祭では氏子で構成された太々神楽が奉納され、地域の氏神様として崇拝されている。社伝によれば、享保年間(1716~1736)に村民の依頼により寺子屋を開いており、安政年間(1854~1860)には、沢を挟んだ東側の應永寺を借りて教場を拡張し、明治初期までの約160年にわたり多くの

子弟を指導したとされている。本殿は小規模ではあるが軒が四手先、腰が三手先で多くの彫刻が施され彩色もされて華やかな社殿である。棟札によれば彫工師は勢多郡花輪村の出身で八崎宿の萩原米麿である。それより前の拝殿の彫刻も萩原米麿と定運の手によるものであり、この地域でも歴代の花輪村の彫工師が大いに活躍していることがわかる。

(宮田賢二)

【参考文献】

『吾妻郡社寺録』西毛新聞社 昭和53年

『吾妻郡神社要項』神社庁吾妻支部 令和元年

142 (箱島)甲波宿祢神社 ((はこじま)かわすくねじんじや)

表142-1

神社名	甲波宿祢神社	所在地	吾妻郡東吾妻町箱島1136
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 甲波宿祢神社
主祭神	速秋津彦命、速秋津姫命	神事	春祭(4/15)、秋祭(9/最終土曜日)
創立・沿革	延暦4年(785)早良親王の謀反に組したため此の地に流された小野金善が、川島鎮座の甲波宿禰神社から勧請したと伝えられている。寛文4年(1664)大明神免として田畠の神領があった。祭典は別当の万福寺住職が奉仕していたが明治になって神官となった。明治元年(1868)神祇官布告によって宿禰大明神から甲波宿禰神社と改称した。また、同じ年に別当院社務所の火災により古記録類は悉く焼失した(『あがつまあづま』・『吾妻郡社寺録』)。		
文化財指定	甲波宿祢神社の彫刻・御輿(町重文 昭和48年3月)、甲波宿祢神社の大ケヤキ(町天記 昭和48年3月)		

位置・配置 (図142-1、写142-1)

県道渋川東吾妻線を西に向かい東吾妻町に入ると間もなく右に箱島郵便局があり、その先を鳴沢川に沿って300mほど吾妻川方面に向かうと右に大きなケヤキやスギに囲まれた境内がある。周辺は400mほど先の吾妻川に向かって河岸段丘を形成している。境内南側の町道に面した参道入り口には社名標、旗掛石、石鳥居(享保19年(1734)建造)がある。石疊の参道を進み西に曲がると正面に拝殿、左右に石灯籠と狛犬が配置されている。本殿の北には

町指定重要文化財の御輿(天正3年(1575)の作と伝う。)を納めた境内社がある。境内は町指定天然記念物の大ケヤキなど多くの樹木で囲まれており、境内西側には58社に及ぶ末社の石祠が配置されている。



写142-1 境内全景

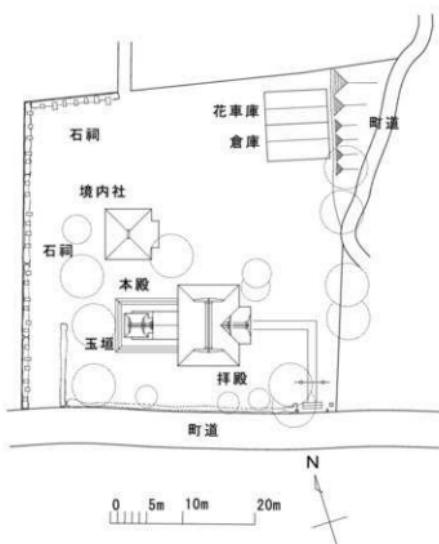


図142-1 配置図

由来および沿革

村誌『あがつまあづま』及び『吾妻郡社寺録』には、延暦4年(785)早良親王の謀反に組したため此の地に流された小野金善が、渋川市川島鎮座の甲波宿禰神社から勧請したとしている。寛文4年(1664)大明神免として田畠の神領があった。祭典は別当の万福寺住職が奉仕していたが明治になって神官となった。明治元年(1868)神祇官布告によって宿禰大明神から甲波宿禰神社と改称した。また、同じ年に別当院(万福寺)社務所の火災により古記録類は悉く焼失している。

本殿 (図142-2、表142-2、写142-2~142-7)

棟札は不明であるが、拳鼻や海老虹梁の唐草の巻きと棊股の様子から建造年代は18世紀前期と推定する。なお、「吾妻郡社寺録」によれば石鳥居の建造年である享保19年(1734)の建立であるとしている。一間社入母屋造銅板葺で向拝は軒唐破風付き、軒は二軒繁垂木として大床を三方に廻し嵌込彫刻の脇障子を設けている。組物は身舎が出組、向拝は平三斗と菖蒲押出しを支える組物を一体としている。中備は棊股、軒支輪は蛇腹支輪とし、妻飾は虹梁大瓶束で燕懸魚を設けている。正面扉の裏には昇龍と降龍の一対の墨絵が描かれており、狩野良宣通信の銘がある。本殿は屋根付きの玉垣で囲われて東向きに鎮座

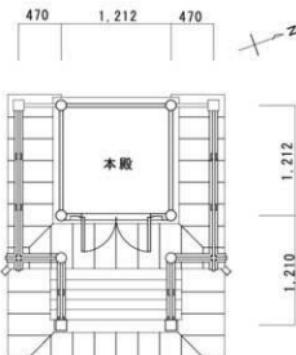


図142-2 平面図(本殿)

表142-2 本殿

建造年代／根拠	18世紀前期／建築様式	構造・形式	一間社入母屋造(1.22m)、側面1間(1.22m)、向拝1間軒唐破風付、銅板葺(当初板葺)
工 匠	不明	基 础	不明
軸 部	[身舎]丸柱、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引 虹梁、海老虹梁、手挟	組 物	[身舎]拳鼻付出組 [向拝]平三斗2段変形
中 備	[身舎]本棊股 [向拝]本棊股	軒	二軒繁垂木、蛇腹支輪
妻 飾	虹梁大瓶束、懸魚(燕)	柱 間 裝 置	棟唐戸、板壁
縁・高欄・船脛子	三方切目縁、跳高欄、登高欄	床	拭板張
天 井	板張	須弥壇、扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、檍彩色(彫刻)	飾 金 物 等	[長押]隅金物 [隅木・垂木]木口金物、破風、擬宝珠
繪 画	棟唐戸裏(昇龍降龍墨絵)狩野良宣通信(墨書)	材 質	檍
彫 刻	[身舎]虹梁(唐草絵様)、拳鼻、棊股(鳥・竹・牡丹)、大瓶束菱形(波)、脇障子(菊水) [向拝]水引虹梁・海老虹梁(唐草絵様)、棊股(牡丹)、手挟(波・花)、木鼻(獅子・象)		



写142-2 正面



写142-3 側面



写142-4 海老虹梁・組物



写142-5 向拝



写142-6 向拝木鼻・棊股



写142-7 向拝裏側

している。拝殿との間は後に増築された幣殿で接続されており、本殿の軒から下は左右が透明のガラス窓になっていて外部から本殿の様子が見える。

拝殿（図142-3、表142-3、写142-8～142-10）

棟札は不明であるが、正面虹梁や海老虹梁の唐草の様子から建造年代は18世紀後期と推定する。正面3間侧面2間の入母屋造平入銅板葺きで千鳥破風を付け、向拝は軒唐破風付きである。軒は二軒繁垂木で、切目縁を三方に廻し嵌込彫刻の脇障子を設けている。組物は身舎が二手先、向拝は連三斗と菖蒲桁を支える組物を一体としている。軒支輪は二重で波と菊の彫刻支輪とし、極彩色の痕跡が認められる。天井絵は狩野派の物であるとされていたが、経年により劣化したことから、生涯学習事業として地域の人達の手で書き直してある。彫刻は向拝の水引虹梁（波の絵様）やその上の龍、柱（地紋）、兎毛通（鶴）、軒支輪（波）、木鼻（獅子12頭）、脇障子（人物）など随所に用いられている。なお、脇障子や木鼻の彫刻は町指定重要文化財である。

まとめ

甲波宿祢神社は吾妻川の構成する河岸段丘の箱島の丘陵地に鎮座しており、下流に向かって祖母島の武内神社（明治2年（1869）までは宿禰大明神と称した。）と川島の甲波宿祢神社との3社が2km程の間隔で並んでいる。祭神は川の神であり、3社の由来は不明であるが興味深いものがある。本殿は手挾や

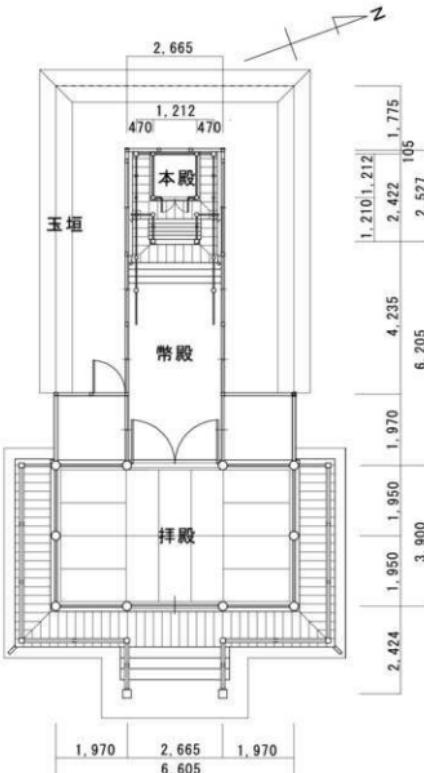


図142-3 平面図(社殿)

表142-3 拝殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	正面3間(6.61m)、側面2間(3.90m)、入母屋造、千鳥破風付、平入、向拝1間軒唐破風付、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	礎 切石独立基礎、礎盤
軸 部	[身舎]丸柱、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、菖蒲虹梁	組 物	[身舎]二手先、(内部)出組 [向拝]連三斗2段変形
中 備	[身舎]板壁 [向拝]嵌込彫刻	軒	二軒繁垂木、支輪
妻 飾	二重虹梁、大瓶束菱形、懸魚(無)、木連格子	柱 間 装 置	戸戸、板壁
緑・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、壹高欄、脇障子	床	疊敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗・黒塗(垂木・芽負・木負・隅木・破風・懸魚)、極彩色(木鼻・隅木彫刻・手挾・軒支輪)	飾 金 物 等	[銅木・垂木]木口金物
絵 画	天井画(花鳥風月)	材 質	檜
彫 刻	[外部]虹梁(唐草絵様)、木鼻(獅子)、隅木下(蟹)、組物(象)、支輪(波・菊)、脇障子(仙人と唐松・仙人と大和松) [向拝]水引虹梁(波絵様)、海老虹梁(唐草絵様)、柱(地紋)、木鼻(獅子・狛)、中備(龍)、兎毛通(鶴)、拝殿の彫刻は町指定重要文化財		



写142-8 正面



写142-9 向拝



写142-10 身舎組物・彫刻

脇障子に水流の彫刻が施され、拝殿の軒支輪や水引
虹梁の絵様も水流で虹梁の上には龍の彫刻が嵌め込
まれており、川の神を祀っている様子がわかる。

(宮田賛二)

【参考文献】

『あがつまあづま』あづま村誌編纂委員会 昭和40年

『吾妻郡社寺録』西毛新聞社 昭和53年

143 (桐生)天満宮 ((きりゅう)てんまんぐう)

表143-1

神社名	美濃宮	所在地	桐生市天神町1-2-1
旧社格	県社	所有者・管理者	宗教法人 天満宮
主祭神	大穂日命、菅原道真公、祓戸四柱	神事	初詣、成人祭、初天神、節分追難祭、歓学祭、夏越大祓、敬老祭、七五三祭、納天神、除夜祭
創立・沿革	起源は景行天皇の御世まで遡るといわれるが、觀応年間(1350)には京都北野天満宮より菅原公の御分靈を戴いて合祀され「桐生天満宮」と改称、桐生領54ヶ村總鎮守と定められた。天正19年(1591)に桐生新町(当時は荒戸新町)の町立てに際して現在地(赤城の森)に遷座された(天満宮由諸書)。		
文化財指定	天満宮社殿(本殿・幣殿・拝殿)(県重文 平成2年9月)、天満宮末社春日社(市重文 平成3年11月)、桐生市桐生新町(国重伝建 平成24年7月)		

位置・配置 (図143-1、写143-1)

天満宮はかつて「西の西陣、東の桐生」と謳われた織都・桐生市の中心にあたる本町通の起点に鎮座し、市街地は鳥居前町として形成・発展し、現在に至っている。

境内は南端の位置に一の鳥居が設けられ、直線上に120mの位置に本殿、幣殿、拝殿が一体となった権現造の社殿(県指定重要文化財)が南面して建っている。この細長い境内は中央付近に石の太鼓橋があり、南側には末社機神社と手水舎がそれぞれ南面、西面して建ち、北側は社殿を中心にして、東面して社務所、社殿西側に神楽殿、神撰所(旧神輿倉)が東面して建ち、社殿背後には、攝社三社が西より八幡社(建物なし)、赤城社、春日社(市指定重要文化財)が南面して建っている。

由来および沿革

起源は景行天皇の御世まで遡るといわれ、その後は文治3年(1187)から当地を支配した桐生家が代々の守護神として崇敬し、觀応年間(1350~1352)には



写143-1 境内全景

京都北野天満宮より菅原公の御分靈を戴いて合祀され「梅原天神」と称され天正19年(1591)には桐生新町(当時は荒土新町)の町立てに際して現在地(赤城の森)に遷座された。のちに「桐生天満宮」と改称、桐生領54ヶ村(現在のほぼ桐生広域圏)の總鎮守と定められた。

当宮の社殿は近世神社建築の典型とされる権現造の形式で精巧で華麗な彫刻が施され、当時の画工が描いた「天満宮本社幣殿拝殿妻之図」と共に平成12

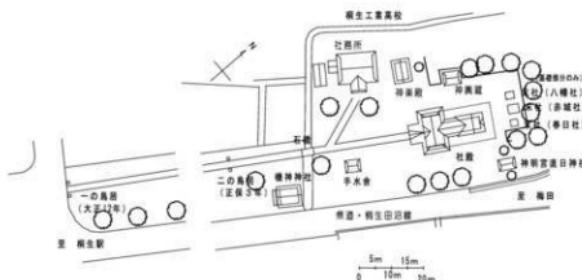


図143-1 配置図

年(2000)に県の重要文化財に指定された。社殿の建造年代は本殿・幣殿が安永7年(1778)～寛政5年(1793)、拝殿は享和2年(1802)とされ、18世紀末の代表的な神社建築として重要な位置を占めている。

末社春日社は棟札等具体的な年代を示すものは残されていないが隨所に室町時代後期の特徴を残しており、天正から慶長年間の建造と推定され、当地方の古建築の貴重な例として、平成3年(1991)11月に市の重要文化財として指定された。尚、当社殿は平成15年(2003)12月～同17年12月、春日社は平成17年(2005)5月～同18年(2006)2月に保存修理工事が行われた。

本殿 (図143-2、表143-2、写143-2～143-7)

本殿は正面3間(3.63m)、側面2間(2.42m)、向拝1間(2.27m)の三間社流造で背面には軒唐破風があり、屋根は瓦棒形銅板葺である。本殿・幣殿は明和8年(1771)発案・企画、安永7年(1778)起工、寛政元年(1789)上棟、寛政4年(1792)寺社奉行披露、寛政5年(1793)遷宮開帳と発案から上棟まで18年を要している。寛政元年の上棟時の棟札に大工や彫刻師の名が記されていた。大工の町田主膳は大隅流林兵庫の系統で、彫刻師として記されている関口文治郎とは文治郎の出世作の頃からの付き合いと伝わる。身舎の柱は丸柱に精巧な彫刻を施し漆塗り

で仕上げてある他、胴羽目には「本朝二十四孝の話」。腰羽目には「唐子遊びの図」を中心に靈獸や獣、植物等本殿の柱から細部に至るまで贅を尽くし

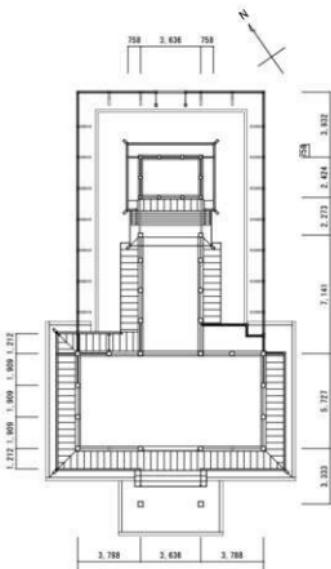


図143-2 平面図(社殿)

表143-2 本殿

建造年代／根据	寛政元年(1789)／棟札	構造・形式	三間社流造(3.63m)、側面2間(2.42m)、背面軒唐破風風、向拝1間。瓦棒型銅板葺
工 匠	[大工]大棟梁：町田主膳藤原宗信、棟梁：同藤原宗邦 他15名(当園山田郡龍舞村) [彫工]物形柱梁：関口文治郎有信、福源田次郎、尾池伝次郎 他5名(当園多郡田沢村)	基 础	礎 龜腹・地覆石、壇上積は一部自然石埋込
軸 部	[身舎]丸柱(粽)、地覆土台、腰貫、頭貫、長押 [向拝]角柱、地覆土台、虹梁、海老虹梁、腰長押	組 物	[身舎]と様三手先組、尾垂木 [向拝]平三斗、実肘木
中 備	[身舎、向拝]彫刻嵌込	軒	地垂木、打越垂木等本繁垂木、茨垂木、蛇腹支輪、彫刻支輪
要 節	二重虹梁大瓶束、化粧棟、化粧垂木、彫刻嵌込	柱 間 裝 置	[正面]両開扇桟戸 [背面]羽目板張
縁・高欄・脇障子	[浜縁]切目縁 [大床]切目縁 [脇障子]彫刻、跳高欄	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	朱塗、彩色、極彩色痕跡(胴羽目彫刻、嵌込彫刻、彫刻支輪)、金箔(木鼻)	飾 金 物 等	八双金物・小口鏡・妻拝・脇障子等
絵 画	不明	材 質	檜・銀杏・松等
彫 刻	[向拝]中備(龜)、手挾(牡丹・金鶏)、海老虹梁(菊)、木鼻(牡丹・獅子) [身舎]角柱(几帳面)、丸柱(龜)、長押(地紋彫)、胴羽目(24孝)、腰羽目(唐子遊)、木鼻(獅子・猿)、尾垂木(靈獸)、柱外部(龍・植物)、支輪(波・植物・飛龍等)、堺琶(鳥・植物等)、腰木鼻(麒麟)		



写真143-2 本殿全景



写真143-3 向拝の龍



写真143-4 向拝の木鼻



写真143-5 妻面の彫刻



写真143-6 胸羽目の24孝



写真143-7 腹羽目の唐子

た彫刻が施しており、優れた18世紀末の神社彫刻の中でも特に質の高い作品である。

胸羽目等の多くの塗装は報告書では「彩色」となっているが現況では下塗りの白色が残る程度で色彩はほとんど分からなかった。半面彫刻の素晴らしさは際立って見える。柱や頭貫、各長押には朱塗り、胡粉塗や彩色の痕跡が見られ、一部木鼻には金箔押をした生彩色の技法も見られる。

寛政元年の棟札には宿方として「当国山田郡仁田山村 田村利八」の名がある。田村利八は大間々「穴原薬師の樓門」の仁王像の仏師として名を残し、最後の仕上げの金箔押、色彩の段階で地元の仏師がかかわっていたと推測できる貴重な資料でもある。

表143-3 幣殿

建造年代／根拠	寛政元年(1789)／本殿の棟札	構造・形式	正面1間(3.65m)、側面4間(7.14m)、両下造、瓦棒型銅板葺
工 匠	本殿と同じ(同一棟札)	基 础	柱筋地覆石(加工石)、内部は自然石の東石
軸 部	丸柱(粽)、頭貫、頭貫、地覆土台(両側)	組 物	〔身舎〕と様出組斗拱
中 備	嵌込彫刻	軒	二軒繋垂木
妻 飾	なし	柱 間 築 置	火灯窓(内障子付)、板戸両開、板壁
縁・高欄・脇障子	切目縁、跳高欄	床	床板張
天 井	板天井・格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、彩色、極彩色痕跡(嵌込彫刻、彫刻支輪、木鼻)	飾 金 物 等	頭貫、頭貫、小口巻
繪 画	〔室内〕壁画(鶴と松・神獸)、天井画(花鳥)	材 質	檜・銀杏・松 等
彫 刻	〔外部〕柱・長押(地紋彫)、木鼻(獅子・牡丹)、羽目板(鳥・植物)、支輪(波・龍)、琵琶板(鳳凰)、火灯窓(龍)、窓下(牛)、縁下支輪、琵琶板(軍配・波植物・猫) 〔内部〕組物(牡丹)、支輪(波・菊)		

幣殿 (図143-2、表143-3、写143-8～143-10)

幣殿は正面1間(3.65m)、側面4間(7.14m)の切妻造瓦棒型銅板葺で両妻側は本殿と拝殿に繋がっている。本殿の棟札から幣殿も同一時期、同時施工である。幣殿は廊下状の建物で、両側には火灯窓が続く。火灯窓には登り龍と下り龍が彫られていて報告書では金箔とあるが現在では素地仕上げのようである。火灯窓の下には天神様の故事に習い、伏せた牛が彫られている。

柱は本殿の様な複雑な彫り物でなく幾何学的な地紋彫(屈輪紋)が施されている。幣殿内部は拝殿の一部であると共に本殿の正面になるので組物に簾彫りの彫刻、彫刻支輪とし、極彩色で仕上げてある。天井は格天井で格間に絵画(花鳥)が描かれ



写真143-8 火灯窓に牛



写真143-9 床下琵琶板に猫



写真143-10 内部の彫刻と天井絵

ている。室内にあるため保存状態が良く、天井絵や支輪の色彩は当時の様子をとどめている。

拝殿 (図143-2、表143-4、写143-11~143-13)

拝殿は正面5間(11.15m)、側面3間(5.75m)、向拝1間(3.33m)の入母屋造平入、瓦棒型銅板葺で正面に千鳥破風、向拝は軒唐破風、背面は幣殿と繋がっている。棟札は享和2年(1802)のものが残されておりそれによると「大工棟梁 町田兵部」らの名は記されているが、彫刻師の名前はない。建造年

代は虹梁の絵様の形式からも棟札通りであるころは間違いなく、彫工は報告書では触れていないが、数は少ないが彫刻の質は高く、兎毛通や軒支輪の彫刻にしても本殿彫工の文治郎と推定できる。

外部は地味であるが内部の拝殿中央間には四季の草花を題材とした天井絵が残されており、中央の鏡天井部分には一際大きく龍の墨絵が描かれ「可菴源武清謹筆」の墨書きが残されていた。これは谷文晁の高弟の「喜多武清」の事で廻りの20枚には彼の弟子と思われる者の名がみえる。

表143-4 拝殿

建造年代／根据	享和2年(1802)／棟札	構 造 ・ 形 式	正面5間(11.15m)、側面3間(5.75m)、入母屋造、瓦棒型銅板葺、正面千鳥破風、向拝1間、軒唐破風付
工 匠	[大工]棟梁町田兵部藤原栄清 他11名(上野国山田郡龍舞村)	基 础	切石、自然石、切石礎石
軸 部	[身舎]丸柱(粽)、礎石建、頭貫、台輪、腰貫、虹梁 [向拝]角柱、虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]和様出組斗拱実肘木 [向拝]平三斗、秤肘木 [内部]出組拳付
中 備	大瓶束(彫刻)、一部彫刻支輪	軒	二軒垂木 [唐破風]茨垂木
妻 飾	実肘木虹梁大瓶束、懸魚(六葉)	柱 間 装 置	[正面]両折戻戸戸、上戸戸。下堅舞良戸 [側面]引違舞良戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、脇障子(板)	床	床板張
天 井	格天井、棹縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素地 外部部分彩色(白)	飾 金 物 等	破風板拌
絵 画	[中央間]天井画(龍と花)「可菴源式清謹筆」(墨書、落款)	材 質	不明
彫 刻	[向拝]兎毛通(鳳凰)、海老虹梁・水引虹梁(絵様) [外部]頭貫(龍) [中備]大瓶束 [千鳥破風]幕股 [内部]差鶴居(絵様)		



写真143-11 兎毛通の鳳凰



写真143-12 東と支輪の龍



写真143-13 本殿の天井絵

表143-5 末社春日社

建造年代／根据	桃山時代(16世紀末期から17世紀初頭)／木鼻・幕殿・海老虹梁等の彫刻の特徴	構造・形式	一間社流造(1.23m)、側面1間(1.00m)、向拝1間 板葺屋根
工 匠	不明	基 础	切石、礎石、床石据付
軸 部	〔身舎〕丸柱(粽)、腰貫、頭貫、切目長押、内法長押 〔向拝〕面取角柱、海老虹梁、水引虹梁	組 物	〔身舎〕平三斗組、実肘木 〔向拝〕連三斗、実肘木付
中 備	板(幕股の痕跡)	軒	二軒繁垂木、打越垂木、飛燕垂木、地垂木
妻 飾	二重虹梁上大瓶束 木鼻付、猪目懸魚(六葉)	柱 間 装 置	〔正面〕板戸(彫刻入り)
縁・高覧・脇障子	〔大床〕三方拭板、脇障子(板)組高欄、登高欄擬宝珠	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素塗、彫刻彩色、壁板(彩色の痕跡)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉・檜 他
彫 刻	〔向拝〕虹梁・海老虹梁(錦型絵様)、木鼻(象鼻形) 〔身舎〕頭貫(錦型絵様)、木鼻(絵様)、正面扉(竹)、妻虹梁(錦型絵様)、破風板(蕉懸魚中央六葉)		



写143-14 妻面の彫刻



写143-15 向拝の木鼻



写143-16 妻面の虹梁

末社春日社（図143-3、表143-5、写143-14～143-16）

春日社は正面(1.23m)、側面(1.00m)、向拝(1.18m)の一間社流造で板葺屋根である。屋根の仕上げは銅板であるが当初は板葺であった。棟札やそれに替わるものはないが、身舎の庇の軒桁や垂木に見られる反り増しを始め妻虹梁には獸が口を開けて、材をくわえている様な八双起源の彫刻や要所に見られる彫刻の装飾、特徴ある木鼻等は江戸時代には見られない室町時代後期の特徴をよく残している。このことから建造年代は桐生新町が創設されたと伝わる天正年間(1573)から慶長年間(1615)と推定された。この時期はまさに天満宮が当地にご遷座された天正19年(1591)とほぼ符合するもので現存する桐生市の建造物としては最古のものであり当地方の古建築の遺構として極めて貴重な文化財である。

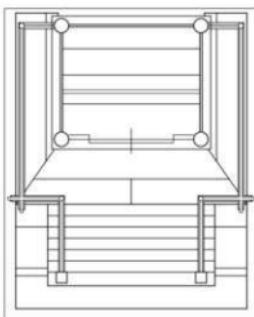


図143-3 平面図(末社 春日社)

まとめ

本殿、幣殿の彫刻は上段の二十四孝、下段の唐子遊びの他、全体の細部に至るまで施してあり、社殿全体が一つの彫刻作品であるかの様であることから、18世紀後半の代表的作品である。

今回の調査では確認できなかったが、「天満宮本社幣殿拝殿妻之図」では拝殿にも本殿同様彫刻が施されていたようである。拝殿には豪華な彫刻は見られないが、工事期間は本殿の起工から拝殿上棟まで24年もかかっている。

彫工の文治郎は県内外に優れた作品を残し国重文の指定を受けているものもある。本神社の社殿はそれらの作品にも引けを取らない出来栄えである。

又、当神社には末社春日社の他にも機神神社や手水舎・末社赤城社・神楽殿等、歴史的価値のあるものや、彫刻を含めた装飾技術的の価値のあるものもある。

(下山 彰)

【参考文献】

- 『天満宮社殿（本殿・幣殿・拝殿）三棟保存修理報告書』
宗教法人 天満宮 平成18年
- 『天満宮末社春日社保存修理報告書』宗教法人 天満宮
平成21年
- 『桐生の町と近代化遺産』桐生市教育委員会 平成9年
- 『桐生市史別巻』桐生市史別巻編集委員会 昭和46年

146 (皆沢)八幡宮 ((かいざわ)はちまんぐう)

表146-1

神社名	八幡宮 ¹²	所在地	桐生市梅田町4-6914
旧社格	無格社	所有者・管理者	宗教法人 八幡宮
主祭神	足利忠綱 ¹³	神事	春の例祭(毎年4月第3日曜日)
創立・沿革	平家滅亡後に上総介義兼を頼っていたが、ゆえあってこの地に落ち及び戦死した田原又太郎忠綱という平家の武士の靈を鎮め祀るために創建されたという。また「下野神社沿革史」によると創立は建久5年(1194)である。享保4年(1719)に宗源宣旨を賜り、正一位八幡宮となつた。皆沢の地はもともとは栃木県に属していたが昭和に入つてから桐生市に合併された。		
文化財指定	皆沢八幡宮本殿1棟(市重文 平成11年8月)		

位置・配置 (図146-1、写146-1)

(皆沢)八幡宮は桐生市本町通りを梅田町方面に向かい梅田ダムに至り、梅田湖を渡って栃木県佐野市田沼町に抜ける道路沿いにある。元は栃木県安蘇郡飛駒村であったが、昭和43年(1968)の越県合併により桐生市に編入された。境内は西側を県道に接している。南に正一位八幡宮の額を掲げた石鳥居を設置

し、北に向かい地区集会所や社務所を抜け石段を上ると本殿覆屋がある。本殿覆屋は木の茂った高台にあり、境内社として三社相殿(神武社、菅原天神社、雷電社)弁天社が祀られている。

由来および沿革

『下野国誌』に「忠綱明神安蘇郡彦間村の貝沢といふところにあり。足利又太郎忠綱の靈を祀るところなり。佐野軍記を考うるに忠綱は平家滅亡後上総介義兼朝臣をたのみて隨從しけるが、ゆえ有りてここに來りて自害す。これによりて義兼朝臣その靈を鎮め祀る。」とある。また「下野神社沿革史」(明治35年(1902)、風山広雄編)によると「当社は(中略)建久五年(1194)三月十五日の創立に係る。(中略)敵軍のひきいる一頭の白犬あり、公の跡をおうて來たり遂に其の所在を見出しがに知らしむ。時に

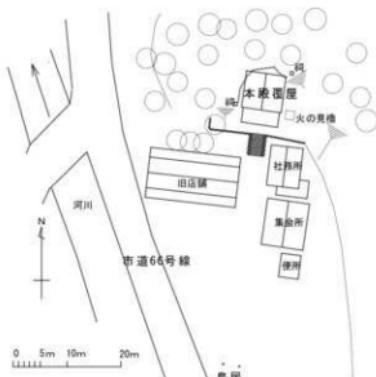


図146-1 配置図



写146-1 境内全景



図146-2 平面図(本殿)

敵将某はるかに之を見て、山鳥の羽すげたる征矢を番えて公を射る。忠綱ついに死す。土民その死骸を現今の社地に埋葬して其の靈を祀り、入彦間郷の鎮守と崇む。これその由緒の概要なり。爾來入彦間郷内にては白犬を飼い、山鳥の羽毛を携うることを忌むの伝承あり（下略）』とある（『桐生市史別巻』より）。そして、聞き取りしたところ、その伝承は今でも残っているという。

ほんてん
本殿（図146-2、表146-2、写146-2～146-7）
本殿の構造形式は一間社隅木入春日造で向拝1間

を備えている。屋根は柿葺で軒唐破風、千鳥破風がある。妻飾は二重虹梁大瓶束菱型付で、軒は二間繁垂木で彫刻板文輪がある。基礎は基壇2段の上に亀腹石を置き、土台の上に丸柱を立て頭貫で受けている。組物は、身舎外部は三手先、腰組も三手先で、尾垂木、隅尾垂木には豪華に神獣の彫刻が施されている。中備も身舎外部は詰組三手先で彫刻があり、向拝は幕股の上に平三斗実肘木付となっている。浜床を持ち四方を切目縁が廻り、彫刻脇障子を配している。彫刻は前述の他、身舎外部には胴羽目板、腰羽目板、彫刻持送、小壁などが、向拝には軒唐破風

表146-2 本殿

建造年代／根据	18世紀後期／建築様式	構造・形式	一間社隅木入春日造(1.68m)、側面1間(1.56m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、柿葺
工 匠	【影工】星野東溪(嘉永4年(1851)の墨書き)	基 础	自然石基礎、基壇2段の上に亀腹石
軸 部	【身舎】丸柱、地長押、内法長押、頭貫 [向拝] 角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	【身舎外部】三手先 [腰組] 三手先 [向拝] 鼻付連三斗実肘木付
中 備	【身舎】詰組、三手先 [腰組] 嵌込彫刻 [向拝]	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻) 幕股の上、平三斗実肘木付
妻 飾	二重虹梁大瓶束、折上支輪	柱 間 装 置	両間戻唐戸、落込板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠付登高欄、跳高欄、彫刻	床	拭板張
天 井	竿縁天井		須弥壇・扇子・宮殿
塗 装	朱塗、檍彩色(彫刻)、朱・黒(棟戸戸、組物)、朱(高欄)、黒(垂木)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	【身舎外部】虹梁(絵様)、尾垂木・隅尾垂木・詰組(象、龍、蟹、狛、鳳凰)、頭貫木鼻(獅子頭)、胴羽目(故事などの彫刻)、小壁(菊、流水)、脇障子(鳥)、板支輪(波) [腰組]持送(彫刻)、腰羽目(菊、波など) [向拝] 水引虹梁・海老虹梁(唐草絵様)、木鼻(獅子頭、象)、手挾(牡丹籠彫)、兎毛通(鳳凰)		



写146-2 隅木入 春日造



写146-3 向拝 正面



写146-4 身舎 組物彫刻



写146-5 腰組 彫刻



写146-6 背面 脇羽目板



写146-7 海老虹梁 手挾

兎毛通、木鼻の獅子と象、手挾の籠形の牡丹など豪華に埋め尽くされている。背面の桐羽目板は平面的な浮彫だが、側面に「^(嘉永)加永四亥 三月廿九日出来上州勢多郡荻原村 星野東渓 行年八十才」という墨書がある（嘉永4年（1851））。のことにより、建造時でなく幕末に嵌込んだものである。向拝水引虹梁、海老虹梁は唐草絵様で、海老虹梁の反りはなだらかである。軸部は素木、彫刻は極彩色で、唐戸は朱と黒、組物・高欄は朱、垂木は黒となっていて対比が美しい。

本殿建造年は明らかではないが、尾垂木彫刻、四方縁などに18世紀後期の特徴がみられる。本殿内部には忠綱明神を安置した宮殿と神鏡、さらに宗源宣旨の木箱が置かれており、忠綱明神像の背面下部には天文12年（1543）の墨書がある。木箱の蓋表には「下野國安蘇郡入彦間村 正一位八幡宮幣帛」、裏には「享保4年（1719）4月13日 神祇管領兼敬」の墨書があった。又本殿覆屋の礎石に享保14年（1729）の刻がある。

まとめ

春日造には本来隅木がないが、当社は入母屋妻入のような隅木を用いている隅木入春日造と呼ばれる形式である。春日造では今回調査でみどり市大間々町小平の八王子神社があるが、こちらは棟札から延享4年（1747）に当地である下野国安蘇郡飛駒邑の大工が加わっていることがわかっている。桐生地域では春日造の数は少なく貴重であるが、以前は栃木県であった皆沢（飛駒地区）の地理的要因によるかもしれない。

由緒については平家滅亡後の悲劇が語られ、彫刻も大変見事である。忠綱明神像の墨書・天文12年（1543）、宗源宣旨・享保4年（1719）、覆屋礎石・享保14年（1729）、背面彫刻の墨書・嘉永4年（1851）などがあり、歴史的にも重要な神社である。

（板川多恵子）

【参考文献】

- 『桐生市史別巻』桐生市史別巻編集委員会編 昭和46年
- 『桐生のまちと近代文化遺産』桐生市教育委員会 平成9年
- 『古建築の細部意匠』近藤 豊 昭和47年
- 『桐生市指定重要文化財（建造物）指定理由』平成11年

149 栗生神社（くりゅうじんじゃ）

表149-1

神社名	栗生神社	所在地	桐生市黒保根町上田沢2238
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 栗生神社
主祭神	栗生左衛門頼方	神事	春のお祭り(4/15)、秋のお祭り(11/15)
創立・沿革	境内の由緒書きによると祭神は新田義貞の功臣の栗生左衛門頼方という。武運・火代の神として信仰されているが、新田義貞は1300年代の人物である事から、当初の祭神は別であったと思われる。		
文化財指定	栗生神社本殿(県重文 平成11年4月)、黒保根栗生神社の大スギ(県天記 平成9年3月)		

位置・配置(図149-1、写149-1)

黒保根の県道257号線を根利に向かって進み上田沢の田沢下付近で左手の田沢川を渡る。後は案内板にしたがってひたすら山道を進むと石の鳥居が現れそこが駐車場になっている。鳥居の先の石段を上ると手水舎があり、なお進むと長屋門に至る。門を潜ってさらに石段を23段ほど進むと神社の前にである。境内は正面に拜殿、左手の神楽殿があり、右に進むと大きな杉の木があり、杉の木の右手には太郎神社、左奥には覆屋の中に栗生神社の本殿が見える。

由来および沿革

口伝によると草創は慶雲4年(707)と口承されている。祭神は明治10年(1877)の神社明細帳では栗生

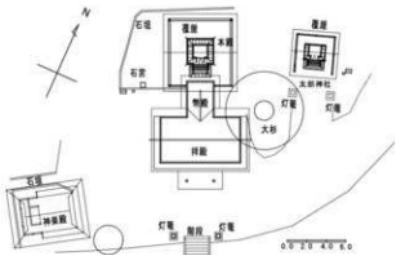


図149-1 配置図



写149-1 草生神社境内

左衛門頼方と記されている。頼方は新田義貞の功臣にして勇猛の武将として名を馳せ、古来より武運、火伏の神として崇拝されている。新田義貞は1300年代の人物である事から、当初は産土神を祀ってあったのかもしれない。

明治42年(1909)には近在の他の神社を合併し、村社格で田沢神社と改称されたが現在では「栗生神社」となっている。この時の文書では地番が変わっていたが神社の配置は現在と相違はなかった。

太郎神社は足利忠弘を祭神としている。桐生市梅田町の皆辻八幡には忠弘の祖父に当たる忠綱が祀ってある。忠弘は承久の乱の時、後鳥羽上皇方につき、幕府軍に敗れはしたが、活躍し名を残した。

本殿(図149-2、表149-2、写149-2～149-7)

本殿は正面1間(1.44m)、側面1間(1.28m)、向拝1間(1.58m)の一間社流造で鉄板一文字葺(当初、板葺)である。上棟は棟札によると寛政2年(1790)である。棟札の大工の名は出身地が明記さ

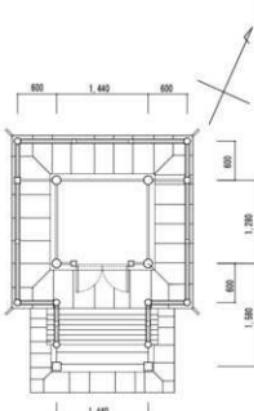


图149-2 平面图(栗生神社本殿)

写149-2 本殿

建造年代／根拠	寛政2年(1790)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.44m)、側面1間(1.28m)、向拝1間、鉄板一文字葺(当初板葺)
工 匠	[大工]大工棟梁 楽原要七康利、瀬谷弥一右衛門利安他仕手 [彫工]彫工武衛棟梁 関口文治在信 同仕手 福岡徳次他5名 [石工]信州伊那郡八手村 登口左衛門政春	基 础	自然石切石
軸 部	[身舎]丸柱、地覆長押、腰長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]三手先組 [腰組]四手先組 [向拝]連三斗3段変形
中 備	[身舎]幕板(植物) [向拝]彫刻(龍)	軒	[正面]打越二軒繁垂木 [背面]二軒繁垂木
要 飾	二重虹梁大瓶束、懸魚、朽隠	柱 間 装 置	[正面]雨間蟻番付棟唐戸 [背面]板壁
縁・高欄・脇障子	大床(四方)、浜床、浜縁、擬宝珠高欄、脇障子(彫刻)	床	[内陣]拭板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木 檜彩色痕跡(胴羽目彫刻、嵌込彫刻、彫刻支輪)、朱(高欄)	飾 金 物 等	唐棟戸、腰長押(金物の痕跡)
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[向拝]角柱(地紋彫)、水引虹梁(絵様)、中備(龍)、海老虹梁(絵様)、手挾(牡丹)、木鼻(模・獅子) [身舎]丸柱・長押(地紋彫)、幕板(植物)、木鼻(獅子)、胴羽目(唐子遊び)、脇障子(人物・虎)		



写149-2 本殿全景



写149-3 向拝の龍



写149-4 海老虹梁と手挾



写149-5 胴羽目の彫刻(唐子遊び)



写149-6 脇障子(老人と虎)



写149-7 妻飾りの彫刻

れていないが、名字から地元の職人と考えられる。建築様式は腰組を三手先とし、四方に大床をめぐらしている。大床には擬宝珠高欄を付け、脇障子に彫刻を施している。向拝の木鼻は模と獅子、中備は龍。手挾は牡丹の籠彫、三方の胴羽目には唐子、各長押や柱には地紋彫と全体に彫刻を施し、妻飾は二重虹梁大瓶束としている。建物の虹梁や海老虹梁にも18世紀末の特徴が表れており建造年代は棟札通りであろう。彫工は棟札にもある、地元沢入の関口文治郎で、本殿には文治郎晩年の特徴が表れている。

末社太郎神社 (図149-3、表149-3、写149-8～149-10)

太郎神社は正面1間(1.22m)、側面1間(1.10m)、向拝1間(0.94m)の一間社流造で鉄板一文字葺(当初板葺)である。もともと上田沢中組大宮川にあったものを明治25年(1892)の頃栗生神社の境内に遷座したものと棟札にある(「黒保根村誌」では明治10年(1877))。当初の棟札はなかったが、堂内に残された木片(旧建屋の階と思われる)に墨書きがあり、それによると上棟は宝曆10年(1760)彫工と

表149-3 東社太郎神社

建造年代／根拠	宝曆10年(1760)／内陣内に残された階の墨書き	構造・形式	一間社流造(1.22m)、側面1間(1.10m)、向拝1間、鉄板一字葺(当初板葺)
工 匠	【彫工】関口文治郎 階の墨書きより	基 础	自然石
軸 部	【向拝】角柱(几帳面)、水引虹梁、海老虹梁 【身 垂】角柱、地長押、内法長押、頭貫	組 物	【身舎】出三斗 【向拝】出三斗、平四斗
中 備	【向拝】幕股 【身舎】四方幕股	軒	【正面】二軒繁垂木 【背面】二軒垂木
妻 飾	桁隠、懸魚、虹梁大瓶束笈方付	柱 間 装 置	唐棟戸内開(軸間閉)
縁・高欄・脇障子	三方大床 浜縁	床	【内陣】拭板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、檜彩色旗跡(組物、嵌込彫刻、木鼻)、黒塗(扉)	飾 金 物 等	扉、釘頭、拝金物、長押、脇障子
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	【向拝】水引虹梁(絵様)、幕股(植物)、海老虹梁(絵様)、木鼻(獣・獅子) 【身舎】幕股(植物)、木鼻(拳)、脇障子(龍)		



写真149-8 神社正面



写真149-9 向拝の彫刻



写真149-10 身舎の状況

して関口文治郎の名が記されていた。手掛けた大工は棟札や墨書きが残されていないが虹梁の絵様から栗生神社とは別系統であり、時代も18世紀中頃の特徴が表れていることから墨書きにある宝曆10年であると考えられる。本殿には栗生神社ほどの豪華さではなく彫刻の剥落、各部の経年劣化、唐棟戸の剥奪等、傷みも多い。

まとめ

彫工の関口文治郎は地元の出身で、18世紀中頃から19世紀にかけては民間の寺社の彫刻が最も輝びやかになる時期に、その魁として活躍し、当神社には高度な彫刻技術によって伝統的な美しい彫刻を神社全体に施しており、同時に手掛けた桐生天満宮と共に県の重文に指定されている。又、各地に優れた作品を多く残し、国や県の重文の指定にと高評価を得ている。さらに本神社は多くの棟札を残し、時期と職人が明かであることや同じ彫刻師の初期と晩期が同時に見られる事からも、建築史上でも貴重な遺構である。太郎神社は傷みが多いが、地元醫光寺の欄間彫刻と共に文治郎の初期の代表作である。

(下山 彰)

【参考文献】

『黒保根村誌 別巻3』黒保根村誌刊行委員会 昭和63年
『勢多郡東村誌』勢多郡東村誌編纂室 平成10年

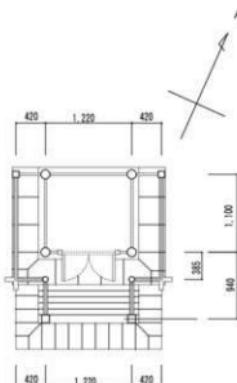


図149-3 平面図(太郎神社本殿)